九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近代ロシアの労働者と農民 : モスクワ地方の労働力移動をめぐって

高田, 和夫
九州大学教養部助教授

https://doi.org/10.15017/1914

出版情報：法政研究. 57 (1), pp.1-97, 1990-12-25. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

論説

近代ロシアの労働者と農民

――モスクワ地方の労働力移動をめぐって――

高田和夫

人民戦線の真の基盤はモスクワの外にあります。なぜなら、モスクワは急進的な左翼の運動を容易に組織できる都市ではありません。ここの住人は多くは官僚かまたは移民労働者です。（ボリス・カガルリツキー『モスクワ人民戦線』、柘植書房、一九八九年）

目次

一　はじめに
二　労働力移動の全般的傾向
三　農村共同体と労働力移動
四　中央工業地帯の労働力移動
五　モスクワ県の労働力移動
六　副業に携わる人たち
七　モスクワ市の労働力移動
八　ヒートロフカの人たち
九　おわりに

一　はじめに

一八六一年の農奴解放を中心とするいわゆる「大改革」時代に、ロシア国内の社会的再編は進行し、国民の大半を

占めた農民の社会的存在のあり方にも変化が生じた。その社会的再編過程を近代化とよぶか工業化とよぶか、ここではとりあえず問題とはしない。今回、特に関わってみたいのはそうした社会的変動に伴っていかなるタイプの人間が生み出されたかである。

このことをロシアにおける労働者階級の本格的な発生問題としてとらえることは確かに一つの視角であろう。実際のところ、同時代人たちは、権力側も含めて、この問題を意識した。特に出発したばかりのロシア・マルクス主義者は、彼らの存在理由をかけて、ことのほか熱心になり、変革主体としての労働者階級の存在を「実証」し、強調した（例えば、レーニン『ロシアにおける資本主義の発達』）。またデメンチェフのように革命運動とは全く無縁なゼムストヴォ統計家が自身が得た資料を操作して、「プロレタリアート」の発生に警鐘を鳴らすこともあった。

こうしたことは当然のようにソヴィエト史学界にも引き継がれた。「プロレタリアート史」研究は史学界の中で最も重要な地位を与えられ、それを主宰した歴史家には最大限の敬意が払われてきた。そこでは、農民とは質的に異なる労働者（階級）の存在が示され、「プロレタリアート」が主導した戦闘的な革命運動が描写され、そして労農同盟の必然性が述べられてきた。しかし、その起点におかれたのはいわば「存在すべき」労働者階級論であり、そのあとに続く議論もふくめて一連の歴史叙述でかなりの無理と単純化が行われてきた、というのがペレストロイカの進行にもかかわらず、今も変わらぬ私の印象である。

「存在すべき」ではなく、「存在する」労働者像の描出をなすことはこの国の政治史、社会史等の理解を深める基礎的な手続きの一つになるだろうと私は考えてきた。

ここでまず注目してよいことは、その「存在する」労働者はたえず移動していたことである。その過程で彼らはその社会的存在形態を維持したり、変化させたりして、ある者は本格的労働者へ至る道を選んだのであった。

無論、広大なロシアの大地にあって、地方や地域で人びとの生活様相は自ら異なったのだが、今回は「モスクワ地

方」（この定義は四節冒頭に示す）を選んだ。それは、文学的に言えば、もう一つの首都ペテルブルグ地方とは相違して人為的なること乏しく、最もロシアらしい自生的な地域であった。私は当該地がもった政治・経済上の影響力、革命史上の位置付けに高い評価を下し、ここでの議論が普遍性をなるべく獲得するよう期待することにした。

もう一つ率直に着目してよいだろう点はロシアの標準的な（とりあえずこう言っておく）農民が決して専業ではなく、兼業農民であったことである。「農民＝手工業者 крестьяне-промышленники」として副業に携わる農民あるいは「分与地持ち労働者 рабочий с наделом」といわれた農民、彼らのあり方を、副業の型が定まったと考えられる一八七〇年代末から一八八〇年代にかけてを中心に追跡することがここでの基本作業となる。

そうした人々のモスクワ市を中心とするモスクワ地方内部での動きは、本論に示すように自己完結的であったから、この一定の拡がりの中で人々がどのような日常性を持ったかを問題としたい。モスクワ市を中心とする、いわば対流的な移動の具体相に触れてみたいと思う。従って、本論の構成はロシア全体での人の動きを概観した後、中央工業地帯、モスクワ県、モスクワ市の順序で顕微鏡の倍率を上げていき、最後にモスクワ市の代表的な貧民窟ヒートロフカの人たちを見て、行きついた先を確かめてみたい。私はこれらの作業を通して、民衆の立ち居振る舞いを規定する「場」の問題を提起したいともひそかに考えている。

従来、このような問題関心に立つ研究は決して多くはないのだが、関連するものわずかに言及しておきたい。

ソヴィエトの研究者の仕事では、今回初めてヴァシーリエフ論文「ロシアにおける工業プロレタリアートの形成の特徴づけによせて」（正式な原語タイトルは本論の注で示す。以下同じ）を読む機会を持てたことをまず喜びたい。『シャフトゥイ教育大学紀要』といった目立たぬ雑誌に載ったこともあり、一九五七年に出たこの論文の存在に私は今まで気づかなかった。これは独自に労働市場論を展開していて、スターリン体制下でも学問的批判に耐えうるものを生み出そうとする強靱な意志が存在していたことを思わせる作品である。

やはり現在でも私はロシコーヴァの仕事を評価したい（私の評は『ロシア史研究』二五号、一九七六年六月に書いた）。一県を工業発展郡と未発展郡に分けて考察する大切さを彼女から教えられた。

ロシア近代史研究の泰斗ルインジュンスキーの作品のうち、特に一九八三年の『一九世紀後半資本主義ロシアの農民と都市』で示された問題意識は私に近いものだが、氏の視角への不満は本論に示した。しかし、経済外的強制力のもつ重要性について改めて学ぶところ多く、ここではそれを農村共同体との関連で扱うことにした。もう一人、チーホノフの場合、よく参照したが、結局彼の結論は単純な農民層分解論の繰り返しであって、私を満足させなかった。

一方、欧米の研究ではかつて書いたように（『ロシア史研究』三四号、一九八一年一一月）、私はジョンソンの仕事に親しみを感じており、その気持ちは今も変わっていないが、彼の枠組全体については異論がある。しかし今はそれをここに書く余裕はない。

一九八五年のブラドレーの著作『ムジークとモスクワ人　後期帝制ロシアにおける都市化』はモスクワのエリート層（Muscovite）とそこへやってくる農民（Muzhik）との緊張関係の中にこの国の都市化の特徴をさぐり、社会政策史研究に新分野を切り拓く労作であり、教えられるところ多く、特記しておきたい。

ゼムストヴォによる調査報告、センサス資料、同時代人の発言などを利用したが、自ら限られたものでしかない。論点の指摘のみに終わり、十分な論証をともなっていない点もあると思うが、指摘をうけて、更に考えたい。

二　労働力移動の全般的傾向

ロシア史を何よりも植民の歴史と見なして独自な歴史理論を主張したソロヴィヨフら国家学派を引き合いに出すま

でもなく、農奴解放後の改革期ロシアにあって、特に一八六七年以降に[1]大量の出稼ぎ現象が出現したことを多くの論者が指摘してきた。例えば、一八八七年にA・マカレンコは出稼ぎ問題を論じて『法律通報』誌に「労働者の巨大な大軍があたかも何か撃退し難いような力に追い立てられるかのようにロシアを浮浪している」と書いた。[2]二〇世紀初頭になっても、ヘルソン県ゼムストヴォに勤務した医師H・И・テジャーコフは、ロシア中央部の出稼ぎ農業小営業者は少なくとも五〇〇万人以上を数え、彼らは南部と南東部のステップ黒土帯へ行き、毎年早春から晩秋まで広大な地域を人々は移動して「カオス的状況」を呈し、まさに「さまよえる労働者ルーシ бродячая рабочая Русь」とでもいえると述べた。[3]

この時期のロシア社会史、労働史、農民史等の文献に目を通す人は容易に類似した文言を見い出すであろうから、ここではこれ以上の引用は不要であろう。まずは出稼ぎ отхожий промысел, отходничество なるものについて、その内容、原因、理由などはひとまず横において、右の二人が驚くほどのその数量的規模と地域的偏差をみてみよう。

この論点について最良の資料は一八九二年に刊行されたC・コロレンコの著作[4]であることは依然として疑いえないであろう。国有財産省農業局が［農業］労働者の移動と雇用に関する資料収集のため農事通信員制度を定めて得た二万通以上の手書き回答の整理と加工を一八八九年、同省のコロレンコに依頼したのである。彼は人口密度と労働力需要度によって欧露五〇県を三グループに分け、中央部及び西部の二一県で五一五万余人が労働力余剰、南部と東部の八県で一四三万人が不足、北部二一県で四五五万余人が余剰と計算した。全国的には過剰人口状態である。コロレンコの分析はかなり乱暴な印象を受けるのだが、それでも最大の利点は骨太に労働者移動の大きな傾向を三つ示したことであろう。それは①人口稠密県から南部・東部へ、②同様にペテルブルグとモスクワの両首都へ、そして③最大の過剰人口帯である中央部と西部の内部での独自な移動である。[5]

コロレンコの議論に一八九七年センサスの結果等を加味して、それをわずかに修正してみせたのが一九七八年のБ

・B・チーホノフである。二人の議論などから**図1**のごとく欧露の地帯別労働力移動について線引き出来る。太い実線の北側のAとその南側で太い破線の北側のBが過剰人口地帯で、それを両首都と太い破線の南側のCが吸収するのだが、両首都へはAが、CへはBが主に労働力を供給するといった地帯別分担がある。このことのイメージ形成に資する数字をチーホノフから引用しよう（**表1**）。

さらに**図1**は農業出稼ぎ労働者の供給地帯を主にシャホフスコーイに依拠して書き込んである。ケバで囲まれた地帯がそれで、基本的にはBと重なっている。特に中心となる地方は点々で示された中央黒土帯であることも判明する。

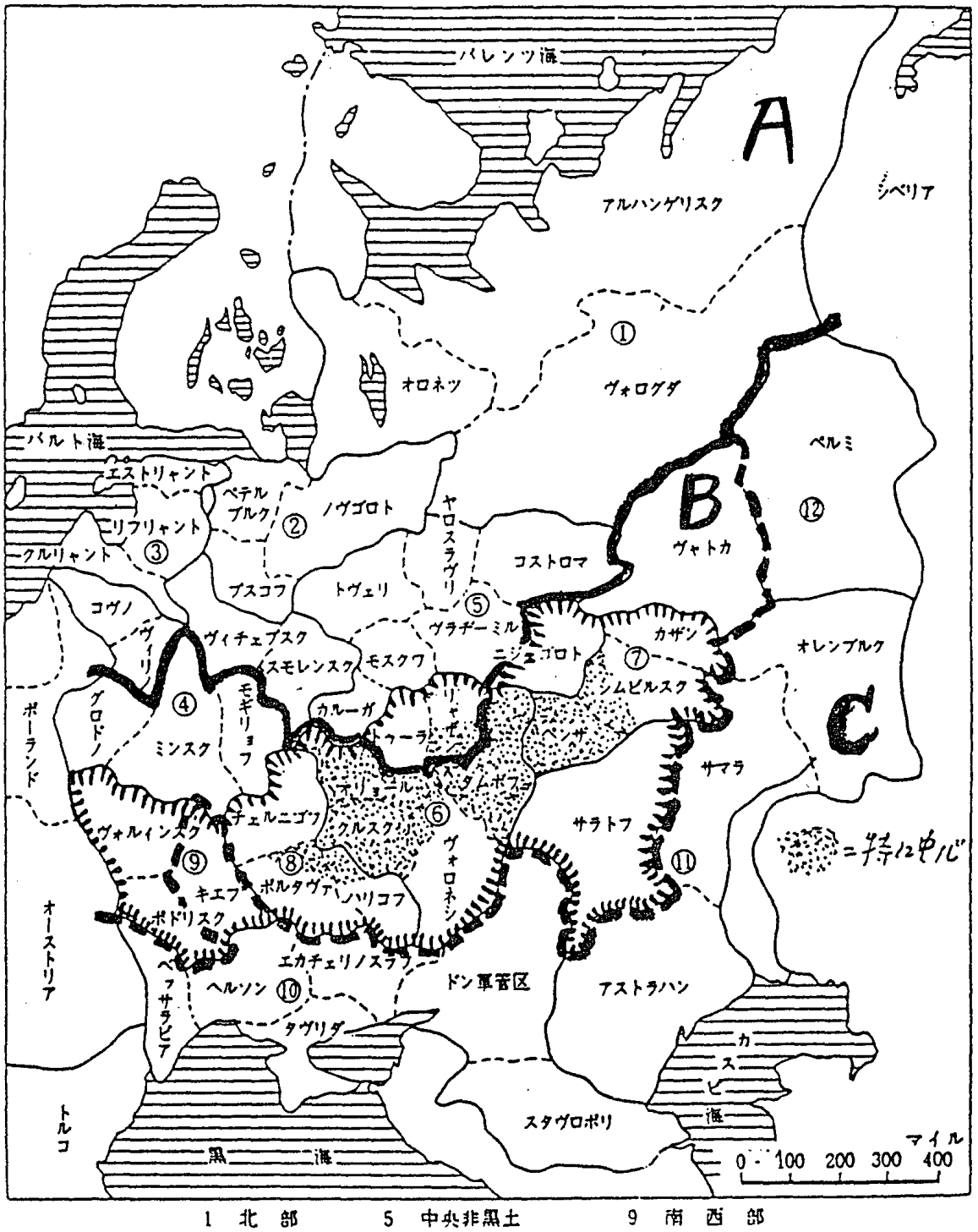
このような労働力移動の全国的傾向を踏まえて、私が今回問題としたいモスクワ地方を含む最大の余剰労働力をかかえた中央部、西部について今一度コロレンコを見ると、彼は従事先が明確な部分として次をあげている。①モスクワ県の余剰四〇万人はどこへも行かず、工場及び地元営業に主にモスクワとその周辺で従事する。②成人ユダヤ人九〇万人余はとくにポルタワ県とチェルニゴフ県にいて、商業をやっている。③テンサイ、タバコ、ジャガイモなどの専門的な栽培に七九万人余が従事している。④工場・鉱業労働者でモスクワ県を除く地方に三〇万人弱いる。⑤様々な地元クスターリ小営業をやる三〇万人がいる。これらを余剰総数とみられる五一五万余から引くと約二五〇万人が完全に過剰な労働力であり、この部分が出稼ぎ営業のため主に南部と東部へむかっているという。これは基本的には農業出稼ぎ者（あるいは移住者）であり、彼らは毎年春に自分の村を出て秋には戻る往復運動を行っている。①、④、⑤はこの地帯に独自な内部移動の内容である。③は南部への農業出稼ぎに加えられるテンサイ栽培従事部分とモスクワ市郊外に顕著に発展した園芸従事

（表1）移住者の主たる地方別流れ（1897年センサス）

1	工業・非農業	→	首都	80万6500人
2	中央農業	→	南ステップ	37万4000人
3	中央農業	→	首都	32万5500人
4	中央農業	→	西シベリア	30万7700人
5	中央農業	→	北カフカス	30万1300人
6	小ロシア	→	北カフカス	28万1900人
7	小ロシア	→	南ステップ	27万2900人
8	中央ヴォルガ	→	ヴォルガ下流・東部	27万0100人
9	西南	→	南ステップ	24万8400人
10	南ステップ	→	北カフカス	15万5500人

［典拠］Б. В. Тихонов. Указ. соч., стр. 39.

（図１）ヨーロッパ・ロシアの地帯別労働力移動と農業出稼ぎ労働者供給地帯



1	北　部	5	中央非黒土	9	南　西　部
2	北西部	6	中央黒土	10	南ステップ
3	沿バルト	7	中部ヴォルガ	11	南東ステップ
4	西　部	8	ウクライナ左岸	12	プリウラル

［典拠］は注（６）に示す。図の読み方は本文を参照されたい。
地図は有馬達郎『ロシア工業史研究』、東大出版会、 1973年から借用した。

部分に分けられるであろう。いずれにせよ、これらの動きのさらなる検討が本稿の課題になる。

さて、この国の旅券制度は移動の自由を制限したが、逆に労働力移動数は発行された旅券ないしビレット数により推測できる。勿論、この手の統計資料が実態をどの程度まで正確に反映したかはいつも議論があるところで、例えば、初の一八九七年全国センサスは住民を「実在かつ恒常的住民 наличное и постоянное население」と「登録住民 приписное население」に分け、出生地＝登録地を一年の半分以上はなれているか否かで分類する工夫をしたのだが、それとて真冬の一月になされたこのセンサスはたまたま多くが帰郷している短期出稼ぎ者を登録地における農民（крестьяне-земледельцы）と整理しているから出稼ぎを十分に反映してはいない。さらにこのセンサスは同一県内部での労働力移動を示していない。農民たちは旅券なしでしばしばちょっとした稼ぎに出ていたが、このような、特に中央黒土諸県に顕著で、クルスク県などではそうした者を「家の周りで（あるいは村の周りで）稼ぐ промышлять вокруг дома／вокруг села」とよぶ[7]ような手間稼ぎはどのような統計もそれを捕捉してはいない。もとよりこのような制約を受けながらも旅券統計は労働力移動の基本傾向を唯一示す資料である。

モスクワ地方を中核とする中央工業地帯が労働力移動の最も発展した地域であったことはミンツによる計算がよく示している。つまり、一八八一～九〇年の一〇年間に同地帯で旅券が一七八七万余通発行された（内訳は一～三ケ月もの六六五万余、半年もの六二二万余、一年もの五〇〇万弱）が、これは同時期の全国発行数の三七・八％を占めた（第二位は南西部一六・八、次いで中央黒土地帯一一・八）。当時、中央工業地帯の人口は全国の一九％弱であった。[8] ヴィフリャーエフはモスクワ地方は人口一〇〇人あたり旅券発行数が全国最高であったとする一八九六年の数値として、カルーガ県二〇・五、ヴラジーミル県二〇・四、トヴェーリ県一八・四、リャザン県一四・四をあげている。[9]

したがって、これから検討しようとするモスクワ地方の事例をみれば、ロシアの労働力移動のかなりの面が明らかになるはずであるが、既述のようにここでは農業出稼ぎは未発達であった。コロレンコの三大移動の①が目立たない

のである。[10]

何故、非黒土のモスクワ地方では農業出稼ぎが盛んでなかったのか。この論点を考えるのに格好の素材を提供するのがリャザン県の事例である。この県は南半分が黒土帯で北半分が非黒土帯に二分され、同一県内で労働力移動に関して全国規模の縮小版が観察されたといってよいであろう。カチョロフスキーと親交があった[11]著名なゼムストヴォ統計家のB・H・グリゴーリエフがリャザン県ゼムストヴォの委嘱で南部のラネンブルクスキー、ダニコフスキー、スコピンスキーの三郡につき住民経営調査を一八八一～二年に行った際、移住運動に関しても資料収集に努めたことがあり、その結果が『ロシア思想』誌に一八八四年、五回連載された。この長大なレポートで、彼は同県の南部と北部での人の動きの相違に次のように言及している。

非黒土の北部にははるかにクスターリ生産（大工、製紙、車輪製造等）が発達し、それに応じて手工業的な出稼ぎ小営業がなされ、「半営業的な農民 полупромысловый крестьянин」のタイプがみられる。[12] この北部は黒土の南部諸郡より著しく土地条件は悪いのだが、移住などは全くといってよいほど行われていない。[13] 出稼ぎは移住を抑制する面があるのだが、南部諸郡で最も普及したのは地主地でのデシャチーナ単位の土地耕作、日雇いといった農業出稼ぎか、モスクワ・ヴラジーミル地方の泥炭沼への出稼ぎ労働であって、[14] 不作・凶作の影響を彼らは直接受け、それが結果的に移住にまで至らせることになった。現にこの六年間の移住の五分の三以上は一八八〇年の不作から一八八一年におきているが、北部はこうした事態に無関係でいられたのである。[15]

ここでは農業出稼ぎがクスターリ的非農業的小営業出稼ぎに比べ、不安定なものであったこと、逆に言えば後者がより安定性を歴史的に有していたこと（非黒土地帯でのオブロク制の普及がその支払いのために出稼ぎを発展させたであろうこと）[16] は指摘されねばならない。

農業出稼ぎが不安定な収入しかもたらさないことは出稼ぎ目的先の穀物の出来・不出来に直接関わること故、それ

は農民個人ではいかんともしがたい性格を有した。通例、農業出稼ぎ者は冬服を質入れしてさえ路銀をつくり、春の始まりとともに家を出て求職したが、その動きは五月中旬には終わった。[17]

農業出稼ぎ、それも遠方へのものがいかに農民にとり不安定で困難なものであったかは南部や東部の農業出稼ぎ者受け入れ諸県のゼムストヴォが「治療＝食糧拠点 лечебно／врачебо-продовольственные пункты」を設置し、出稼ぎ者たちの支援にあたったことからもうかがわれよう。ヘルソン県の場合、一八七五年の第二回県医師大会で、流入する農業労働者問題が論点となったが、ようやく一八八九年に実態調査案をつくり、一八九二年に安価な食堂とそれに付設する無料救急医療所を設置し、翌年には全県一四ヵ所に「治療＝食糧拠点」を開設して全国的な注目をあびた。[18]流入労働者が職にありつけたのはふつうバザールであり、その日が近づくにつれ、ゼムストヴォが経営する「安い食堂」は繁盛し、バザール前の土曜日に最高潮に達したが、当日は雇用者を求めて流入者は食堂に入ることもせず、閑散となった。[19]全ての者が職にありつけた訳では無論なく、例えばシンビルスク県にある「治療＝食糧拠点」では一八九九年七月後半に登録された一〇二三人の全労働日は六六七九で、非労働日は四一一二であったというから、[20]仕事なし日が四割もあったのである。

グリゴーリエフはリャザン県南部から出た移住者の言葉を紹介して、移住に至った理由、原因を列挙しているが、そこには分与地の不足、その不都合な配置、厳しい借地条件、水不足・旱魃、燃料・食糧不足、重税、不作といった事柄が並んでいて、地元での農民にとり厳しい方向に安定した土地関係と本来的に不安定な自然条件とに板ばさみになっている黒土地帯農民の姿を一定想像しうる。農民自身によれば、前者の条件（土地関係）は移住に至る直接理由とはならず、後者のような非日常的困難さの突発がその引き金となる。[21]その際、親類からの呼び寄せや自由な土地へのあこがれも作用する。新天地でより良い生活が期待されるか否かを知ろうと農民たちは偵察（разведка）を派遣したりした。[22]

このような話を聞き取ったグリゴーリエフはロシア農民に特有な落ち着かなさ（непостянство）、「移住熱」（пер-еселенческий зуд）や遠方からのたよりを軽々に信じる性向を指摘した。[23] 少なくとも黒土帯の農民の多くは自分の運命を改善することを期待して、決定的な契機のおとずれを待っていたように思える。だが、ここで大切な点は、最貧部分の農民たちのみが出稼ぎ、さらには移住に熱心であったのではないことである。出稼ぎについては、例えば同時代のカルイシェフが土地が保障されている中位の部分も出ているといい、[24] 最近ではルインジュンスキーが奥ヴォルガとプリ・ウラルの調査から遠方への出稼ぎ者は中水準の農民経営を維持しているとし、また少なくとも工業諸県では農民土地規模と農村から出る度合いとの間には直接的関連性はなく、むしろ分与地の多い「不在農家」がより多く見られるとする注目すべき発言を行っている。[25] この点は後にさらに検討したい。同様なことは移住についてもいえ、グリゴーリエフは移住にあたって農民の富裕度合いはさほど重要な役割を果たさないという。[26] 彼は共同体全体が移住した例を一つ、それも五家族一九人のごく小規模なものが三〇デシャチーナの分与地を一五〇〇ルーブリで売却して出ていったと記録しているだけだが、[27] 大量の移住がめったに起きなかった原因として大きかったのは財産の売却がむつかしかったことがある。[28] このことが移住運動を個別分散的なものにしたが、一八七七～一八八二年に移住した、彼が調査対象とした二一二五家族のうち一九六一家族について、移住時の持参金をみると、五〇～一五〇ルーブリが七四五家族で三八％と最多で、次いで一五〇～三〇〇ルーブリ層の二二％、五〇ルーブリ以下の二一％と続き、[29] 必ずしも決定的に食いつめた一家がほうほうの態で逃げ出したとばかりは見れないのである。

さて、本節の最後に触れたいのはいわば第二次的な労働力移動についてである。中央黒土地帯を中心とする農業出稼ぎの動きがおきたあと、当然その分だけ労働力は当地に減少するが、そこを狙って同じ黒土地帯内部の他所から余剰労働力が流入するのである。こうした動きの存在を明らかにしたのはシャホフスコーイであるが、[30] このような労働者の入れ替え現象は中央非黒土地帯でもみられた。例えばヤロスラブリ県では地元住民の多くが両首都へ小営業に出

たあと、農業労働者たちが他県から流入した。とくにアルハンゲリスク県シェンクルスキー郡とコストロマー県ブーイスキー郡からやってきた彼らを主人と息子をペテルブルグの居酒屋へ出した女が雇って農業をやるといった情景が広くみられたのである。[31]

(1) 農奴解放（一八六一年）以降すぐに出稼ぎが増加したとする俗説はさしあたりルインジェンスキーの指摘で否定されている。旅券発行数の変化をみると一八五九～六六年は農民が土地にいわば引きつけられた時期で、一八六七年から旅券の発行数は伸びている。П. Г. Рындзюнский. Крестьянская промышленность в пореформенной России. М., 1966, стр.54.

(2) А. Макаренко. Отхожие и кабальное рабочие.《Юридический Вестник》, 1887, №4, стр. 727.

(3) Н. И. Тезяков. Рынки найма сельскохозяйственных рабочих на юг России в санитарном отношении врачебно-продовольственные пункты, вып. 1, СПб., 1902, стр. 4-6.

(4) С. Короленко. Вольнонаемный труд в хозяйствах владельческих и передвижение рабочих, в связи со статистико-экономическом обзором Европейской России в сельско-хозяйственном и промышленном отношениях. СПб., 1892.

(5) Там же, стр. 93.

(6) 図1の典拠は次の通り。Короленко. Указ. соч., стр. 78-79. Б. В. Тихонов. Переселения в России во второй половине XIX в. по материалам переписи 1897г. и паспортной статистики. М., 1978. стр. 89-90. Н. В. Шаховской. Земледельческий отход крестьян. СПб., 1903, стр. 18. Доклад комиссии по оздоровлению хитрова рынка, состоящей при Санитаром отделе Императорского Русского Технического Общества. М., 1903. стр. 58.

(7) В. В. Тихонов. Указ. соч., стр. 108.

(8) Л. Е. Минц. Отход крестьянского населения на заработки в СССР. М., 1925, стр. 19, 25.

(9) П. Вихляев. Устойчивость внеземледельческих отхоже-промысловых заработков сельского населения в России.《Народное хозяйство》, 1900, №3, стр. 74.

(10) より早い段階では、Высочайши учрежденная комиссия для исследования железнодорожного дела в России. Доклад о передвижении рабочих партий по железным дорогам. СПб., 1881, стр. 38-39 が非農業的出稼ぎと農業出稼ぎで中央地帯

それぞれ北部と南部に二分している。

(11) 小島修一『ロシア農業思想史の研究』ミネルヴァ書房、一九八七年、三四―三五頁。

(12) В. Григорьев. Переселение крестьян Рязанской губернии.《Русская мысль》, 1884, №3, стр. 27.

(13) Там же, 《Русская мысль》, 1884, №2, стр. 40.

(14) Там же, стр. 70-71.

(15) Там же, стр. 74, 《Русская мысль》, 1884, №3, стр. 30.

(16) Н. Н. Владимирский. Отход крестьян костромской губернии на заработки. Кострома, 1927, стр. 58, 68.

(17) С. Короленко. Указ. соч., стр. 82-83.

(18) Н. Карышев. Народно-хозяйственные наброски. xxxv. К изучению наших отхожих промыслов.《Русское богатство》, 1896, №1, стр. 18-20, 23. Н. И. Тезяков. Указ. соч., стр. 14-20.

(19) Н. Карышев. Указ. статья, стр. 21-22. Н. И. Тезяков. Указ. соч., стр. 12.

(20) Н. И. Тезяков. Указ. соч., стр. 10.

(21) В. Григорьев. Указ. статья, 《Русская мысль》, 1884, №2, стр. 42, 54, 63, 66.

(22) Там же, 《Русская мысль》, 1884, №4, стр. 20, 23. 《Русская мысль》, 1884, №1, стр. 40.

(23) Там же, 《Русская мысль》, 1884, №2, стр. 41.

(24) Н. Карышев. Указ. статья, стр. 16-17.

(25) П. Г. Рындзюнский. Крестьяне и город в капиталистической России второй половины XIX века. М., 1983, стр. 84,111.

(26) В. Григорьев. Указ. статья, 《Русская мысль》, 1884, №1, стр. 40.

(27) Там же, 《Русская мысль》, 1884, №4, стр. 29.

(28) Там же, 《Русская мысль》, 1884, №2, стр. 55.

(29) Там же, стр. 44.

(30) Н. В. Шаховской. Указ. соч., стр. 65-66.

(31) С. Короленко. Указ. соч., стр. 291-292.

三　農村共同体と労働力移動

前節に簡単に見たようなロシア農民の大きな動きは社会的経済的な、時に政治的な沢山の変数からなる要因の組み合わせの結果に生じたものである。たしかにそこに経済的要因をよく見ることはおそらく正解なのだろうが、様々に経済外的制約の中に生きることを求められた彼らの場合、話はそれほど単純ではありえない。

ロシア農民にとり最も重要な準拠集団は農村共同体であり、それが時に家族や隣人といった原初的社会集団よりも重大な機能を果たした。周知のように、一八六一年の農奴解放令（農民一般規則）は村団（сельское общество）と郷（волость）を農村統治の基礎単位と定めた。郷は同一郡において、なるべく隣接する複数の村団から形成され、そこに加わる男子納税義務者を三〇〇人から二〇〇〇人までをめどとし、半径一二ヴェルスタ（一ヴェルスタは約一キロメートル）におさまる範囲とされた（四二、四三条）が、村団の方にはそうした規定はなかった。中央部ロシアではふつう村団は農村共同体（сельская община）と一致していた。そしてそこでは一共同体は一村落を形成していた（いわゆる単村共同体 простая община）。改革期モスクワ県の場合、全共同体に占めた単村共同体の割合は九四％以上であった。[1] 通例、二、三村から一〇村の複数の村落からなる多村ないし複村共同体（сложная／составная община）は北部諸県に普及し、さらに大規模な郷共同体（волостная община）も同様であった。

村団の意思は村会（сельский сход）で決定された。それを主宰したのは村長（сельский староста）である。村団は必要に応じて徴税人、穀物倉庫・学校・病院などの監視人、書記といった役職者を得ることが出来た（四六条）。村団はツァーリ政府の行政上の末端機関としての性格を有し、その徴税機能を重視する論者は、農奴解放後の農村共同体は「租税共同体（податная община）」として再編・強化されたという。[2]

今回、私は「租税共同体」といった側面にさらにこだわってみたいと思っているのだが、無論、村団＝共同体の機能ははるかに豊かであった。例えば、改革期共同体に関する好論文を書いたミローノフはその主要機能として一〇あげている。つまり、経済、課税、法、行政＝警察、統合、相互扶助、教育、文化、宗教、コミュニケーションである。[3] これらはいわば表向きの公的機能を果たす村団とふだんの日常的機能を果たす共同体が農民の世界に有する作用を微分したものであって、項目ごとにどちらかの機能に比重がかかるであろうが、同時にそれぞれが両面性をも持っていて、これらの順列組み合わせが創出するのは到底一筋縄では理解が遠く及ばないムジークの生活空間である。

こうしたことをいくらかは承知したつもりで、ここでは人々の移動に関わる村団＝共同体の規制力といったものを考えてみたい。従来、このようなことを論点にした研究者は少ないから、ここで基礎的な手続きが求められる。確認がまず必要なのは農民一般規則での当該問題の扱い方である。同規則第二部第五章の村団をめぐる脱退と登録及び第三部第三章の税支払いに関わる二つが関連箇所である。順次検討しよう。

第一三〇条は村団から農民が脱退（увольнение）し他身分へ移る条件として次を求めている。①共同体分与地利用を永久に放棄し、利用地を引き渡すこと。②脱退が兵役義務履行の障害とならないこと。③脱退者の家族に国、ゼムストヴォ、ミールに税の滞納がなく、翌年一月一日までに支払われること。④脱退者に対し郷役場に出された個人的な取り出て（請求）がないこと。⑤脱退者が裁判にかかっていないこと。⑥脱退者の両親が脱退に同意すること。⑦脱退者の家族で村団に残る年少者及び労働能力喪失者が自力で食べていけること。⑧脱退者が地主の分与地を利用していれば、それに支払われるべき義務に滞納なきこと。⑨脱退希望者は移動先の団（общество）からの受け入れ決定（приемный приговор）を提示すること。[4]

農民身分を捨てるために村団を脱退すれば、固定された土地への緊縛状態から脱することになるため一般にその人間はより多くの移動（可動）性を獲得するといってもよいであろう。しかし、身分制社会にあっては一身分からの脱

退は原則として他身分への編入を意味し、この場合は農村に代わる都市の幾つかの身分がその場を提供するだろう。この第一三〇条で最大のポイントは①の分与地放棄にある。一旦それを村団側へ引き渡してしまえば、その人間にとり戻るべき村はなくなる。真の意味で故郷を捨てることになる。さらに引き渡す以前に都市に生活基盤があることが必要となるが、これも一般にはむつかしく、実際には本論以下に見るように都市への出稼ぎを長年に渡って継続するなかで決断されることかもしれない。農奴解放令発布後九年間は旧地主が「後見人」として農民経営に公然と介入していたから、農民にとり、この離脱権が自分のものとなったのは一八七〇年以降のことである。[5] しかし、都市に所在する人々は身分的にあくまで農民身分を保持する都会人（крестьяне-горожане）であったとみて大勢に誤りはないであろう。

この第一三〇条に関連して、農婦のうち未婚者ないし寡婦に対する村団脱退条件は、分与地を利用していないことを前提にして、郷長が当該者の両親が脱退に同意していることと当該者が裁判にかかっていないことを証明すれば満たされた（第一三八条）から、この限りで彼女たちの条件はかなり緩和されていた。

さて、正確にいえば右に見た第一三〇条が対象としたのは農奴的従属から解放されたが「地主と義務的な土地関係にある」（第一五条）「一時的義務負担農民」であった。買戻しに入り農民を取りまく土地関係が変化すれば、自ら村団＝共同体の脱退条件も変わった。買戻し負担を全納した「完全所有者」は村団の同意なしに買い戻した土地を共同体利用地から切り離し、その分与地を私有へ移すことが出来た（買戻し規定第一六五条）。[6]「完全所有者」になることが出来たのは村団の最富裕者であったが、村団側は彼らにその買戻し地を分けようとせず、私有地を創出すると分与地の価値が下落するとして混在地制・割替地制の維持が実際にはなされたから、[7] この部分が農村に私的所有原理に立脚する財とサーヴィス、そして人間の容易な移動体系を樹立するようなことはのぞむべくもなかった。モスクワ県の場合、一八七〇年代末で全農民範疇を通して「完全所有者」は四％であった。[8]

一方、買戻し操作に入ったが全額納入してはいない「農民＝所有者」については買戻し規約第一七二条以下で触れられた。彼らは右に見た一般規約を尊重した上で、その脱退希望者は現に利用し買戻しに入っている分与地の全買戻し額の半分を支払い、当該者の属している村団が残り半分の支払いを請け合うことが脱退のための基礎条件となった（同規約第一七三条）。この場合、脱退する者はそれまで利用してきた自分の分与地の管理を村団にまかせてやはり無土地で出ることになるから、高額を支払った上で土地を失うまでして村団を脱退するような者が多いはずはなく、さらに買戻し金ないし国税の支払いを滞納している村団から脱退するには事前に県当局の同意が必要とされた（同第一七四条）こともその実行をむつかしくした。

このように身分間移動を強く制限した法的規制は農民たちを閉ざされた身分内部に押しとどめたのであるが、さらに一般規則第三部第三章は農民に課された国税・ゼムストヴォ税・ミール税の三つについていかに村団が責任をもって徴収するかを扱って税支払いに連帯責任 круговая порука 原理を導入した（第一八七条）から、農民と村団との間には求心力が働いたのである。当該問題で今日に至るまでほとんど唯一といってよい本格的研究を一八九七年に出したH・ブルジェスキーは、一八六一年二月一九日法で創出された税徴収保証システムは「連帯責任の完成されたタイプ」であり、連帯責任の名で共同体に税務につき十全な独自性が与えられ、滞納がない限りそれは完全な税務管理人であったというのだが[9]、そうした共同体の機能は続く第一八八条に示された滞納に対する強制取り立てによって法的に根拠づけられた。それは次の六項をあげている。①滞納者の所有する不動産からの収入を「滞納金に」充てること。②滞納者ないしその家族を賃稼ぎに出すこと。③滞納者に対する後見人を定めること。④滞納者の個人的不動産を売却すること。⑤滞納者がそれなしで済ませうる動産ないし建物の一部を売却すること。⑥滞納者からその播種地の一部ないし全分与地を取り上げること。このように村団に与えられた権限は強大であり、とくに④～⑥の三つは他の手段が無効であった場合に最後にとるものとされた[10]。こうした連帯責任制はモスクワ地方をふくむ中央部三六県に導入

され、ウクライナ、リトワなどの県には適用されず[11]、さらに男子納税者が二一人以下の小領地であったところも連帯責任制を免れた[12]。因にミローノフが算出したロシアの全共同体の平均規模は、一八七七～八年で、五四農戸・二九〇人であった[13]から、構成員数上連帯責任制をのがれえた部分はごく少数であったと推定される。

これまで述べてきたことは具体的には旧地主農に関わることである。カチョロフスキーが農奴解放後、旧地主農とくらべて多くの自由を享受し、共同体を最も発展、維持した部分として旧国有地農を「発見した」ことはすでに知られている[14]。そしてさらに旧御料地農を加えた三大範疇が改革期ロシアの農民を構成したのであるが、農奴解放時の欧露全体での人口割合は旧地主農を一〇とすると、旧国有地農は九で、旧御料地農は一といったところであったから、旧地主農は全農民の半分ほどでしかなかったのである。ここではあと半分の旧国有地農に焦点をあててみたい。

旧国有地農の方が旧地主農よりも恵まれた状態にあったことはよく指摘されている。例えば鈴木健夫氏はゼムストヴォ資料に依って、この改革期モスクワ県について旧国有地農の場合、成人男性一人あたり、分与地面積は七・〇デシャチーナ、租税額は一五ルーブリ二〇カペイカであったが、旧地主農の場合は同様に五・一デシャチーナ、二〇ルーブリ九〇カペイカとはるかに悪い条件にあったことを紹介している（旧御料地農は中間の条件[15]）。

旧国有地農村は一八六六年一月一八日法の実施過程で個々の郷単位を拡大したりしたが、全体として改革以前の土地分与やその共同体に多くみられた多農村型は維持されたといわれる[16]。

こうした旧国有地農と旧地主農が納税をめぐりかなり異なる扱いを受けていたことを指摘したのがブルジェスキーである。旧地主農の場合、すでにわれわれもみたように、共同体に税割当てや徴税を連帯責任においてまかせて政府は共同体の内部秩序に介入することを差し控えたのであったが、これに対し旧国有地農の場合、徴税は法において個々の税間で納入の割当てが定められ、法的規制を適用することで連帯責任自体はやめる方向にあった。つまり、こ

こでは政府の税務監視は地方長官 окружный начальник が一手に行い、彼は滞納取り立てよりも当座の税額の徴収に気をかけたのである。[17]

推測するに、旧国有地農の共同体では相対的に経済が恵まれていて滞納額が少なく、その必要が格別に認識されなかったのかもしれないが、連帯責任の名の下に構成員各自の行動をしばる度合いは少なかったようである。前に引用したグリゴーリエフもリャザン県の元国有地農の可動性の高さに注目している。彼は一八五八年の第一〇回人口調査から一八八二年までに黒土帯の同県南部三郡から三六六一家族二万二四三八人が移住し、そのうち元国有地農は一万五七一二人であったとしている（三郡の旧国有地農と旧地主農は各々一九万人、一八万人とほとんど同数であったから、移住率は二倍の差がある）。[18] 分与地に課される負担がより小さいからそれを共同体や個人に譲渡しやすいこと、そして一八六一年以前から彼らの間にあった（旧地主農にはありえない）移住「伝統」の存在をグリゴーリエフはこの理由にあげている。[19]

ここでも最貧農の喰いつめ者が故郷を捨てる図は描けそうもない。元国有地農のフットワークの良さは地主農が賦役を強いられていた時に農奴制下で出稼ぎをやり、その伝統が改革期にも生きていて、非農業的な採取業に関わる者（промышленник）の割合が多かった[20]といったことにも同じようなことが言えると思うのだが、残念ながら以下において旧国有地農にこれ以上特別なフットライトを当てることは出来ない。研究史のあり方にもわざわいされて、今の私にはそれを可能とする材料、資料がないのである。ここでは今後の論点を一つ指摘するにとどめておく。

このように、村団からの脱退は様々にむつかしく、連帯責任の所在も農民の移動を大きく制約したと考えられるが、実際の移動はすでに少しく触れたように旅券制度によってコントロールされていた。

農奴解放以降、正確には一八六三年以降、旅券の発行は地主の直接的決定によらず、郷役場（волостное правление）

が村長によるしかるべき確認をうけてのち行うこととなった（農民一般規則第五八条一〇項、第八四条八項）。村団＝郷、人格的には村長＝郷長（волостной старшина）が一般農民の移動をチェックする第一線に位置づけられた[21]。

この旅券取得は有料で、一八六〇年代末に半年旅券で八五カペイカ、一年旅券で一八ルーブリ四五カペイカであったとされ、金のない者は有効期間一～三カ月の安価なビレットを求めざるをえなかった[22]。また登録（＝出生）地の郷役場でのみ有効期間の延長をなしうることを原則としたが、一八七〇年になり農民は生地を離れた、恒常的な（労働）居住地にいたままで、郵送等によって帰郷せずに、旅券を更新しうるよう旅券制度は「本質的に緩和」された[23]。

旅券制度にまつわるこうした変化の一事例がよく示すように、農奴解放令発布時に定められた諸規範は時の経過とともに修正をこうむった。その過程は改革と反改革を繰り返し、一九〇五年革命に至るツァーリ権力上層部の試行錯誤の道程の一部をなしたのだが、ここでは行論にとり最小限度必要とする事柄を確かめておこう。

農奴解放後、相変わらず低位の生産性を示す農業構造、とくに一八六七～八年の飢饉が引き金となった租税滞納の増加がツァーリ政府に共同体的土地所有維持原理としての農奴解放令自体の見直しを強いた。一八六七年五月、買戻し金と滞納金との取り立てに苦慮しだした政府は村団を通り越して、それとは無関係独自に滞納者を稼ぎに出す権限を農地調停官（мировой посредник）に与え、さらに県知事には農地調停官とは関係なく、警察当局にその他の取り立て方策をとるよう命令する権限を付与した[24]。実際には農地調停官側の監視態勢が弱体であったためにこの措置はさしたる実効を伴わなかったのであったが、滞納を理由に公権力が共同体秩序に公然と介入する道筋がつけられたことは注目してよいであろう。その後、この分野での動きは一八七四年六月に至り、農地調停官から右の権限を剝奪して、それを郡警察署長（уездный исправник）に移轉させ、税務において全面的に警察権力に依存するところとなった。農民にとって、実質唯一の「ナチャーリニク」として郡警察署長が登場するのはこの時点からである[25]。こうした外部権力による規制を強化する一方で、一八六九年一一月には蔵相レイチェルンにより一時的義務負担農民が連帯責任制

を免除される共同体規模が男子納税者四〇人以下と拡大された。[26]

農奴解放令見直し作業の最初の中心となったのが一八七二年からの通称「ヴァルーエフ委員会」であったことは知られるが、ほぼ六〇年代一杯、内相をつとめたH・A・ヴァルーエフ（一八七二～八〇年は国有財産相）は首都ペテルブルグにあって地主Г・A・シチェルバートフ、ゼムストヴォ活動家П・Л・コルフとともに共同体原理への批判者としても著名であった。この委員会は共同体の解体こそいわぬが、それが農民経済に「好ましからぬ」影響を与えていると声明するにはばからなかった。同委は経営的関心を共同体外部にもつ農民には共同体からの脱退権を与えるべきであり、そうした者とは個人的土地所有者、継続して他所で土地を賃借している者、そして村団から遠方でたえず小営業промыслы をやっている者だとした。そして、一八七五年一月四日に出された、すでにみた買戻し規約第一七三条を実質上廃止する新しい規約は「農民＝所有者」が買戻し負担の半分を消化するといった厳しい条件をなくし、村団脱退希望者はその村団の同意及び県当局の許可を得さえすればよしとした。[27] この限りで村団からの脱退は容易になったのだが、[28] 一八七〇年代を通して連帯責任制（そして旅券問題）は立法的な見直しはなされなかった。

一八八〇年代、一連の租税改革を実施したブンゲは国家評議会で農民の「過度な負担」を語り、まず一八八一年一二月、買戻し支払い額を減額させると同時に一時的義務負担農の買戻し操作への強制的移行をなし、一八八二年以降段階的に人頭税を廃止して直接税から間接税へと転換した。この時、ブンゲは最終的には課税の身分的区別の廃止を目ざしたが、その実現は遠い将来（一九三〇年）においていたといわれる。[29] ツァーリ自身、一八八一年五月に国家評議会の意見を容れ、内務・大蔵両省に連帯責任制を、共同体的所有原理を乱すことなく、弱化ないし廃止する立法案の検討を命じたが、[30] ここには連帯責任制自体がむしろ滞納の原因になっているのではないかとする支配層改革派をとらえた根本的疑念が作用していた。ブンゲ自身は新しい税制運営の礎となるべく租税監督官制（податная инспекция）の十全な機能に期待したが、現実には農民の税務は「指導者も監督官もなし」[31]といったアナーキーな状態

に陥ったのである。

その一方で、一八八五年、モスクワ総督は労働者が工場主及び地元警察を通して旅券を交換する（обмениваться）ことを許す決定を出して[32]、右にみた一八七〇年代の旅券制度緩和路線を受け継いだ。

こうした緩和路線に対して、一八八〇年代末から九〇年代にかけてのいうところの「反動期」に共同体締め付け路線をとったのが内相Д・А・トルストーイであった。この路線は家族分割認可が従来、村団の単純多数決であったのを三分の二以上の賛成が必要とした家族分割制限法（一八八六年三月一八日）[33]、土地割替に一八八九年に導入されたゼムスキー・ナチャーリニクの承認を必要とし、総割替は一二年以上間隔をおくことをうたった割替制限法（一八九三年六月八日）[34]、そして一八六一年の買戻し規約第一六五条を廃して買戻し貸付金返済以前に村団の認可により地片が個々の家長に渡ることを禁じ、さらに農民身分以外の者へ分与地が移ることも禁止した農民分与地譲渡予防法（一八九三年一二月一四日）[35]の三法から主に構想された。ここに全体としてトルストーイによる「家父長制的精神」や「集団主義（коллективизм）」の強制と強化の試みをソヴィエト史学はふつう見い出すのだが[36]、少なくとも社会制度ないし組織としての農村共同体の維持が図られたことはたしかであった。

その後、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてヴィッテが主導して、徴税機能不全から連帯責任制の見直しが再度なされ、最終的にその廃止に至るのであるが、その経緯については本稿の枠を大きくこえている。ただ、ここでは本論の主題に即してこの再度の見直しに契機を与えた旅券問題に言及しておきたい。一八八六年からの大蔵省付属旅券委員会の作業結果をうけたヴィッテは一八九三年五月、内相ドゥルノヴォーとともに国家評議会に対し旅券の税制上の意義の廃止を含む提案をした。とくにヴィッテの場合、旅券上の制限なき出稼ぎの進展がもたらす税収を計算したのであろう。しかし、国家評議会はあくまで連帯責任制にこだわり、結局一八九四年六月四日に出された、旅券にもなりうる居住証（вид на жительство）法[37]は税を滞納している農民はその入金が村団の連帯責任により保証されれ

ば、村団の同意で旅券をうることが出来ると定めたのである（第四四条）。この場合、滞納があっても連帯責任があれば、旅券は発行されたのだから、連帯責任制がむしろ人々の移動性を高めたといえなくもない。そしてこの居住証法で大切なのはその第四条で五〇ヴェルスタ以内の範囲を六ヶ月以内、当該郡及び隣接郡を移動する場合と農作業に一時出る場合は居住証（したがって旅券）は要求されないとしたことであった。

さて、ここまでの議論は共同体を取り巻く法制度的枠組についてであって、農民たちの生活の場としての共同体のあり方自体あるいは実態は触れられていない。これらの側面について、一八七〇、八〇年代の様相をめぐり、わずかに言及しておきたい。

まず一八七〇年代末から農村共同体における割替運動が活性化し、農民の「共同体への回帰」とでもいえる現象が出現したことに注目したい。

この現象には管見した限りでも何人かが触れているが、そのうち最も包括的と思える理由説明をしているのはカチョロフスキーであり、小島修一氏の整理によれば、彼は次の五点を指摘している。[38] つまり、①人頭税の廃止等、分与地にかかる諸負担が軽減したこと。小島氏は特にこの点に着目して、「今や流れは、『土地からの逃亡』から『土地への帰還』へと変わり、『土地回避闘争』は『土地獲得闘争』にとって代わられた」[39]と共感的にまとめている。佐藤芳行氏も「ブンゲ租税改革の結果、分与地課税が純収入をこえ、分与地保有が『重荷』となるような村団は例外的になる。ブンゲの改革は農民共同体内部での土地割替の動きを促進した」[40]とこの点に注目する。大部なブルジェスキーやルインジュンスキーも私の読む限り、ここに最も重点をおいている[41]と思える。②農奴解放後の人口増加による土地需要圧力が地価上昇をもたらしたこと。ミローノフは「地価は上昇し、一八七〇年代末までにそれは買戻し支払額を越えたため、農民は土地に関心を持ち、もはや村から逃げようとはしなくなった」[42]という。③人口増加による農業集約

化と土地生産性の上昇。クチュモーヴァは一八七〇年代末までに欧露の農民人口は著しく増加したため、共同体は沼沢地を干し上げ、灌木帯を切り開いて耕地化するなどで対応したと指摘するが[43]、こうした量的拡大はなされても、カチョロフスキーのいう質的生産性向上が実現したことには私は疑問を感じる。④一八八〇年代初めの工業不況が農業外の雇用機会を減少させ、過剰労働力が土地へ向かったこと。ロマショーヴァはこの時期の不況をめぐって、モスクワ県ゼムストヴォの「停滞はかくも強力なため、農業をやるという習慣から完全に抜け落ちていた多くの工場労働者（фабричные）が農村に戻り、ソファーを握っている」とする表明を紹介している[44]。農民がみせたこのような移動に今の私は特に関心を抱いている。⑤農家世帯分割の増加による土地需要の高まり。この時期の家族分割は激烈に進行し、松井憲明氏によれば、農奴解放後約二〇年間に農家二、三戸に一戸が分割されている[45]。

ミローノフはそれまで割替が活性化しなかった理由として、農民が一八五八年以来ない人口調査ревизия を待ったこと、その際に一八五八年以降に生まれた無土地農に対して国家が土地を与えるという風聞が存在したことを指摘している[46]。農民ないし出稼ぎ者の間にひろまるこうした話が、何もツァーリに関する伝聞がロシア民衆史にもった重大性を指摘するまでもなく、この国では一定の社会的機能を果たしたとすれば、リャザン県に関してステパーノヴァが示したプロパガンディストとしての出稼ぎ者の役割といった論点は大切であろう。彼女は一八七〇年代末から八〇年代初めにかけてそうした出稼ぎ者たちが土地総割替の考えをひろめたというのである。一八七九年末、モスクワでの馬車屋稼業からリャザン県ボリショーエ・シャポヴォ村へもどった農民ヴァシーリー・スロマーチンは持ち帰った新聞を同村人にみせ、この二月ないし三月に土地割替を行うことがツァーリが署名した勅令に出ているといった。スパス郡フェドチエヴォ村の農民フロール・ドローヒンはペテルブルグの商人トロントンの工場で働く息子ニキフォールからの一八八〇年四月五日付の手紙で、ツァーリが税を平等化し、滞納金を免除し、人口調査を予定し、さらに一デシャチーナあたり四〇カペイカを支払って一人あたり六デシャチーナずつの土地を割替える予定だとする話が首都で

なされていることを知った。[47]

次に連帯責任制がいかに実施されたかについて見てみよう。ブルジェスキーは地方別に国税に対する滞納割合(%)を表にしている(**表2**参照)。

それによれば、滞納割合の動向は地方によってかなりの相違がみられる。北部、南西部、北西部は時間の経過とともに割合を減ずる傾向にあるが、他は逆に増加していて、東部・中央黒土そして中央工業の各地方の滞納率は特に高くなっている。

(**表2**)国税に対する滞納割合(1871-95年)

地方	1871-75	1876-80	1881-85	1886-90	1891-95
北部	57.5	46.5	43.2	21.7	24.8
東部	25.2	36.0	58.0	98.5	236.0
中央黒土	10.4	15.9	28.4	38.5	125.3
中央工業	26.7	20.5	27.8	37.8	66.4
南部	21.0	33.2	31.4	36.6	20.6
ウクライナ	12.8	8.9	18.3	31.8	32.4
南西部	13.1	8.7	7.2	3.5	4.9
北西部	41.5	22.2	12.0	5.8	4.1

[典拠] Н. Бржеский. Указ. соч., стр. 393.

すでに確かめたように、農奴解放の「農民一般規則」第一八八条によって、村団による滞納取り立ては最終的には地元警察の手にゆだねられていた(第一九〇条、第一九一条)。また買戻し金の取り立てについては郡税務当局から滞納状態を通報された地元警察はそれを農地調停官に伝え、彼はただちに着手することになっていた。これを定めた買戻し規約第一二九条は滞納者を稼ぎに出すことや農地調停官の合意なく旅券の発行・更新を認めないこと等を示し、右の第一八八条とともに全体として滞納をめぐり労働力移動を公権力が統制しえたのだが、中央工業地帯に限定してそれらの運用の実態に少し触れよう。

生じた滞納金を共同体の他の成員間で分担しあうといったことはふつう行われなかったし、またそれを共同体全体の金でカヴァーすることも例外的にしか行われていない。共同体が外部から借金出来ることはこれまたまれであった。[48] この問題で警察権力が行使される場合、滞納者が逮捕され、郷裁判所により体刑を課される例もあったといわれるが、[49] 勿論笞打ちによって滞納金が支払われる訳ではない。村団が

滞納者から分与地を（ふつうその一部を）没収する場合はあり、一八八九～九二年の間にトヴェーリ県では一九二の分与地が没収されたといわれる。没収された分与地は通例、同村人に引き渡されたが、少数者にそれが集中することは中央工業諸県では認められない。[50] すでにみた一八九三年六月の割替制限法導入とともに、村団が滞納を理由に分与地を没収することは益々まれになり、滞納者自身による分与地の貸し出しが増加した。[51]

コストロマー県のソリガリチ郡では、比較的少額の滞納者には首都へ出て稼ぐために一カ月通用ビレットが発行され、出稼ぎ先から滞納金と旅券代を村へ送ることがもとめられていた。[52] トヴェーリ県の各地では、村長は毎年一一月末から一二月初めにかけて個人的にモスクワかペテルブルグに出向いて徴税したが、その際共同体はその路銀を出した。同県ヴィシネヴォロツク郡では郷長が滞納者を隣接の工場へ稼ぎに送り出した。[53]

共同体側が滞納金支払いのために共同体の外部にいる者を故郷へよびかえし、そこで経営の再開を強いたとしても、彼らの多くは経営が不調故に出ていったのだから、うまくいかないのがふつうである。[54] むしろ共同体としてはその外部にいる者の一部を「放蕩者」гулякиとして全く余所者扱いする傾向にあった。[55] また都市などへ稼ぎに出た者をより収入の悪い農村へ引き戻すことは彼らからの送金をあてにする共同体にとり不利な場合もあり得た。それ故に少なくとも中央工業地帯では共同体を離れて工場に働く者と共同体との間にまさに税務制度的につながりが確立されていた。つまり、モスクワ市の繊維工場の全ては各労働者の賃金から旅券査証代を控除しており、[56] モスクワ県下において生産される織物の評価額からは職工たちが郷に支払う税は前もって差し引かれていたのである。[57]

（1）鈴木健夫『帝制ロシアの共同体と農民』、早大出版部、一九九〇年、二四二頁。

（2）例えば、佐藤芳行「ロシアにおける農村租税制度と農民分与地的土地所有（一八六一～一九〇五年）」、『歴史学研究』、四九九号、一九八一年一二月、一八頁。

(3) Boris Mironov, The Russian Peasant Commune After the Reforms of the 1860s, 《Slavic Review》, vol. 44, no3, 1985, p. 441-442.

(4) Российское законодательство X-XX веков, т. 7, документы крестьянской реформы. М., 1989, стр. 63-64.

(5) П. Г. Рындзюнский. Крестьяне и город..., стр. 199-200 を参照のこと。

(6) Российское законодательство..., стр. 155-156.

(7) В. Г. Чернуха. Крестьянский вопрос в правительственной политике России (60-70 годы XIX в.). Л., 1972, стр. 170-171, 175. Л. И. Кучумова. Сельская поземельная община Европейской России в 60-70-е годы XIX в. 《Исторические записки》, т. 106, 1981, стр. 332.

(8) 鈴木前掲書、二四〇頁。

(9) Н. Бржеский. Недоимочность и круговая порука сельских обществ. СПб., 1897, стр. 377.

(10) Российское законодательство..., стр. 73-74.

(11) Там же, стр. 102(комментарий).

(12) Там же, стр. 344.

(13) Boris Mironov, Ibid., p. 441.

(14) 小島前掲書、四四頁。保田孝一『ロシア革命とミール共同体』、御茶の水書房、一九七一年、一三四頁も旧国有地農に注目している。

(15) 鈴木前掲書、二六〇頁。このほか保田前掲書、一三二頁、佐藤前掲論文、二三頁も対比的な数字をあげている。

(16) Л. И. Кучумова. Указ. статья, стр. 332-3, 335, 343.

(17) Н. Бржеский. Указ. соч., стр. 377-379.

(18) В. Григорьев. Указ. статья, 《Русская мысль》, 1884, №1, стр. 18, 24.

(19) Там же, стр. 5. 《Русская мысль》, 1884, №3, стр. 5, 6.

(20) Б. В, Тихонов. Указ. соч., стр. 143-144.

(21) Н. Бржеский. Указ. соч., стр. 189. П. Г. Рындзюнский. Крестьянская промышленность..., стр. 66 を参照。

(22) В. И. Ромашова. Образование постоянных кадров рабочих в пореформенной промышленности Москвы. В кн.:Рабочий класс и рабочее движение в России. М., 1966, стр. 156.

(23) Там же, стр. 156-157.

(24) Н. Бржеский. Указ. соч., стр. 272-273, 381.

(25) Там же, стр. 297, 318-319, 382. 鈴木氏はこうした地方警察力の投入（「上から力ずく」による「税支払いの連帯責任」実行）は共同体の自己規制力が衰退した故とみるが（前掲書、二九九～三〇〇頁）、氏自身も「税負担に苦しむ村の共同体は自ら積極的に税支払いの連帯責任を果たそうとはしなかった」といい（二九九頁）、佐藤氏も村会は一八八条の実施に対し、初発から冷淡であったとする（前掲論文、三二頁）からには、話はそれほど単純ではなかったように思える。つまり、共同体が自己規制力を発揮して一体となって郡警察署長に抵抗したことも想定されるからである。

(26) В. Г. Чернуха. Указ. соч., стр. 202. Л. И. Кучумова. Указ. статья, стр. 345.

(27) В. Г. Чернуха. Указ. соч., стр. 170

(28) 農民が村団ないし共同体間を移動する（所属がえする）、社会的な水平移動が実際にどの程度生起していたのかについては私の知る数少ない見解は分かれている。ミローノフは、農民は出生した共同体を離れると分与地への権利を失うから別の共同体へ移ることは知られていないとする（Ibid., p.456）が、ヴァシーリエフは工場郷及び工場都市に隣接する郷の郷役場は世紀転換期に全国各地からやってくる人々のこれら郷の農民共同体への登録申し出に文字通りおわれたという。См. Б. Н. Васильев. К характеристике формирования промышленного пролетариата в России(по материалам Владимирской, Костромской и Ярославской губерний). Шахтинский гос. пед. ин-т. Ученые Записки, т. 2, вып. 2, г. Шахты, 1957, стр. 245-256. チーホノフはこの指摘を肯定的に引用している(Указ. соч., стр. 107)。

(29) М. С. Симонова. Отмена круговой поруки. 《Исторические записки》, т. 83, 1969, стр. 160-161.

(30) Н. Бржеский. Указ. соч., стр. 388.

(31) Там же, стр. 358.

(32) В. И. Ромашова. Указ. статья, стр. 157.

(33) ПСЗ＝Ⅲ, т. 6, №3578.

(34) ПСЗ＝Ⅲ, т. 13, №9754.

(35) ПСЗ＝Ⅲ, т. 13, №10151.

(36) А. М. Анфимов, П. Н. Зырянов. Некоторые черты эволюции русской крестьянской общины в пореформенный период(1861-1914 гг.).《История СССР》, 1980, №4, стр. 36. П. Г. Рындзюнский. Крестьяне и город..., стр. 207.

(37) ПСЗ=Ⅲ, т. 14, №10709.
(38) 小島前掲書、八七～八八頁。
(39) 同右、九一頁。
(40) 佐藤前掲論文、二九頁。
(41) Н. Бржеский. Указ. соч., стр. 168. П. Г. Рындзюнский. Крестьяне и город..., стр. 113.
(42) Boris Mironov, Ibid., p. 464.
(43) Л. И. Кучумова. Указ. статья, стр. 329.
(44) В. И. Ромашова. Указ. статья, стр. 156.
(45) 松井憲明「改革後ロシアの農民家族分割」、椎名重明編著『土地公有の史的研究』、御茶の水書房、一九七八年、一二三頁。
(46) Boris Mironov, Ibid., p. 463fn.
(47) Е. С. Степанова. Развитие отхожих крестьянских промыслов в Рязанской губернии 70-80-х годов XIX века. В кн.:Вопросы общественного и социально-экономического развития России в XVIII-XIX веках. Рязань, 1974, стр. 151.
(48) Н. Бржеский. Указ. соч., стр. 207-208.
(49) Там же, стр. 211.
(50) Там же, стр. 200.
(51) Там же, стр. 242.
(52) Д. И. Жбанков. О городских отхожих заработках в солигаличском уезде костромской губернии.《Юридический Вестник》, 1890, №9, стр. 134.
(53) М. С. Симонова. Указ. статья, стр. 175.
(54) Б. В. Тихонов. Указ. соч., стр. 124. Н. Бржеский. Указ. соч., стр. 193.
(55) 高田和夫「ロシア農村共同体の実態—モスクワ県のある共同体の場合—」、[九大]『社会科学論集』第三十集、一九九〇年二月、一六一～一六二頁。
(56) П. А. Песков. Санитарное исследование фабрик, по обработке волокнистых веществ в г. Москве. вып. 2, М., 1882, стр. 16.
(57) 鈴木前掲書、三二三頁。

四　中央工業地帯の労働力移動

以上をまえおきにして、まずモスクワ周辺の中央工業地帯における出稼ぎと労働力移動の基礎的様相をみてみたい。ふつう中央工業地帯とはモスクワ、ヴラジーミル、ヤロスラヴリ、トヴェーリ、スモレンスク、カルーガ、ニジェゴロド、コストロマーの八県をさす。これらほとんどは中央非黒土地帯と重なるが、スモレンスク県は通例西部地方に入る。モスクワ県と隣接するのはカルーガ、スモレンスク、トヴェーリ、ヴラジーミルの中央工業地帯四県とリャザン及びトゥーラの中央黒土帯二県であり、これら六県にヤロスラヴリ県を加えた七県をモスクワの後背地としたりもする（筆者が本論でモスクワ地方という場合はこの後背地を意味している）。

考察にあたり、この地帯の改革期の基礎的状態を示す若干のデータをまず確認しよう。モスクワ軍管区（軍管区の範囲は注1を見よ）主計官の計算によると、一八七〇年から一八七七年の八年間平均で同管区住民はライ麦パンを五カ月と一日分ないしあらゆる種類の穀物及びジャガイモを二カ月と七日分他所から搬入する必要があった。この軍管区で食糧が最も豊富であったのは黒土帯のタムボフ県（九カ月と二八日分の穀物余剰）と同じトゥーラ県（同じく三カ月と八日分）であったが、他県は全て不足し、例えばモスクワ県は九カ月一六日分、トヴェーリ県は七カ月二日分、ヴラジーミル県は五カ月七日分を移入する必要があった。[1] 食糧の自給が果たせないほどの低い農業生産性はどのような農業構造に支えられた結果であったかをここで問うことはしないし、またその必要もないであろう。農民は穀物生産者であると同時にその購入者であった。農民は自給必要量を越えて一旦売却した穀物を買い戻したりしたから、[2] いずれにせよ、農産物販売以外からの貨幣収入が必要であった。

モスクワ県ゼムストヴォが一八七〇年代末から八〇年代中頃にかけて組織的な経営実態調査を行った結果が『モス

クワ県統計報告集』として刊行されているが、その一冊によれば、この時期、大略で各農戸あたり農業収入は年間一〇〇ルーブリ、農業外収入は一一六ルーブリであり、平均すると収入項目別分布は**図2**のようであった。

この図自体、概念上の混乱があって理解しにくいのだが、モスクワ県では農家収入で農業収入が半分を割る、日本農業論の用語で第二種兼業農家が基本であったこと、したがって大半の農家が各種の小営業 промыслы に精を出していたことが分かる。[3] 中央工業地帯の他県でも収入上のこうした二重構造を有していたであろう。これら小営業間で人々はどのような動きをしていたのだろうか。

（**図2**）モスクワ県農家の収入構造（%表示）

- 農　業――45
- 農業外――55
  - 地元営業―23
    - クスターリ営業―18
    - その他の営業―― 5
  - 出稼営業―19（工場営業を除く）
  - 工場営業―13（地元営業と出稼営業の双方）

［典拠］ Сборник статист. сведений по Моск. губ., отдел хозяй. статист., т. 7, вып. 3, М., 1883, статист. таблицы 6, 7.

その人の動きについて、中央工業地帯は基本的にその内部で行き来が完結していたことはまず指摘できよう。[4] ミンツが一八九七年センサスを整理して労働者及び召使の出身地帯別分布表を作成しているが、[5] それによると中央工業地帯は当該者の九二・七%を同地帯内部で賄っていて（モスクワ市でもその八三・五%を同地帯から受け入れている）、例えばペテルブルグのある北西部がその五四・五%しか自給せず、三二・九%を中央工業地帯から、七・二%を西部から入れていた（ペテルブルグ市の場合、北西部から四〇・四%、中央工業地帯から四四・二%である）のとは対照的であった。ここでは豊かな労働力に恵まれたモスクワ地方の様相をみるが、こうしたことは地域的連結性からモスクワ市と周辺地方の人的関係の濃密さを暗示している。

さらにこの地帯の人の動きはモスクワ県（とモスクワ市）を中心としたものであったとみてよいであろう。**表3**は中央工業地帯県別の労働者・召使の出身地別性別分布（一八九七年センサス）である。モスクワ県は県間を移動する者の実に四分の三を集めている（モスクワ市だけで二分の一）。もう一つの**表4**はそのモスクワ県（モスクワ市を除く）

（表3）中央工業地帯労働者・召使分布（1897年センサス）（1000人）

県　名	労働者・召使			内訳 地元出身者			内訳 他県出身者			他県出身者の割合
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	%
モスクワ	449.5	211.1	660.6	206.1	104.8	310.9	242.9	106.2	349.1	52.8
ヴラジーミル	129.7	69.7	199.4	110.8	58.1	168.9	18.9	11.6	30.5	15.3
カルーガ	50.0	19.4	69.4	45.2	17.9	63.1	4.8	1.5	6.3	9.1
コストロマー	68.6	43.3	111.9	64.1	41.0	105.1	4.5	2.3	6.8	6.0
ニジェゴロド	79.9	26.9	106.8	67.2	23.7	90.9	12.6	3.2	15.8	14.8
リャザン	80.3	35.6	115.9	74.6	32.9	107.5	5.8	2.6	8.4	7.2
トヴェーリ	73.6	46.6	120.2	68.7	44.3	113.0	4.9	2.3	7.2	6.0
トゥーラ	65.4	20.0	85.4	58.9	18.2	77.1	6.5	1.8	8.3	9.7
ヤロスラヴリ	68.1	39.9	108.0	48.9	31.5	80.4	19.2	8.4	27.6	25.5
合　計	1065.1	512.5	1577.6	744.5	372.4	1116.9	320.1	139.9	460.0	29.2
内モスクワ市	299.4	134.4	433.8	109.5	48.5	158.0	189.5	85.8	275.3	63.5

［典拠］　Л. Е. Минц. Указ. соч., стр. 31.

（表4）モスクワ県の他県出身者分布

県　名	ゼムストヴォ調査	1897年センサス
トゥーラ	8725人	11万6468人
リャザン	8186人	11万1188人
カルーガ	7821人	8万5952人
ヴラジーミル	4996人	6万1241人
スモレンスク	4993人	6万0828人
トヴェーリ	1315人	5万8052人
ヤロスラヴリ	131人	2万5885人
ペテルブルグ	—	1万2270人
シンビルスク	—	1万0893人
コストロマー	—	9411人
ニジェゴロド	—	6405人

［典拠］ Сборник статист. сведений по Моск. губ., отдел санитарн. статист., т. 4, ч. 1, М., 1890 стр. 236. Первая всеобщая перепись населения Российской империи, 1897г. т. XXIV, Моск. губ., СПб., 1905, стр. 49.

の他県出身者の県別分布（一八九七年センサス。この場合、労働者・召使以外の部分も含んでいる）とモスクワ県ゼムストヴォ調査にみる労働者の出身県別分布（一八七〇年代末〜八〇年代初）を示したものである。

以下、私の現在の資料状況からして自ら極めて限られたものになるが、県別にもう少しみてみよう。**コストロマー県**は従来、三地域に分けて議論されてきた。他の県も同様な場合が多いのだが、県内の自然条件等が一様でないため全県を一括するには無理があり、ここでもそうしよう。県内北西部は出稼ぎ郡、南西部は工場郡そして東部は森林郡とでも命名してみる。早速**表5**を参照されたい。四郡づつ、上から出稼ぎ郡、工場郡、森林郡の順に旅券発行割合を示している。①北西部（出稼ぎ郡）は土地事情が悪く、昔

（表5）1892年コストロマー県旅券及びビレット発行割合（男子100人あたり）

郡名＼発行数	全体	内訳		
		1年旅券	半年旅券	1-2月ビレット
チュフロム	29.6	14.1	15.5	2.8
ソリガリチ	22.5	10.0	12.5	1.9
ガリチ	21.6	6.3	15.3	12.6
ブーヤ	9.9	3.1	6.8	20.0
出稼ぎ　4郡平均	20.9	8.4	12.5	9.3
コストロマー	9.6	1.9	7.7	12.6
ネレフト	8.2	1.0	7.2	29.2
ユリエヴェッツ	8.0	1.0	7.0	35.3
キネシェム	4.7	0.9	3.8	8.5
工場　4郡平均	7.6	1.2	6.4	21.4
コログリフ	7.8	1.7	6.1	12.9
マカリエフ	3.3	0.7	2.6	24.3
ヴァルナヴィンスキー	1.3	0.4	0.9	14.3
ヴェトルーシ	0.5	0.2	0.3	7.6
森林　4郡平均	3.2	0.7	2.5	14.8
全県平均	8.9	2.5	6.4	16.7

［典拠］ Д. И. Жбанков. Влияние отхожих заработков на движение населения. СПб., 1895, стр. 4.

（表6）コストロマー県の小営業（世紀転換期）

	クスターリ	農業労働	出稼ぎ	森林作業	計
南西部2郡	25.3	11.9	60.9	1.9	100
北西部4郡	10.8	10.2	70.2	8.8	100
東部1郡	12.5	44.2	44.2	39.9	100
全県	14.6	61.3	61.3	15.2	100

［典拠］ Н. Н. Владимирский. Указ. соч., стр. 37.
［注］南西部はコストロマー、ネレフト；北西部はブーヤ、ガリチ、チュフロム、ソリガリチ；東部はコログリフの各郡。
表は地元と出稼ぎ双方の小営業従事者の割合を示す。

か隣接郡の工場への労働者фабричные出稼ぎがみられる。彼らは**表5**から明らかなように短期ビレットを利用する割合が高く、年に何回か家と工場の間を往復している様子がうかがえる。③東部（森林部）には林業に従事する者が多く、冬に木を切り、春に筏を組んで川を流すため、その間一、二ヶ月家を空けるのである。から主にペテルブルグへの出稼ぎ者（питерщики）を出してきた地方である。男子は一一～一四才で徒弟として首都へおくられ、三～六年して親方（мастер）となって一旦故郷へ戻るが、老人になるまで首都との間を行き来する「放浪生活бродячая жизнь」をおくる。彼らの大半は春の始まりに出て秋に帰村するのだが、一～五年も首都に居続ける者もいて、そこへの手工業出稼ぎは長期化する傾向にあった。②南西部（工場郡）は県内にあって工場が集中する地方でクスターリが多いが（**表6**を参照）、その一方で大部分が地元

出稼ぎ数の推移をみると、全県下で発行された旅券数（ビレット除く）は一八七〇年五万七一七三、一八七五年六万五四二二、一八八〇年七万七三五七、一八八七年七万七四二七通を数えたが、地方毎にその増加率は異なり、一八七五年から一八八〇年の間をとると北西部九・二％、南西部二九・四％、東部二二・九％であった。[6] 北西部の伸びが他に比べ少ないのであるが、このことについてヴラジミルスキーは全ての「自由な」男子はすでに出稼ぎに出ていて、急激な増加は望めなかったからと説明する[7]（一八八〇年↓一八八七年が横ばいなのは不況の影響と普通される）。この指摘は大切な論点を提供し、この時期ごろに出稼ぎをしっかりと再生産構造に組み込んだ農民経営が成立していたのではないかとする推測を許すであろう（第**六**節「工場労働の定員」の項も参照）。コストロマー県ゼムストヴォの医師であったジバンコフは同県の出稼ぎ数の安定性を強調して、出かける男子数はほぼ一定していたとわざわざ一八八〇年一五万三〇人、一八八七年一四万三三六三人、一八九二年一五万六〇七九人（これらの数字は全男子のほぼ四分の一に該当する）という数字をあげている。[8]

しかも出稼ぎ者の基幹部分は決して貧農などではなく、播種面積約二デシャチーナ、馬一頭、雌牛一～二頭を持ち、一経営あたり五、六人の喰い手がいて、一人の男子働き手（работник＝мужчина）が支えるといった中農部分であった。[9] 参考までに、すこし後の世紀転換期に同県七郡でなされた戸別農戸調査（二万四八四四戸対象）のうち経営形態別収入をみると**表7**のようであった。ここでいう経営形態とは農業以外の主たる収入源が何であるかを意味すると解せばよく、「地元」はクスターリ営業を、「混合」は他四つのうち複数をそれぞれかなりの割合で採用している場合と考えればよいであろう。いずれにせよ、「出稼ぎ」はかなりの好位置を占めているのである。

村に残るより外へ出る方が稼ぎになるから出稼ぎ郡では男はほとんどいなくなる。村に残るのは村長ら村の運営に関わる者、首都所払いの者、滞納者、病人、老人、アルコール中毒者といったところで、このうち滞納者までの三者は残ることをいわば強いられた部分である。そのうち滞納者は、ソリガリチ郡の四村を調査したジバンコフによると、

（表7）コストロマー県経営形態別収入分布（1897-1906年）

経営形態	1経営当り平均収入	労働年令1働き手当り
出稼ぎ	112.0 P	83.9 P
工　場	185.0	120.0
森　林	73.5	58.8
地　元	73.6	58.9
混　合	140.2	56.8

［典拠］ Н. Н. Владимирский. Указ. соч., стр. 140.

それは一～二年以上の租税を滞納した上に放蕩している者であり、少額の滞納者の場合、首都へ出るための一カ月ビレットが出されて、首都から税とビレット代の送金を求められていた。当然のように村娘たちは首都へ出稼ぎして中々垢ぬけしているпитершикиの妻になりたがり、親たちは子供を首都へ送って手職をつけさせようとした。この四村調査では、夏期に男子労働力が不在になる農戸は五〇～七六％にのぼり、労働力不足から耕作されずに放置される土地は同郡で農民分与地の四四・四％あった。[10]

この県の出稼ぎ営業ではどの職種を選択するかは何よりも旧習によっていた。[11] 息子が父親の稼業を見習うのであり、おそらくこのことは他県の場合にも多くはいえたと思える。**表5**の出稼ぎ郡では農閑期ないし冬期に（春まき穀物の播種後に出て、草刈りと穀物収穫期に戻り、再び秋に）出かけるいわゆるбродячий ремесленникが発達した。そのうち中でも同県の大工稼業は有名で、高収入を農民にもたらした。多くの場合、彼らは三月初め～六月二九日までと八月一五日～一一月一四日（ないし一二月六日）の年二期、両首都、カザンその他の沿ヴォルガ諸都市へ出かけたが、その際ほとんどいつも一〇人、三〇人、五〇人のアルテリ（**六**節の二参照）が組まれた。賃金は食費を請負人持ちで週二～三・五ルーブリ、全期七～九カ月で腕次第で六〇、九〇、一〇〇ルーブリといったところが平均的であった。特定の村や郷が大工稼業に特化した。[12]

大工と並んで比較的にこの出稼ぎ郡で多くみられたのがペンキ工（**маляры**）であった。そのために、例えば、ガリチ郡では一三～五〇才の全ての男が冬を除いて家を空けてしまう村があった。ペンキ工はふつう三月初めに出て一二月に帰村した。この間に一〇〇ルーブリ、時に一五〇ルーブリを稼いだ。[13]

この他、仕立屋、打毛者、馭者、行商人、馬医者、砥師、樋屋、羊の毛皮師、レンガ製造工、石工と左官、指物師、

ヴォルガ水域での水上労働者など同県の бродячий ремесленник の存在は知られている。逐一それらをここに紹介しないが、仕立屋と汽船労働者との関連性(!?)について一言しておこう。ヴォルガ川の汽船交通が発展するにつれて、曳船人夫の仕事が衰退し、その代わりに仕立屋稼業が選ばれて、一〇月二二日から復活祭（ないし四月末）までの冬期労働となり、親方を中心に数人から一〇人ほどの小グループをつくって巡回した。[14]

コストロマー県の終わりに工場労働について触れておく。前掲した「工場郡」にある工場のほかヴラジーミル県シューヤ郡のかのイヴァノヴォ村へも「工場郡」（ネレフト、キネシェム両郡）の農民が出ている。穀物取り入れ後に出かける者、秋から草刈り時まで年を越えて出る者、そして少数ではあるが工場にいつもいて時々帰村する者など様々である。工場が地元にある所では一家で三人に一人か、二人に一人が工場労働に関わっていた。[15]

モスクワ県の南に隣接する**トゥーラ県**の場合、すでに第二節で触れた東隣りのリャザン県と同様に、北部は非黒土でクスターリ小営業が発達する一方、南部は黒土帯であり、そうした副業の展開は乏しかった。その北部諸郡において出稼ぎ者が多かったことは一八七七年についての資料に見える。それによると、全県平均で出稼ぎ者の対住民比率は一〇・一%であったが、北部はカシーラ郡二二・六%、アレクシン郡二二・二%、ヴェネフ郡一七・四%、ボゴロディツク郡一六・四%、トゥーラ郡一二・四%と全て平均を上回る。さらにこの資料は男女別に農村を離れる期間毎の集計を行っていて興味深いのであるが、全体で一二万七二六〇人（男九万六八七四人、女三万三八六人）のうち、「全く農村に住まない」者は男の一一・四%、女の二五・九%、「一年は住まない」者は同様に二五・九%、三三・一%、「半年は住まない」者は四〇・一%、二二・八%、「三カ月は住まない」者は八・七%、六・四%、「三カ月以下は住まない」者は一三・九%、一一・八%と分布している。[16] ここで注目してよいのは女の場合、農村を離れると男よりも長期化する傾向にあったことである。

トゥーラ県北部のクスターリ生産は特にサモワール製造など金属加工で知られたが、それは時の経過とともに都市

工場工業と緊密な関係を持つようになり、原材料や製品注文を工場側から受け、熟練労働者を都市工場へ送り出すことをやった。[17] この北部地方からはモスクワとペテルブルグへ出稼ぎの主たる流れが出た。例えば、カシーラ郡では成人の多くがモスクワ市と同県コロムナ郡との工場へ出稼ぎに行く結果、深刻な労働力不足をひきおこし、地元の農場主はリャザン県ミハイロフスキー郡、トゥーラ県南部、オリョール県など各地からの流入労働者に頼らざるをえないほどであり、アレクシン郡でも地元民の多くは小鍛冶、サモワール製造、左官などの手工業的小営業のためモスクワ、トゥーラ、さらにはオデッサなどへ散り、多くが家族づれでセルプホフの工場へ行ったので、農村には老人と子供しか残らないといった状況であった。[18]

一方、南部の場合は歴史的に農業に専ら頼り、手工業的伝統に欠けていたから、南東部からロシア南部地方への農業労働や鉱山労働（ベルフ郡からドン地方の炭鉱）へ出るか都市において単純労働に従事するのが通例であった。それでも北部と同様に大量の脱出は当地にやはり労働力不足をもたらし、カルーガ、スモレンスク、タムボフ、リャザンといった近隣県から新たに労働者が流入してその欠を補ったのである。[19]

モスクワ県の北隣の**トヴェーリ県**の場合はほぼ全県むらなく手工業的小営業が普及していて、その技能を生かした出稼ぎが全国的に最高度の発展をしていた。やや時代が下るが、一九〇〇年の『国民経済』誌でヴィフリャーエフは同県の旅券発行数は住民一〇〇人につき一八・四通と計算した。彼はこの県を非農業的出稼ぎの典型県とみて、農業出稼ぎ県のヴォロネジ県（中央黒土地帯）と対比的な表を作成した（**表8**を参照）。ヴォロネジ県では出稼ぎ者の四人に三人が農業出稼ぎであり、その半数は南部ないし東部で草刈り作業をしているが、[20] トヴェーリ県ではその半数以上が工業労働や召使稼業に従事している。

トヴェーリ県の人たちはモスクワとペテルブルグに南北を挟まれていたから、両首都へ大量に出たのである。コロレンコは同県ではほとんどの成人男子と多くの女子、更には一二才以上の子供さえ、村を出て小営業に行き、老人と

（表8）非農業出稼ぎ県と農業出稼ぎ県

出稼ぎ部門	トヴェーリ県	ヴォロネジ県
農業（日雇、牧童など）	11,469 人（ 7.9%）	51,571人（ 75.6%）
手工業（大工、製靴など）	49,819 人（ 34.5%）	11,011人（ 16.1%）
専門的稼業（工場、召使、雑役）	83,286 人（ 57.6%）	5,660人（ 8.3%）
	144,604 人（ 100 %）	68,242人（ 100 %）

［典拠］ П. Вихляев. Указ. статья, стр. 77.
［注］ 「専門的稼業」は профессиональные の訳。

（表9）リャザン県旅券発行数（1876年、1888年）

郡名	1876年	1888年
エゴリエフ	2万6672	3万9114
カシモフ	2万8024	3万6240
リャザン	2万3421	3万2914
ザライ	1万1000	3万2113
リャージ	6395	9473
リャネンブルグ	9819	9750
ダンコフ	9026	1万0110
サポジコフ	1670	9385
合計	27万4859	16万0336

［典拠］ Е. С. Степанова. Указ. статья, стр. 140.
С. Короленко. Указ. соч., стр. 165.

家事をやる女しか残っていないと書いている。[21] 男の場合、大工仕事と木挽きが多く、女の場合はモスクワへ行くと泥炭掘りや樹木の刈り込みといった重労働に就く例が多かったようである。

ここでも出稼ぎに出たあと不足する農業労働力を他からの流入者で補っていた。例えばコルチェフ郡の場合はリャザン県からその多くが流入し、カリャジンスク郡では地元民が主に製靴稼業に精を出す一方で、同県内のベジェフ郡やカシン郡からの労働者が農業労働を行ったのである。[22]

リャザン県については第二節でグリゴーリエフの議論を紹介しつつ触れたのでそれを補足しよう。私が気付いた限りで、一九七四年のステパーノヴァがこの県の出稼ぎを扱っている。彼女が発見した一八七六年の数値とコロレンコが示した一八八八年の数値を合わせた**表9**をまずみよう。この手の数字は概して捕捉度の信頼性が低いし、両年度の集計主体もその方法も異なっているから単純に増減を云々するのははばかられるが、一目で分かるように上位四郡と下位四郡に明確な差がある（同県は全一二郡だが作表の都合で四郡を削除）。上位が北部＝非黒土地帯で、下位が南部＝黒土地帯である。地場工場もそれなりに発達し、クスターリ生産が独自な展開をみせた北部からは一連の

手に職をもつ非農業出稼ぎがモスクワやヴラジーミルといった周辺諸県へ繰り出した。なかでも全県下で二万人以上を数えたのは建設関係者で、一八七五～六年に、リャザン郡から四六〇〇人、カシモフ郡から五八〇〇人、エゴリエフ郡から七〇〇〇人が出た。特にエゴリエフ・グループは評判がよく、いつもアルテリを組んで請負人に雇われて一シーズンで八〇～一〇〇ルーブリの稼ぎをあげた。樋屋稼業もロシア南部石油産業の発展に伴って盛んとなり、一八七五年にはエゴリエフ郡一七〇〇人、リャザン郡一〇〇〇人、スパス郡一〇〇〇人といったところであったが、一八八七年には特にスパス郡から五五六八人の記録がある。彼らは各郡毎に二ないし三の大グループをつくり、ハリコフ県で原材料の白樺を筏で大量に買い付け、加工した。だが、一八八〇年代末以降は米国産ケロシンとの競争によるロシア石油減産とタンク車運送の発展とのためにこの稼業はふるわなくなった。この他北部で目立ったのに裁縫出稼ぎと泥炭生産があった。[23]

一方、南部は言ってみれば純粋に農業的で工場もクスターリ工業も未熟で、小営業的な稼業は地元でも出稼ぎでも未発達で恒常的な性格を持ち合わせず、ヴォルガ沿岸や南部地方への季節的な農業出稼ぎと中央工業地帯での泥炭掘りが行われていた。そのうち草刈り人が南部地方へ向かったのは五月中旬で、行き先は多くの場合、前年度の所が選ばれた。草刈りは好天ならば二～三週間続き、二三～二八ルーブリほどをもたらしたが、道中の路銀に一〇ルーブリは消えてしまった。穀物取り入れには草刈りの場合よりも多くの人が出たが、稼ぎは日給にして一ルーブリ七五カペイカから二ルーブリ二五カペイカであった。[24]

ヤロスラヴリ県も昔から出稼ぎで全国的によく知られた県である。一八七〇年代初めの同県旅券発行率は農民の一四％に該当してトップクラスにあったが、二〇世紀初頭には二〇―二一％へ上昇した。しかし、一九〇三年にヤロスラヴリ市でこの県の出稼ぎ小営業に関する貴重な著作を出したヴォロビエフは家族旅券にともなう不在（通例、一家族旅券で二人が出たとされている）を考慮すると実際には二五％と推定している。それも一八九八年に導入された酒

専売制の結果、ヤロスラヴリ人たちが得意とした居酒屋稼業がやりにくくなり帰村を強いられた上での数値であるから、出稼ぎの盛んな度合いも知れよう。[25]

ヤロスラヴリの農民たちが主に関わった出稼ぎ職種は男子が「加工工業」三四・六％と「商業」三一・四％であり、女子が「召使」三九・九％と「非小営業」三二・九％である（数値は世紀初頭。以下同様）。「加工工業」（五万六二〇〇人）は三つに大別され、手工業とクスターリが二万八四〇〇人と最大で、仕立屋九〇〇〇人、製パン・製腸詰工二七〇〇人がその主たるところ、次いで建設工が一万八五〇〇人で暖炉工、左官、大工、石工、ペンキ工などが郡ないし郷ごとにかなりの特化を見せている。第三が工場労働者の六〇〇〇人で全員が県内工場に吸収されるが、それでも不足して県外から工場労働者が流入している。[26]「商業」（五万一九〇〇人）のうち一万六二〇〇人は居酒屋である。一方、女子の「非小営業」のほぼ三割は夫を訪問する者 побывка к мужьям であり、直接生産には関わらない女子特有の動きには注目する必要がある。[27]

この県でも労働者の入れ替えがおきていた。例えば、リュビム郡の場合、当地の農民たちはペテルブルグの居酒屋稼業に出てしまって、家では全経営を残った女たちと雇った労働者らがやったのである。彼ら期間労働者の多くはアルハンゲリスク県シェンクール郡及びコストロマー県ブーイ郡からやってきた。[28]

ヤロスラヴリ県の出稼ぎは昔から両首都を目的にしてきたが、中でもペテルブルグ行きが主流であり、全出稼ぎ者のほぼ六割（男女とも）を狭義の питерщики（この用語については七七頁を参照）が占め、モスクワ行きは男で一〇％、女で一五％ほどでしかなかったから、[29] 同県はモスクワの後背地とされながらも、少なくとも人の流れからすればペテルブルグのそれに加えられるべき位置にあった。

モスクワ県の西隣り、**スモレンスク県**でも出稼ぎには地域的分担といったものが存在した。最もそれが発達したのは北東部から北部にかけての一帯で両首都や工場地を中心に出稼ぎがされたが、南部からは日雇農作業、土方、製糖、

炭鉱といった肉体労働を強いられる（черный）出稼ぎをして南方カフカース地方へ及んだ。中央部及び西部はこれら両者の中間タイプといったところであった。[30]

出稼ぎ数順に職種を見ると、最も普及したのが工場労働であり、復活祭と聖母祭（一〇月一日）あたりに多数が工場へ出かけた。次が召使ないし門番の類で、中でも料理人・料理女として出る者は長期間家を空ける傾向があった。第三が右に述べた черный な出稼ぎであり、さらには大工・木挽き、木材浮送などと続いた。[31]

以下、ここでは一八九六年にジバンコフが公刊した同県の出稼ぎ小営業に関する著作から、出稼ぎの盛んな地方で観察された印象的な事柄を引用しよう。

県内最大の出稼ぎ郡で一八九〇年代に男子の四割以上が出稼ぎしたというグジャツク郡のある村役場の記録は「農民は復活祭のあとやがて稼ぎに出かけて、マロースがくるまで働き、故郷に戻ってからは冬は何もせずに過ごす。そうした営業から得るわずかな稼ぎ（一人あたり五〇～七〇ルーブリ）から働き手を雇ったりするから、それだけでは農民の必要をとても満たすことは出来ない」と書いた。[32]

グジャツク郡はモスクワ市に近いからそこの人たちはよく短期的な稼ぎに出かける。例えば、九月に大きなアルテリを組んでモスクワに行き、一カ月ほどキャベリの取り入れをやって二〇ルーブリを稼いだ。[33]

男子の三割余りが出たというユフノフ郡のソスニツカヤ郡では「多くは三月末に稼ぎに出始める。同郷の出稼ぎ小営業は大変に発達しているが、それは主に少土地、土壌の悪さ、近隣及び自郡に工業がないことによる。二～三村の農民はアルテリをつくって出かける。同郷のテムキン、コルジューコフ、ペテロフカなどの村民は運送業をやって専らペテルブルグに住み、人や物を船でネヴァ川を運んでいる。この稼業は世代を重ねていて、何人かは五〇〇～二万ルーブリもの金を貯え、事業を拡大している。今は同郷から二〇〇人以上がこれに関わり、一二のアルテリをつくっている。彼らは家で冬を過ごし、ペテルブルグには三月の中旬に来て晩秋にネヴァが結氷するまで働くが、その

間の実入りは一五〇～三〇〇ルーブリになり、希望者が多い。この一方で、ラポフカ、スクガリョーフ、ザドーリエといった村々の農民は土方をやり、早春から冬まで、カルーガ、モスクワ、オリョールなど隣接県に散らばり、一日六〇～七〇カペイカをようやく稼いでいる。冬にスーシチェフ、ティシャコフ、シレンキ、ヴィポロズなどの村では馬に乗ってモスクワで馬車屋稼業をやる。ソリ道を一八〇ヴェルスタほどモスクワへ行くが、何人かは馬二～三頭だ。稼ぎは一冬一頭あたり六〇～八〇ルーブリだが、悪くすると二〇、三〇ということになりかねない。冬に裁縫女ないし仕立屋として出る者は一一月～四月、各地を巡り、純益で三〇、四〇ルーブリといったところであろう。[34]」

以上のような簡単な調べからでもさしあたり次がいえるであろう。①中央工業地帯には全域にわたり（といっても全県に触れた訳ではない）出稼ぎ小営業が普及し、それなくば農民経営が成り立たないような構造が改革期には確立していた。②しかし、農業以外の出稼ぎ小営業の発展には地域的偏差があり、それは非黒土地帯の歴史的にクスターリ工業が盛んな地方によく展開した。③出稼ぎ者の中核となったのは標準的な中農部分であり、決して貧農ということはなかった。④出稼ぎ者は故郷と往復する「放浪する」人生をおくったが、彼らは都市文化を農村へ伝播する役割も果たした。⑤出稼ぎの職種は世代間で継承され、出稼ぎ者はよくアルテリを組んで働きに出た。⑥女の場合、その離村はより長期化する傾向にあった。⑦働き手が出ることから出稼ぎ村では耕作されず放置される土地が発生し、外部からの流入労働力が農作業を果たした。⑧以上の人の動きは原則として中央工業地帯内部に限定された。

これらの事柄はさらに検討を重ねるべき素材を提供していると思える。

（1）П. Г. Рындзюнский. Крестьянская промышленность..., стр. 48. 念のために言えば、モスクワ軍管区（военный округ）は中央非黒土帯、中央黒土帯（クルスク県除く）及び北部のヴォログダ県をその範囲とした。

(2) 東部サマラ県で比較的豊作の一八九九年においてさえ、農民の穀物不足が目立ち、約六割の農家が自給必要量をこえて穀物を売ったが、そのうち三二%は自分で穀物を買戻し（おそらく「賃稼ぎ収入」により）、二五%は金で穀物を借り、二八%が「雇役」で穀物を借りた。日南田静真『ロシア農政史研究』、御茶の水書房、一九六六年、二〇七頁。

(3) 前掲した私の論文にモスクワ県のスパス共同体の詳細な家計調査が紹介されているから、参照されたい。

(4) いわゆる「移住」とも中央工業地帯は無縁であった。その代表的シベリア移住の最大起点は黒土地帯であり、このことはそれが本格化したストルイピン期においても変わらない。移民局が統計をしっかり把握しだしたといわれる一八八五年以降、一九一〇年までにシベリアへの家族移住者三七五万五〇〇〇人、単身移住者七八万人を数えたが、それらのうち中央工業地帯出身は二・二%にすぎなかった。И. Ямзин. Переселенческое движение России с момента освобождения крестьян. Киев, 1912, стр. 14.

(5) Л. Е. Минц. Указ. соч., стр. 36.

(6) Н. Н. Владимирский. Указ. соч., стр. 77, 79.

(7) Там же, стр. 80.

(8) Д. И. Жбанков. Влияние отхожих заработков на движение населения. СПб., 1895, стр. 3.

(9) Н. Н. Владимирский. Указ. соч., стр. 145.

(10) Д. И. Жбанков. О городских отхожих..., стр. 133-134.

(11) Там же, стр. 138.

(12) Материалы для статистики Костромской губернии. вып. 3, Кострома, 1875, стр. 101-103.

(13) Там же, стр. 106.

(14) Там же, стр. 107.

(15) Там же, стр. 113.

(16) А. Д. Зюзин. Неземледелическая деятельность крестьян тульской губернии в пореформенное время. В кн.: Вопросы экономической и социальной истории России XVIII-XIX веков. Тула, 1973, стр. 38.

(17) R. Munting, Outside Earnings in the Russian Peasant Farm: The Case of Tula Province 1900 to 1917, 《Journal of Peasant Studies》, vol. 3 (1976), p. 429-435.

(18) С. Короленко. Указ. соч., стр. 127.

(19) Там же, стр. 126-129.

(20) П. Вихляев. Указ. статья, стр. 78.

(21) С. Короленко. Указ. соч., стр. 277.

(22) Там же, стр. 279.

(23) Е. С. Степанова. Указ. статья, стр. 145-147.

(24) Там же, стр. 143.

(25) Кл. Воробьев. Отхожие промыслы крестьянского населения ярославской губернии. Ярославль, 1903, стр. 3-5.

(26) ヤロスラヴリ市工場労働者の労働市場のひろがりについては論争がある。前掲したヴァシーリエフの一九五七年論文が中央工業地帯の地方中核都市における工場労働者は自県ないし隣接県の工業郡といった比較的狭い範囲から構成されたと主張したことに対して、メイエロヴィチは同市の場合は例外的により広い範囲から労働者を吸収していることを実証した。
М. Г. Мейерович. О происхождении промышленных рабочих ярославской губернии(конец XIX-начало XX века). 《Вестник Московского Университета》, серия IX, 1969, №6.

(27) Кл. Воробьев. Указ. соч., стр. 12-15.

(28) С. Короленко. Указ. соч., стр. 292.

(29) Кл. Воробьев. Указ. соч., стр. 17-18.

(30) Д. Н. Жбанков. Отхожие промыслы в смоленской губернии в 1892-1895гг. Смоленск, 1896, стр. 44, 82.

(31) Там же, стр. 39-42.

(32) Там же, стр. 51.

(33) Там же, стр. 53.

(34) Там же, стр. 74-76.

五　モスクワ県の労働力移動

モスクワ県下にはやはり広範に農業外の小営業が存在した。『モスクワ県統計報告集』は一八七七～八二年に収集された資料を加工して、それら小営業に従事する男子農民は二一万人で、一八～六〇才の男子働き手は二七万九〇〇〇人と推計されるから、実にその八割近くが恒常的にしろ一時的にしろ農業外で副業に携わっていると報告した。[1] そうだとすれば、近代ロシアの農民にただソファーを握る姿のみを思い浮かべてはいけない。彼らの小営業は多様であったが、中でも繊維関係クスターリ生産が多かったことは**表10**に示す一八九七年センサスの結果を見ても分かる。

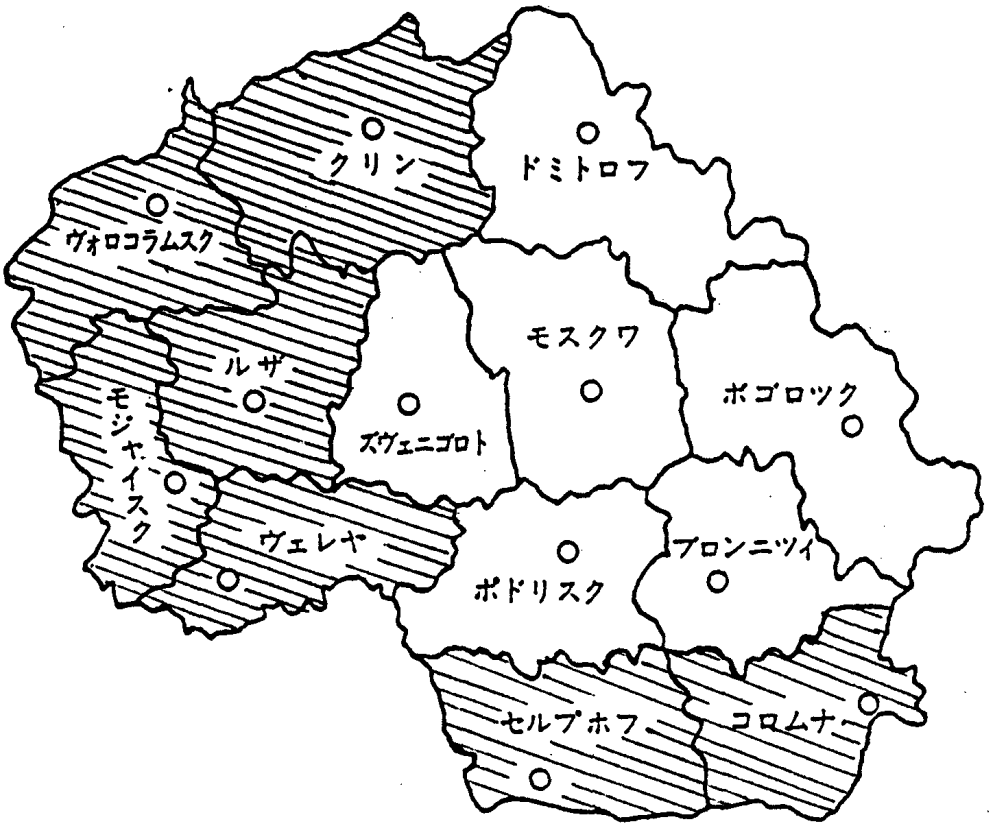
この県でもクスターリ生産の発展度合いに応じてこの手の小営業のあり方は相違していた。一八九七年センサスは全県下の農業・牧畜・狩猟・漁業従事者六七万七八五八人のうち何かの副業的営業に関わる者を一一万八二七九人（一七・五％）とする数字（自活する男子のみでは一一万四〇二三人のうち四万六四三人の三五・六％）を出していて右の『報告集』の数字とかなり異なるが、

（表10）モスクワ県農業等従事者の副業的稼業の内訳

副業的稼業の種目	自活者		被扶養者		合　計
	男	女	男	女	
綿クスターリ生産	2882	1353	1709	11280	17224
亜麻クスターリ生産	265	2738	102	11141	14246
紙製品生産	65	1325	191	9111	10692
靴下・メリヤス生産	69	725	48	6800	7642
荷馬車稼業	3271	21	946	56	4294
絹クスターリ生産	486	534	248	2531	3799
綿工場生産	1091	110	766	1316	3283
男物衣料品生産	2122	2	954	14	3092
履物生産	1809	4	1063	123	2999
レースクスターリ生産	17	308	22	2524	2871
大　工	2142	－	641	－	2783
林　業	1828	1	790	44	2663
雑役・日雇い	1422	128	589	408	2547
辻待馬車稼業	1754	9	461	9	2233
組紐・モール生産	425	53	403	1297	2178
指物・寄木・家具生産	1326	2	748	3	2079
バスケット生産	1064	37	431	516	2048
農　業	1228	152	43	255	1678
小鍛冶	1049	2	549	2	1602
園芸・果樹栽培	1078	89	210	35	1412

［典拠］　Первая всеобщая перепись населения Российской империи, 1897г. т. XXIV, Московская губерния. СПб., 1905, стр. 310-323.
［注］　合計数の多い順にベスト20をならべ、以下を省略。ただし稼業名は適当に簡略化している。

（図３）モスクワ県の副業的営業の発展度合い



同時に郡別の数値をあげている。それによるとボゴロツク郡二五・五％、モスクワ郡二三・七％、ブロンニツィ郡二三・二％、ポドリスク郡二二・五％、ドミトロフ郡二一・二％、ズヴェニゴロド郡二〇・二％までが平均を越え、以下、セルプホフ郡一七・一％、ヴェレヤ郡一五・四％、ヴォロコラムスク郡一三・六％、クリン郡一二・〇％、コロムナ郡一〇・五％、ルザ郡八・七％、モジャイスク郡八・二％と続く。[2] これを図示すると**図3**のようになる。斜線は平均以下の副業的営業の相対的に未発達な郡を、白地はクスターリ的伝統に富んだ小営業郡をさす。後者は県中央部から北東部のヴラジーミル県方向に展開している。この地域は『報告集』とりまとめの中心者、エリスマンの用語を借用すれば、「工場工業中心地 центры фабрично-заводской промышленности」[3]の形成がよく見られただけでなく、特にボゴロツク郡、ブロンニツィ郡では農民織布の集中をみた（**表11**参照）。斜線部を農業郡、白地部を工業郡とよぼう。

（表11）モスクワ県郡別手織機分布

郡　名	工　場	織　機	機小屋	織　機	農　家	織　機	織機合計
ボゴロツク	98	5170	876	7450	8026	14838	27458
ブロンニツィ	35	610	24	278	3958	7161	8049
ヴォロコラムスク	51	1613	152	1804	1395	1873	5290
ドミトロフ	15	620	128	1536	1544	2534	4690
コロムナ	15	1112	34	476	1231	1777	3365
セルプホフ	14	540	36	501	1192	1309	2350
クリン	8	365	82	895	908	1010	2270
モスクワ	14	1560	48	274	269	408	2242
ヴェレヤ	1	42	33	522	169	368	932
スヴェニゴロド	4	110	8	148	197	209	467
ルザ	4	219	2	25	5	5	249
モジャイスク	1	35	3	20	100	110	165
ポドリスク	0	0	4	36	15	18	54
合　計	260	11987	1430	13965	19009	31630	57582

［典拠］ ССС, отдел хозяйственной статистики, т. 7, вып. 1 М., 1882, стр.51, 52

モスクワ県の農民小営業の場合、人員的にほぼ八割までが製造業に従事しており（運送は一割、雑役・サーヴィスが一割）、その製造業従事者は「地元」七割、「出稼ぎ」三割に分けられ、前者は**表11**の機小屋 светелка や農家 изба で織布をやり（圧倒的に工場生産であった毛織物を除き、絹とくに綿織物）、後者は遠方の「工場」へ行く（この場合、金属工場などが多く繊維工場は少ない）といったのが大勢であった。(4)

右の「地元」（местные）とはまさに地元であって毎日自宅から往復し得るか自宅そのものでの稼業であるから、農民と土地の関係は原則的に切断されないとみてよい。「地元」に稼ぎがある住民は自分の手で分与地を維持する傾向にあることを一早く示したのはロシコーヴァであった。(5) 一方、鈴木健夫氏や佐藤芳行氏の最近の仕事は、租税額と土地収益の不一致の大きさを理由に経済的に低水準の（といっても平均的だが）農家が自分の土地にかかる租税分担を減らそうとして頻繁に割替をやり、そうすることが営業に従事する彼らに土地保有を続けさせたと別の側面から説明している。(6)

「地元」の営業状態は、勿論、コンスタントに維持された訳ではなかった。実際、モスクワ市などの工場が生み出す製品と競争することはむずかしく、また小営業の大半は工場工業の下請け的位置にあったから、恐慌や不況はまず最初にそれを襲って、その都度クスターリ数を減少させた。その部分は「地元」から「出稼ぎ」に移り、景気回復後、「地元」に戻ることを繰り返したのである。(7)

私はここで「地元」の堅固さを強調したいと思う。この問題はロシア資本主義論における多ウクラード論の一角を占めるだろうが、近年の議論としてここではルインジュンスキーと佐藤芳行氏の二つの仕事を参照しておきたい。佐藤氏はルインジュンスキーの一八八〇年代以降小商品生産の分解が生じ、最も小規模な経営の縮小が認められる[8]とする「小商品生産解体論」を批判（否定）することを結論の一つとしている。氏はストルミリンの統計を援用するなどして、小商品生産の急速分解は事実として疑問であり、長期農業不況や雇役制が創出した資本蓄積の困難さがむしろその分解をおしとどめる方向に作用したと主張した[9]。二人の当該箇所を読む限り、佐藤氏に分があるし、別に小規模経営数がむしろ増加したとする断片的な資料を読むことも出来る[10]。ただし、ルインジュンスキーの著作はかなり複雑な内容を伴っていて、「家内工業及び手工業が小商品生産へ移行する残存的過程 пережиточный процесс」[11]の存在を指摘してみたり、大工場生産のカードルを準備する「農村工業は農村の小工業家たちの小ブルジョア的幻想を幾らかは強めて、貧農の労働者への移行を阻止したりする」[12]といったりする。単純な発展段階論に立脚してロシア資本主義の急速な成長を強調しようとすれば、農村工業の存在などは消え行く運命とみさえすればよく、佐藤氏が言うような「経済の二重構造」といった視角など生まれるべくもないのだが、この時のルインジュンスキーの場合は、新たな問題の所在を感じながら、結局は旧来の「理論」でそれらを押し流してしまった印象を私は受ける。

地元に小工業あるいは農村工業が存在するか否かは労働力移動のあり方に大きな影響を与えるであろう。『モスクワ県統計報告集』によれば、モスクワ県はその労働者の六五％を自県出身者でまかない、三五％を他県から導入している。**表12**の通り、ほとんどを地元郡出身者で占めるモジャイスク郡からそれが四人に一人でしかないモスクワ郡まで様々であるが、概して言えるの

（表12）郡別労働者地元出身者割合

郡　　名	％
モジャイスク	93.4
ヴォロコラムスク	92.4
クリン	86.4
ブロンニツィ	83.1
ルザ	80.0
ズヴェニゴロド	77.2
ドミトロフ	74.9
セルプホフ	58.0
ヴェレヤ	51.9
ポドリスク	51.4
ボゴロツク	50.4
コロムナ	39.7
モスクワ	24.2

［典拠］　ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 1, М., 1890, стр. 240.

は、農業郡ほど地元者が多いことであろう。副業的就業機会が乏しい所ゆえ、このことは当然かもしれない。モスクワ郡で自郡農の比率が格段に低いことについて、エリスマンは工場労働よりも野菜作り огородничество に人々がひかれていることと都市と結びついたより有利な働き口が他にあることをあげている。[13] これらの事柄は首都モスクワの作用である。

（表13）モスクワ県下に流入する他県出身工場労働者の行き先郡別

出身県	流入先の郡名	流入数	流入数全体に占める割合
トゥーラ	セルプホフ コロムナ	3419人 2294	39.2%（県毎の%） 26.3
リャザン	ボゴロツク コロムナ モスクワ	4231 1786 1599	51.7 21.8 19.5
カルーガ	モスクワ セルプホフ	3312 2494	42.4 31.9
ヴラジーミル	ボゴロツク ドミトロフ	3041 886	60.9 17.7
スモレンスク	モスクワ ボゴロツク	3325 1102	66.6 22.1

［典拠］ ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 2. М., 1893, стр. 244, 245.

同じ資料によれば、モスクワ県に流入する他県出身労働者はトゥーラ、リャザン、カルーガ、ヴラジーミル、スモレンスクの各県を上位5位としていた。トゥーラ県の九〇〇〇人弱からスモレンスク県の五〇〇〇人弱である。[14] そして注目すべきは各県とも流入先がかなりの程度特定され、集中したことである（**表13**を参照）。この人の流れは長期に渡り繰り返されたもので、行き先で同郷人同志の結集を確保するルートでもあった。

流入したのはもちろん工場労働者だけではなかった。中央工業地帯諸県からの農業労働者が地元農民の副業営業の結果手薄になった農村労働力を補完すべくやってきた。ヴォロコラムスク、ルザ、モジャイスクといった農業郡では、取り入れ時に特に人手が不足したために、兵士がそのために動員されるといったほどであった。[15] より高報酬をもとめて副業的な稼業に精を出す農民に代わって、近隣県からの農民がモスクワ県の農業を担うことにより低報酬の農業生産が維持されたのであった。

工業郡を代表するボゴロツク郡では労働力移動にどのような特徴が見られ

（表14）モスクワ県ボゴロツク郡工場労働者出身地別分布（%）

出身地	全体	男	女
モスクワ県ボゴロツク郡	50.4	50.5	50.1
モスクワ県のその他の郡	11.4	12.2	10.2
リャザン県	15.3	13.8	17.9
ヴラジーミル県	11.0	11.0	11.0
スモレンスク県	4.0	4.1	3.9
トゥーラ県	3.3	3.6	2.8
カルーガ県	1.8	2.0	1.3
その他の県	2.8	2.8	2.8
	100.0	100.0	100.0

［典拠］　ССС, отдел санитарной статистики, т. 3, вып. 11, М., 1885, стр.82.
［注］　同4巻1部の表19に具体的数字がある。

たのか。

同郡のうち中で最も工業的であったのは東部ヴラジーミル県境に位置した数郷であった。それらには工場が集中し、郷住民に占める工場労働者の比率を高めていた。ヤムキンスカヤ郷六五・五%、ズエフスカヤ郷三八・四%、オセーエフスカヤ郷三七・六%といったところである。[16] このことは外部から流入する住民の比率をも上昇させた。全郡平均（一八六九年）一一・〇%のところ、ヤムキンスカヤ郷以下三七・四、三六・〇、二八・四各%であった。[17] 同郡の工場労働者は半数を自郡が供給していたが、リャザン県やヴラジーミル県からも全体の一五・三%、一一・〇%とかなりの流入をみた（**表14**参照）。

これら工業的諸郷はモスクワ地方の最も典型的な織布地帯であり、農民の副業的営業はほとんど例外なしに織布に特化していた。農民たちは「主人の（хозяйский）」側（つまり工場側）から原料の供給を受けてそれを機小屋か農家で加工するか、工場に雇用されるかしたのである。[18]

ここでは『モスクワ県統計報告集』に見える工場調査報告を読んで、労働力の配置状態について幾つかの特徴を引き出してみたい。

①ヤムキンスカヤ郷のボゴロツク市郊外にはモスクワ地方最大級の綿工場「ボゴロツコーグルホフスカヤ・マヌファクトゥーラ」が所在した。モロゾフ資本が所有した当工場は工場敷地六〇〇〇デシャチーナ、建物三〇〇を誇り、紡錘八万以上、力織機一五〇〇台を設置した。調査した一八八三年七月には労働者七五〇〇人を数え、工場に住む者はその家族を含めて一万五〇〇〇人、さらに周辺に一五〇〇人が居住し、工場関係者は合計一万二〇〇〇人であった。

五八二二人を調査した結果では、その出身地は他県から四六・五%、同郡から三八・四%、モスクワ県の他郡から一五・一%であった。[19]

②同郷のシバエフ織染工場ではかつて二五〇〇人の労働者がいたが、調査した一八八三年秋の不況時には一二〇〇人に減少した。その大半は地元住民であり、二・五～六ヴェルスタの近隣村からくる者は弁当持参で通って来た。[20]

③ボゴロツク市に所在したクプリャーノヴァ商会織布工場は夏期に労働者が四分の一も工場に残らず、著しく減産していた。[21]

④ズエヴォ村にあったジミンの綿織工場では夏に農作業に関わる労働力を補充して、リャザン県とヴラジーミル県から織工を採用した。[22]

⑤ボゴロツク市のシバーエフ絹工場では労働者たち（一八八四年五月調査時一〇〇人、夏には五〇人）の大半は工場から工場へと移動し、長期にとどまる者は大変少数であった。[23]

⑥テレニンスカヤ郷のトリャープキン綿織・染色工場では労働者の大半は隣接諸郡からの流入者であり、彼らは工場から工場へ移り、その構成は年々変化した。[24]

⑦グレブネフスカヤ郷のズプコフ絹織工場の労働者（三〇〇人、夏期一八〇人）の多くは工場から三ヴェルスタ以内の最寄り村からやって来た。[25]

⑧イヴァノフスカヤ郷のホミャコフ絹工場では夏期に労働者が半減し、特に草刈り時には全員が農作業へ出てしまったが、ここでは全ての者が一～三ヴェルスタの村からやってきていた。[26]

⑨ヤムキンスカヤ郷に一八世紀末から所在したソロヴィヨフの絹織工場でも百数十人の労働者のほとんどが工場から二～六ヴェルスタの村々から来た。[27]

⑩グレブネフスカヤ郷のレゼルソン絹工場の場合、三〇〇～四〇〇人の労働者のほとんど全てが三～六ヴェルスタ

離れたシチェルコヴォ村の出身者であった。[28]

⑪同郷のコンドラシェフ兄弟の二つの絹工場に働く合計三〇〇人ほどの労働者は地元八村の出身で、それらはかつてトルヴェツコーイ公爵の一つの世襲領地を構成していた。[29]

⑫シャロフスカヤ郷のブルノフのじゅうたん工場労働者は百人以上（夏期六〇人）だが、その九割までがオブホフ大村（スラバダー）の町人とシャロヴァヤ村の農民であって、その構成は大きく安定していた。[30]

⑬ベズーボフスカヤ郷に所在するムラブレフの綿織・染色工場では労働者数は夏期農作業時の八〇人から四旬斎（復活祭前の七週間）時の一八〇人までの間を動いたが（一八八四年二月調査）、地元織工は自宅で働くことを好み、モスクワ県ブロンニツィ郡とリャザン県エゴリエフ郡から労働者の流入をみた。[31]

⑭ドルホフスカヤ郷のボチン兄弟綿織工場でも地元民は自宅で働くことを好んだため、リャザン県の最寄り村から労働者が流入した。[32]

⑮イヴァノフスカヤ郷に綿織工場を所有するヤクシンによれば、地元住民は低賃金を嫌って小規模織布工場で働くことを好まず、より大きな工場へ（この場合ドミトロフ郡へ）行く傾向があった。[33]

⑯ズエフスカヤ郷のジミン商会所有綿織工場には一八八四年七月時点で八五〇人の労働者がいたが、女が三二七人とかなりの割合を占めた（内訳、既婚一九四、寡婦三六、未婚九四）。労働者のうち сумошники とよばれた独身労働者は工場に短期間しか住まず、工場住民の放浪分子 бродячий элемент を、残りの部分が「たえず戻ってくる労働者 постоянно возвращающие рабочие」をそれぞれ構成した。[34]

以上のような個別的情報から労働者のあり方についてとりあえず次のように論点（仮説）ないし特徴を乱暴に取り出してみよう。

ア　大工場ほど労働市場が広く、しかもそこには労働者自身の志向性が部分的に作用している（論拠となる情報①、

⑮)。

イ 不況期の人員削減はまず流入労働者からなされ、地元労働者が固定的な基幹労働力をいつも形成した(②)。

ウ しかし、その地元労働者も夏期には農作業のため工場を離れる傾向があり、その場合、他所からの労働力が補充された(③、④)。

エ 労働者に工場間移動が観察された(⑤、⑥)。

オ 地元労働者用の労働市場のひろがりは工場から精々数キロメートルの円周内部であったと推測され、このことが彼らと家(農作業)との往復運動を可能にした(⑦、⑧、⑨)。

カ しかも特定な工場と村との間に歴史的な関係が労働力の需給をめぐり確立していたと思える(⑩、⑪、⑫)。

キ 地元織工は工場労働よりも自宅(機小屋ないし農家)での労働を好む傾向がみうけられた(⑬、⑭)。

ク 工場労働者も性別や家族状態により当然あり方が相違した(⑯)。

右に取り出した論点(仮説)をさらに検討しよう。

ロシア工業発展の最も特徴的なことの一つは資本主義経営が小さな поселок で発生したことである。知られているように、都市にではなく、農村に工場が進出していったことについてはレーニンをはじめ同時代人も注目していた。農村部に成立した工場を中核とする拠点については、промышленное селение, индустриальный центр, фабричный поселок(あるいは単に поселок)、фабричное село といった用語が従来使用されてきた[35]。このうち поселок は現代ソ連でいわば「ニュー・タウン」を意味するように、旧来の村落 село(ないし деревня)とはその出自が異なる人為的に創出された新しい村落といった意味合いがこめられ、поселок с селами といった言い方もされる。一方、фабричное село と同系列で кустарное село とも言われて工業の時系列的発展度合いも意識した用語法もあるが[36]、

конгломераты фабричных сел（あるいは фабричные села с промышленным городом）といった言い方もされ、その例としてボゴロツク市がグルホフ、イストノキン、ウスペンスキーの各工場村に囲まれていたことが上げられる。[37]

これら新興の工業拠点をツァーリ政府は「都市」に認定しなかった。それだけでなく、一八六三年一一月一一日法により、農村の都市改造にあたり戸長の三分の二以上の賛成を必要として実質規制し、身分的課税原理に一致するこの法が機能し続けたことはいたく都市形成をさまたげたのであった。[38]

それで相変わらず村と呼ばれながらも都市顔負けの人口を擁する工業村がモスクワ地方を中心に存在することになった。ヴォダルスキーは一八九七年センサスから人口五〇〇人以上の大きな村落は全国に約一三〇〇あり、そのうちモスクワ県に最多の五〇〇が集中し、それらの内二〇〇が工場村かクスターリ村であったとみている。[39] なお、同センサスで最大の工業村はヴラジーミル県のオレホヴォーズエヴォの四万三一〇〇人である。[40]

モスクワ市を円の中心とすると半径ほぼ一〇〇キロメートルの円周上にセルプホフ市とクリン郡カレーエフスカヤ郷が位置し、そこに工場や機小屋そして労働者の一定の集中・集積をみたが、その内側の、特にモスクワ市近郊подмосковьеの東部がよく繊維工業が発達した名実ともに中央工業地帯であった。そこに綿工業はほぼ均等に、絹工業は二〇～七〇キロメートル帯に、ラシャ工業は〇～五〇キロメートル帯に分布した。[41] モスクワ市東部近郊に工業地点が集中したのは歴史的地理的理由によるであろう。モスクワ県ではセルプホフ市を除き、郡都は工業地と認めることは出来ない。[42]

さて、右に取り出された論点の幾つかは労働市場に関するものである（直接的には**ア**、**オ**、**カ**）。まずこの問題に限定しよう。

オでは地元労働者の労働市場は工場から数キロメートルの範囲内と推測したが、私の気づいた他の資料とつき合わせるとどうか。

①ボゴロツク郡と並ぶモスクワ県の工業郡であるブロンニツィ郡の在村工場「ラーメンスカヤ綿紡織工場」（一八八〇年現在、紡錘七万三〇〇〇、力織機七〇〇、恒常的労働者三一九〇〈地元二七五五、流入四三五〉）の場合、この工場を紹介したシードロフは「工場圏 фабричный район」なる用語で労働市場を示し、この場合それは直径二五ヴェルスタの円から成り立ち、円周内に同郷三二村をふくみ、最寄り村落の住民は七五％が工場に引き寄せられたとする。二五ヴェルスタは夏期に臨時に一〇〇〇人以上の泥炭採掘人を採用した場合のひろがりであろう。[43]

②ヴラジーミル県イヴァノヴォ－ヴォズネセンスク市に所在したガレーリン綿工場には一八八七～九〇年時の労働者出身地調査が残されている。その二八六七人は基本的に周辺のシューヤ郡、ネレフト郡、スズダリ郡、コヴロフ郡出身であるが、ヴァシーリエフは労働者を一〇人以上出した郷二八を三グループ化し、同市付近、大きな工場村を含む郷、農村工場中心地の周辺にあり、農村工場地区を形成する郷といずれも工業的ないし工場的な郷であったことを示唆している。彼の計算によれば、同工場へ労働者を供給する「イヴァノヴォ－シューヤ工場圏」の半径は六五～七〇キロメートルで、その基幹部分は三〇～四〇キロメートルであった。[44]

③このイヴァノヴォ－ヴォズネセンスクについてチーホノフが一八九九年の五六九三労働者の出生地調査を分析して、同市は半径約五〇キロメートルから労働者を引きつけている。出生地は一九世紀前半、すでに家内織布と大工場の下請けが広範に普及していた所とほぼ一致するとする結論を導いている。[45]

④ヤロスラヴリ県の在村工場最大手であった「ガヴリロフ－ヤムスカヤ・マヌファクトゥーラ」（亜麻織布。ヴェリーコエ村近郊に所在）の場合、一五ヴェルスタ以内から労働者の七割を集めていた。[46]

⑤「大ヤロスラヴリ・マヌファクトゥーラ」は一九一三年に、所在したヤロスラヴリ市全労働者の半数、全県数の四分の一にあたる九四一一人を集めた同県の代表的都市工場であった。その労働市場は工場から一五キロメートル以内が三割、一二〇キロメートル以上が五割と全く二分された。後者の場合、労働者を供給したのは特にヴラジーミル

（表15）ヴラジーミル県シューヤ郡の「地元」労働者と「非地元」労働者

原籍地と工場の距離	家で食事する労働者		通年工場で食べ、寝る労働者	労働者数
	通　年	一　時		
0－1	1109 (95.9)	42 (3.6)	6 (0.5)	1157 (8.2)
2－5	2935 (90.1)	194 (6.0)	128 (3.9)	3257 (23.1)
6－10	1327 (33.5)	762 (19.2)	1876 (47.3)	3965 (28.1)
11－15	46 (1.6)	87 (3.1)	2671 (95.3)	2804 (19.9)
16－20	7 (0.4)	6 (0.3)	1763 (99.3)	1776 (12.6)
21以上	4 (0.3)	1 (0.1)	1138 (99.6)	1143 (8.1)
（ヴェルスタ）	5428 (38.5)	1092 (7.7)	7582 (53.8)	14102 (100)

［典拠］　本節の注（45）のチーホノフ論文、107頁。

県ユリエフ郡であった。つまり、農民副業として家内織布の発展をみていた同郡では一八七〇年代中頃から有資格織工が大量に同工場に入ることになったといわれる（何故、同工場が選ばれたのか、残念ながら説明に欠ける[47]）。

これら五つの事例は今回私が関連資料を読む中で気づいた、具体的数値を示した貴重なものである。サムプル数が極めて少ないが敢えて次が言えるであろう。

一、在村工場の場合、①、④ともほぼ半径一〇キロメートル余りから大半の労働者を調達しているが、両者は最大手のもの故、在村工場労働市場のひろがりを仮説**オ**のように標準ないし平均数キロメートルとするのは大きな誤りではないだろうこと。このことについてチーホノフはヴラジーミル県の代表的工業郡シューヤに関して、在村工場の近辺（一ヴェルスタ以内）はほとんど農業的でなく、工場から離れるにつれ労働者の経営における農業の役割が増大するが、五ヴェルスタの距離でそれ以上離れても各種の農業指標は変化しなくなるから、五ヴェルスタが工場の作用が及ぶ範囲とみている。このことは付**表15**から明らかなように、五ヴェルスタ以内の労働者は日常的に家との間を往復する「地元 местные」であることと対応している（六～一〇は中間、一一以上が「非地元 неместные」[48]）。

二、さらに⑤の例が示すように、都市工場でもこの五ないし一〇数キロメートル以内の部分が基幹労働力を一定形成しただろうこと。都市工場の場合、その不足部分をはるか遠方からの、歴史的にルートがつくられた出稼ぎ労働力で補う二重構造があったろうこと。

（表16）ヴォロコラムスク郡の副業従事状態（1881年）

§出稼ぎ小営業	2830人	(67.1%)
1.打毛工（コストロマ、ニジェゴロド県などへ）	412	(9.8)
2.暖炉工・煙突掃除人	266	(6.3)
3.工場労働者（モスクワ市、ペテルブルグ市などへ）	558	(13.3)
4.モスクワ市での稼ぎ（門番、日雇など）	1160	(27.3)
5.モスクワ市でキャベツ取り入れ	234	(5.6)
6.行商	200	(4.8)
§地元での稼ぎ	1386人	(32.9%)
1.地元小工場での労働	221	(5.2)
2.大工・指物師（一部モスクワ市などへ）	414	(9.8)
3.鍛冶・バター製造・棺桶屋	105	(2.5)
4.縫製・製靴	147	(3.5)
5.製革	54	(1.4)
6.猫取り	171	(4.1)
7.牧童	61	(1.4)
8.森林小営業	213	(5.0)
合　　計	4216	(100.0)

［典拠］　ССС, отдел санитарной статистики, т. 3, вып. 6, М., 1882, стр. 80.

まだ検討すべき論点が残されているが、それらは次節以降におくって、本節の最後に農業郡での人の動きについて一言しておきたい。

「小営業はほとんど最終的に消滅してしまい、大工場工業は農奴解放後長期にわたりなぜか根付かない[49]」（モジャイスク郡）ような農業郡にあって、農業のみで生活しえない人々はまず地元にかろうじて存在する工業施設を貴重な稼ぎ場とみて占拠するから、これら諸郡の工場労働者で地元出身者が占める割合が高くなった。例えば、クリン郡ではほぼ九割に達し[50]、ヴェレヤ郡でも同様であった[51]。当然、それだけでは不足するため、農業郡では遠方への出稼ぎが盛んになった。一八七六年の全県平均男子の三八％ほどに旅券が渡ったとする資料で、郡別最多のセルプホフ（五一％）以下、ルザ、ヴォロコラムスク、コロムナ、モジャイスク（四四・五％）まで全てが農業郡であった[52]。農業郡でもクスターリ生産未発達の郷ほど出稼ぎ率は上昇し、例えばヴェレヤ郡のそれらの郷の男子は七割近くが出稼ぎした[53]。

『モスクワ県統計報告集』（衛生統計編）第三巻第六分冊にゼムストヴォ参事会がヴォロコラムスク郡の一時的義務負担農民四二一六人に対して行った副業営業調査結果が載っている（**表16**を参照）。四二一六人は当該者の約一六％に相当するというから統計上は全体像を推定するに充分であろう。出稼ぎ七割、地元三割といった割合が農業郡各地で見られたようだが、今の私はこれ以上の資料をもたない。

(1) Сборник статистических сведений по Московской губернии［以下 CCC と略記］, отдел хозяйственной статистики, т. 7, вып. 3, М., 1883, стр. 4.

(2) Первая всеобщая перепись населения Российской империи, 1897г., т. XXIV, Московская губерния. СПб., 1905, стр. 310-311.

(3) CCC, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 1, стр. 142.

(4) CCC, отдел хозяйственной статистики, т. 7, вып. 3, 付表。佐藤芳行「一九世紀後半のヨーロッパ・ロシア中央部諸県における小工業の展開」［九産大］『商経論叢』、二六巻四号、一九八六年五月、表六。

(5) М. К. Рожкова. Формирование кадров промышленных рабочих в 60-начале 80-х годов XIX в. по материалам Московской губернии. М., 1974, стр. 22, 65-66, 83, 92, 157-158, 171.

(6) 鈴木前掲書、二四五、二六五～二六六、二九四～二九五頁。佐藤『商経論叢』論文、二七巻二号、一九八六年九月、二〇二頁。

(7) CCC, отдел хозяйственной статистики, т. 7, вып. 3, стр. 16-17.

(8) П. Г. Рындзюнский. Крестьянская промышленность..., стр. 91-95.

(9) 佐藤『商経論叢』論文、二七巻三号、一九八七年一月、二四五、二四八頁。綿工業についていえば、この時期モスクワ地方で機械制織布と農村家内織布が並存したことはわが国の経済史研究で共通の認識になっている。例えば次を参照。有馬達郎「帝政ロシア綿工業の発展構造(二)」、［新潟大学］『経済論集』、四四号、一九八八年三月、二二頁。

(10) М. К. Рожкова. Указ. соч., стр. 121.「［ブロンニッィ郡では］手芸による家内生産は機械制織布の発展により縮小したが、七〇年代末から八〇年代初めにはその完全な衰退には至らない。［むしろ］一八七〇年代末～一八八四年の間、農家と機小屋の織機数の減少はブロンニッィ郡には関係せず、そこでは幾らか増加しさえしている。」

(11) П. Г. Рындзюнский. Крестьянская промышленность..., стр. 41.

(12) Там же, стр. 252.

(13) CCC, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 1, стр. 237.

(14) Там же, стр. 236.

(15) С. Короленко. Указ. соч., стр. 267-268.

(16) CCC, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 1, стр. 144.

(17) Сведения о селениях и жителях Московской губернии, I. Богородский уезд. М., 1873, стр. 143-311.
(18) ССС, отдел санитарной статистики, т. 7, вып. 3, стр. 15-16.
(19) ССС, отдел санитарной статистики, т. 3, вып. 16, М., 1888, стр. 1, 2, 26-28.
(20) Там же, стр. 95, 101.
(21) Там же, стр. 217.
(22) Там же, стр. 222.
(23) Там же, стр. 359.
(24) Там же, стр. 178-179.
(25) Там же, стр. 294.
(26) Там же, стр. 338.
(27) Там же, стр. 327.
(28) Там же, стр. 316.
(29) Там же, стр. 323.
(30) Там же, стр. 211.
(31) Там же, стр. 170.
(32) Там же, стр. 208.
(33) Там же, стр. 239.
(34) Там же, стр. 115.
(35) ただし、佐藤『商経論叢』論文（二七巻二号、一八四頁）のように、農業と工業とを結合する農戸を多数かかえる村落全般を「工業村落」とするのは少し乱暴である。
(36) Я. Е. Водарский. Промышленные селения центральной России в период генезиса и развития капитализма. М., 1972, стр.198.
(37) Г. М. Лаппо. Пути развития старых промышленных центров подмосковья.《Вопросы географии》, сб. 41, 1957, стр. 228.
(38) П. Г. Рындзюнский. Крестьяне и город..., стр. 238, 258. この論点をめぐって、チーホノフは、ツァーリ政府は明らかに都市が新たな産業地点としての権利を行使することを望まず、恐れていたとする（Указ. соч., стр.52.）。モスクワ周辺が都

市化しなかったことは欧米の研究者も着目している。例えば、ブラドレーは、モスクワの後背地は驚くほどわずかしか都市化しない。モスクワの隣接各県全では欧露の都市居住者の平均的割合を越えず、越えたのはモスクワ県の四郡のみである。モスクワ県の後背地の都市住民の割合は大変にゆっくりとふえ、時に減りさえした、という。J. Bradley, Muzhik and Muscovite, Urbanization in late Imperial Russia, University of California Press, 1985, p. 32. また、ジョンソンの場合、モスクワ市を取り巻く主要工業地帯に「非都市地域」の名をつけている。R. E. Johnson, Peasant and Proletarian, The Working Class of Moscow in the Late Nineteenth Century, New Jersey, 1979, p. 25.

(39) Я. Е. Водарский. Указ. соч., стр. 9, 19.

(40) Там же, стр. 240. (巨大工業村一覧表)。

(41) ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 1, стр. 147, 150.

(42) ССС, отдел хозяйственной статистики, т. 7, вып. 3, стр. 5.

(43) И. С. Сидров. Раменская фабрика. 《Юридический вестник》, 1886, №1, стр. 145-149, 1886, №2, стр. 358.

(44) Б. Н. Васильев. Указ. статья, стр. 218-222.

(45) Б. В. Тихонов. Миграции фабрично-заводских рабочих в шуйском уезде Владимирской губернии (по материалам земской подворной переписи 1899г.). В кн.: Историческая география России XII-начало XX в. М., 1975, стр. 113-114.

(46) М. Г. Мейерович. Указ. статья, стр. 37-38.

(47) Там же, стр. 30, 33, 36.

(48) Б. В. Тихонов. Миграции..., стр. 106-107.

(49) ССС, отдел санитарной статистики, т. 3, вып. 6, М., 1882, стр. 9.

(50) Там же, т. 3, вып. 1, М., 1881, стр. 63.

(51) Там же, т. 3, вып. 3, М., 1882, стр. 40.

(52) Там же, т. 3, вып. 6, стр. 2.

(53) Там же, т. 3, вып. 3, стр. 6.

六　副業に携わる人たち

節を改めて残された論点を検討したい。論点は多岐に渡り複雑である故、便宜的な整理を加えるが、到底十全たるものにはなりえないことを前以てお断りしておく。

労働力移動の観点からすれば、副業的営業を地元で行うか遠方へ出稼ぎするかが最も区別さるべき基準となろう。勿論、既述の通り、農民にとって地元と出稼ぎの間の壁を越えることは可能であったし、それを強いられることもあった。

一　地元労働

●振り子移動

地元に工場などの働き場があれば農民は自宅からそこへ通うであろう。これは既に触れた地元の労働市場の核心部分を構成する動きであり、精々数キロメートルから一〇キロメートルの半径を限度とした。例えば、ラーメンスカヤ工場の場合、六キロメートル以内の近村からくる農民は自分の村に住んでいた（更に遠方からの者＝出稼ぎ者は特にモスクワ地方の場合、工場宿舎に居住した。同工場の場合、比率は半々）[1]。こうした農民の往復運動をチーホノフは「振り子移動 маятниковые миграции」と呼んでいる[2]。

●労働の継承性

自宅付近に工場が長期間存在すれば、世代を越えて一家が工場労働に関わる可能性は高くなる（特に主人が工場労働する家を「工場一家 фабричный дом」という場合がある）。つまり、工場労働が農家の伝統となる。ロシア・ソ

ヴィエトではこのことを工場労働の継承性（連続性）преемственность фабично-заводского труда と呼んでいる。この継承性を示す数値は幾つかあるのだが、例えば、デメンチェフは一八八四～五年のセルプホフ、コロムナ、ブロンニツィ三郡調査（工場労働者一万八五七六人）で継承率を五五％とし、特に「繊維加工労働者」に七〇・五％をみて、全般に機械労働をやるグループほど継承率は高くなるとして[3]、これをあたかも「プロレタリアート」度を測る目安と見た。乱暴に言うと、この視角はレーニンを経由してソヴィエト史学界にまさに継承され、中でも一九六六年のイヴァーノフ論文が決定的な役割を果たした。この長大な作品は労働者階級の人的補充源として農民だけにでなく、労働者の家族にも目を向けるべきことを正当に指摘するものであったが、そうした継承労働者こそが土地との関係を切断している本来的プロレタリアートを形成するだろうとみたのである[4]。

こうした見方が予断の結果であることは明らかである。繰り返すが、自宅付近に工場があれば農作業の傍らで工場労働を続けられるから、すすんで土地を捨てようとはしない（これは大切な点だ）であろう。私以外にも反論に相当する（と私自身がみなせる）議論があるから、それを援用しよう。ロシコーヴァは一八八一年のペスコフのモスクワ市繊維労働者調査（四三九一人）〔後出〕での四二・八％とデメンチェフの右の七〇・五％を比較してこう言う――モスクワ市の方が小さな数字なのは一見予期しえないことかも知れないが、同市の工場は広くから労働者を集め、一方、最寄り工場に稼ぎを求める農民は親と同じ工場へ行くから、当然の数値だ。しかし、同時に彼らは世代を越えて土地との結びつきを維持している[5]。チーホノフはヴラジーミル県イヴォノヴォ－ヴォズネセンスク市の労働者の中で工場労働の継承性がより認められるのは分与地持ち農民であり、分与地なし農民は工場労働するための準備段階を徒弟としてただ働きする余裕すらないのである〔この点も大切である〕、という[6]。もう一人、現代アメリカの労働史家ジョンソンの場合、幾つかの数字をあげて、継承労働者の存在は進歩や変化よりもむしろ時に伝統主義や後進性と結合しうるものだと結論している[7]。

●工場労働の「定員」

地元工場に働く継承労働者の割合はモスクワ地方にあって早くて一八七〇年代、ふつう一八八〇年代にある一定の数値を得て固定されたと推定される。このことは工場労働が農民によって本格的に認識され、構造的にそれが農民経営の一端を担うことを意味する。ヴォダルスキーは、モスクワ県と特にヴラジーミル県について調べた後、一八八〇年代以降（それ以前の資料なし）、地元労働者の比重はほとんど変わらなくなった。このことは一九世紀後半、工場に同郷人労働者のしっかりとした定員 устойчивые контингенты рабочих-земляков が発生したことを示し、この定員は労働者の自然減少や生産の一時的拡張にかかわらず維持された。彼らは基幹的な継承労働者から成り立ち、いつも同郷人から補充された、という。(8)

一方、問題のデメンチェフの場合、工場労働者を父とする労働者（つまり継承労働者）の発生に触れた個所で、一八七〇年代の工業発展においては継承労働者部分の存在は稀薄になった（разжидиться）とだけいうのであるが、このことは継承労働者に定員が存在し、それ以上必要な労働力は出稼ぎ者等、他から受け入れざるをえず、生産の拡大に伴いそのようにした結果、比重が低下した（稀薄になった）とここではよんでおきたい。(9)

●労働年

これから後の三つの論点は出稼ぎ労働にもよく関係する。

モスクワ県の農業郡では織工の年間労働日数は九月一五日から翌年四月一五日までの間、祝日をのぞき、約一七〇日、工業郡では九月一五日から六月二九日まで同様に約二二〇日、全県平均では一九〇～二二〇日といったところであった。(10)「工場年 фабричный год」は復活祭（三月下旬）から次のそれまでと定められていたが、ほとんどの工場では聖母祭（一〇月一日）を間に入れて一年二期制の雇傭契約を結び、半年毎に出来高払い賃金基準と労働者数の変更をなしえたから、労働者の移動が年二回、とくにおこりえたのである。(11)

（表17）モスクワ県ボゴロツク郡工場年間稼働状況

生産部門	通年稼働	中断をともなう		計
		夏ほぼ中断	春か夏に稼働	
更紗染め・同型つけ	1	――	8	9
綿紡績・機械織	8	――	――	8
絹・ビロード・錦	23	84	――	107
綿および羊毛の織布	10	19	――	29
ラシャ・絨毯・羊毛紡	10	――	――	10
化学	4	――	――	4
染色	2	9	――	11
磁器・製陶	10	――	――	10
プラトークのプリント	4	――	――	4
銅・ボタン・金銀モール	6	4	――	10
その他	119	4	2	25
計	97	120	10	227

［典拠］ ССС, отдел санитарной статистики, т. 3, вып. 11, М., 1885, стр. 123.

ボゴロツク郡工場の年間稼働状況を**表17**に見て明らかなようにかなりの工場は通年稼働せず、特に夏期に中断した。もちろん、このことは労働者である農民が工場を離れて農作業に出てしまうこと（уход）を最大の理由とした。冬の工場労働で「やつれてしまった」織工たちにとり夏に農作業をやることは新鮮な空気と陽光により自身の健康を回復させるという大切な意味も持ったのである。[12] デメンチェフはわが国の全般的経済事情により賃金はいつも夏より冬が低く、従って工場主にとり夏期に労働者数を減らした方が得であるとあたかも夏のこうした状況を工場主側が人為的にもたらしたかのような話をして労働者と土地との関係を軽視しようとするのであるが、その一方で工場側が夏期に賃金を上げて労働者の引き留めに力を使ったことを指摘するのであるから、読者は混乱を強いられるのである。[13]

●農作業へ出ること

デメンチェフにもう少しつき合おう。彼は労働者が農作業へ出る帰村率を左右するのはその出生地ではなくいかなる業種に関わるかであり、より一般化すれば工場労働者が土地との結びつきを切る最も重要な原因は手生産から機械生産へ移行することであるとした。[14] おそらくこれは一般命題としては正しいのであろう。だがここでは、デメンチェフがいうようにモスクワ県在村工場での帰村率はもはやそれほど高くないとしても、それは在村である故その必要性が都市工場ほどない事情も考慮したいのである。その一方で、**表18**に示すペスコフのモスクワ市調査では常に工場にとどまる部分が三割

（表18）モスクワ市繊維労働者のあり方（1881年）

業種	①サンプル数	②常に工場にいる数	③ ②のうち兵士	③ ②のうち町人	④ (②−③)/① %	⑤継承労働者数	⑥⑤のサンプル数	⑦ ⑤/⑥ %
綿織工	1281	87	33	4	3.9	234	324	72.1
絹〃	615	197	29	13	25.2	202	256	78.9
毛〃	752	97	25	3	9.2	184	287	64.5
ラシャ〃	554	281	35	12	42.2	426	670	63.5
全織工	3202	662	122	32	15.8	1046	1537	68.0
経糸製作	42	19	3	0	38.0	22	42	52.3
手捺染工	449	239	29	7	45.2	99	136	72.8
手織工	207	107	16	2	43.0	59	110	53.6
紡織工	370	144	4	7	36.5	102	124	82.1
けば刈工	40	32	2	5	62.5	25	75	33.3
梳浄工	27	12	0	3	33.8	27	70	38.5
染色工	508	214	44	3	32.8	108	605	17.8
圧縮工	172	123	30	5	51.1	69	259	26.6
小鍛冶工	113	93	11	14	60.0	31	129	24.0
製版工	102	78	9	27	41.1	59	162	36.4
その他	647	406	67	26	48.2	198	877	22.5
雑役工	249	158	58	7	37.3	42	263	16.0
全労働者	6128	2287	395	138	28.6	1887	4391	42.8

［典拠］ П. А. Песков. Указ. соч., стр. 134.

にも満たないこと、これら労働力のあり方を全体として考えないことには理論的整理(!?)を加えてみてもそれは早急で地に足がついていない感じをいなめないのである。[15]

●労働力の流動性

労働力の流動性ということでは、すでに見た農業労働者の方が天候的影響を強く受けることもあり、工場労働者よりもその動きは不安定であろう。

だが一方で、ロシアの労働者は「なんでも屋（a jack-of-all trades）」の評判をえていたように村で働いたり、工場へ行ったり、遠方に出稼ぎしたり仕事のあり方次第といった側面があったことも否定しえない。[16] この限りでは彼らの流動性も高かったといわなくてはならない。ロシアでは何年工場に働いているかの調査はよくなされたが、残念ながらその間に幾つの工場を渡り歩いたかはたずねてはいない。私の気付いた断片的数値を幾つかあげると、一八九九年戸別調査によるとイヴァノヴォ－ヴォズネセンスク市の郊外にいた労働者六二五一人のうち一〇三八人（一六％）が一年のうちに工場を換えている。そのうち五八三人は三ケ所をかわっている。[17] 例の「大ヤロスラヴリ・マヌファクトゥーラ」に働くスタヴァチンスカヤ郷出身農民七八六人のうち、二〇六～二二三人はかつて「ガガーリン・マヌファクトゥーラ」に働いたことがある。[18] 質問を受けた労働者のほぼ二割は自分の村から直接、イヴァノヴォ－ヴォズネセンスクへ入っていない。[19]

これからの情報はまさに中途半端で、想像力をたくましくさせるだけのものでしかない。一年間ないし半年間の労働契約制は契約更新時に一定の流動性をもたらしたと思えるが、圧倒的に多くの労働者は年々同じ雇い主の所へ戻り、移動・流動にあたってもこれまた一定の団体性、組織性（例えば、右に見るように同郷者二〇〇人余りがある工場から別の工場へまとまって移動するというような）といったものがあって、決してカオス的錯綜的な移動にはならなかった印象を受ける。

二　出稼ぎ労働

●アルテリ

人々の移動にあたってそこに組織性や団体性をもたらすのに力があった一つはアルテリである。ここでアルテリとは「契約に基づく平等な何人かの結合体で、経済目標を追求し、連帯責任で結びつき、小営業に労働ないし労働と資本をもって参加するもの」（イサーエフ）[20]ぐらいに考えておこう。もっとも用語法上は一九世紀には共通利益をめざすほとんどあらゆるグループをさすようにルーズに使用されたが[21]、ここではさしあたりそうした用法は採用しない。

小営業 промыслы が副業として農家にとり決定的な意味を持てば、農業をやる者、小営業をやる者あるいは両方をやる者、等々と一家の中に分業が生じるであろう。B・Bの用語を借用すれば、そうした「家族連合」 семейная ассоциация は横に拡張されて「親類間の同盟」 родственный союз をも生み出したであろう。親類間で機小屋を共有するようなことはよくあったのである[22]。これらにやはり昔からロシア農村に存在した農民間の一時的な共同労働「助け合い」 помочь を加えれば、最小限の日常的労働組織は出来上がる。

アルテリの組織する労働力はこれらより幾分かは幅広く、代表者であるスターロスタが目的と必要に応じて労働者と雇傭契約を結ぶことがふつうなされたが[23]、それはほとんど地縁的血縁的人間関係からなされたのであった。ロシア

の公衆がこのアルテリに対して関心を最も増大させたのは一八六〇年代中葉から一八七〇年代初頭のころであってアルテリ原理の生産（信用・消費）部門への適用が試みられた。人々は共同体的土地所有と並んでアルテリにロシア社会の発展に果たすであろう独自な役割を期待し、工業の共同組合的進展を模索する人も出たのであった。[24] そして、トヴェーリ県ゼムストヴォがアルテリ振興にことのほか熱心であったことはよく知られている。[25]

アルテリは実に多方面に機能した。工業（ないし生産）分野のアルテリは生産原料の確保を目的とした「原料アルテリ」（木材加工、皮革などによく普及）、製品、販売のための「倉庫アルテリ」、生産全般にかかわり、中心的な位置をしめた「生産アルテリ」、機械や設備の共同利用を目的とした「補助的アルテリ」に普通四分類されるが、工場制生産の現場で、この種の生産アルテリに出会うことは少なかったことは注目してよい。例外的だったのは捺染工アルテリであり、それは繊維工場内部であたかも自立した個別的な組合を構成し、工場側はアルテリの代表者 артельщик のみと関係をもった。こうしたことは捺染作業の性格から説明されているが、おそらくこのような事情も作用して労働運動時にも彼らは独自な動きを見せることが多かったのであろう。[26]

生産アルテリはクスターリ工業レベルにも全般的にそれほど普及しなかったが、やはり例外的だったのはクスターリ織工のアルテリであり、これはヴラジーミル県とコストロマー県に最もみられた。[27]

生産アルテリが最も存在したのは大工、石工、土木などの出稼ぎ者においてである。「出稼ぎアルテリ」とでも称してよいこれらいわゆる渡り手工業の場合、歴史的に形成された、特定地区から特定業種の働き手が出かける慣行があった。例えば、ヴラジーミル県スドゴツク郡スリフツォーフ村から出た大工アルテリはモスクワ市で彫刻装飾や寄せ木といった手のこんだ仕事をしたグループであったが、彼らは十二月～復活祭、復活祭～七月八日（カザンスカヤ）、変容祭（八月六日）ないし聖母昇天祭（八月一五日）～聖ゲオルギー記念日（一一月二六日）の年三期間、八～一五人ほどのアルテリを構成した。アルテリのスターロスタは全員の旅券を整え、鉄道切符を入手し〔鉄道については後出〕、モスクワか

ら村へ税を送金するか自分で運んだりした。賃金の最終的な精算は帰村してからなされ、スターロスタはまず純益を均分してから、仕事の出来栄えに応じてメンバー間で幾分かの差をつけることをした。[28]

このほか暖炉工、左官、炭焼き夫、木挽きといった人たちも含め全体として建設関係に生産アルテリが普及したのはそれらがとりわけ共同作業を求められたことにあるのであろう。[29] ロシア工業史の常識からすれば、渡り手工業は一九世紀におけるクスターリ工業登場とともに衰退して行く運命にあったのだが、人々の特徴的な動きとしておさえておく必要があろう。さらに決して生産的でないのだが、両首都をはじめとする都市に「乞食アルテリ artel' нищих」も強固に存在した。これについては後に触れたい（八節参照）。

生産アルテリのように直接、生産過程に関わるものではなかったが、おそらくそれ以上に普及したのが給食アルテリ харчевые артели であった。これは大小ほとんど全ての工場で観察されたが、興味深いことに綿紡織工場では例外的にしかなかったものである。家族持ち労働者は独自に食事をしたが、それ以外の単身者の多くがこれに参加したのである。[30] 一八八一年にモスクワ史織維工場調査を公表したペスコフによれば、工場側は労働者への給食をやらず、この給食アルテリにまかす傾向があった。そこではやはりスターロスタが選出され、収支一切をとりしきったが、彼が文盲の場合は「ゼムストヴォ」земский と呼ばれた計算係が有給で働いた。ペスコフはその報告書に市内各工場での給食アルテリ一覧を掲載している。[31] 給食アルテリは工場に入った労働者間で便宜を図ることを第一としたから、人の移動に直接の影響や作用を及ぼすことは少なかったと思えるが、そこで作られた人間関係が移動に何らかの意味合いを持ったろうことを否定することは出来ない。

この項の最後に「新しいアルテリ」に触れておきたい。二〇世紀初頭の大戦前夜モスクワ市に生産アルテリが一四五数えられたが、それらは貴金属工、銀メッキ工などを中心とした、西欧流の協同組合運動としてのアルテリ結成運動から生み出されたものであり、それ以前からの伝統的なアルテリとは質的に区別される内容を孕んでいた。[32]

●同郷人がつくる世界

出稼ぎアルテリは同郷人で構成される機会が多かったのだが、同郷人 земляки がつくる世界 землячество はより広くひろがっていた。一般に人々がみせた集団行動とゼムリャーチェストヴォとの有機的関連を指摘することは可能であろう。出稼ぎアルテリに典型例を見るような特定の場からくる労働者が特定の職種に集中する傾向といったことだけでなく、労働争議においてもその基礎単位となったのが同一地区出身者が多かった作業場 мастерская であったといった事例（ジョンソンは『モスクワ金属（グジョン）』工場で四一人中三七人がニジェゴロド県のある町の出身者であった例をあげている[33]）まで、資料的に論証は困難なのだが、同郷人がつくる世界が人々の動きに一定の作用を果たしたことはいえるであろう。

●鉄道

さて、農民たちは遠方への移動にあたり徒歩か馬で行ったのだが、それでも鉄道がかなり利用されたことは意外かもしれない。しかし、高い運賃を支払う余裕など農民には全くなかったはずとするのは勝手な想像である。

ロシアの鉄道は貨物運送を第一とし、旅客輸送に意をたいして払わなかったろうことは確かである[34]。中央工業地帯の核心部分を東西に横切ったモスクワ＝ニジェゴロド線の場合、一八六三～八五年の貨物収入は一億一四三四万ルーブリであったが、旅客収入は四三七〇万ルーブリにすぎなかった[35]。工場は鉄道と結ばれることで発展しようとし、例えばボゴロツク市と例の「グルホフスカヤ・マヌファクトゥーラ」は一八八五年、同線ステパノヴォ駅から同市を通過し、工場のある村まで支線を引くことに成功した[36]。その鉄道に労働者たちも乗ったのである[37]。シューヤ＝イヴァノヴォ線では労働者の移動はほとんど一年を通してみられ、シューヤとイヴァノヴォの間を往復して、時にその団体は八〇〇人になった。モスクワ＝ニジェゴロド線には労働者の団体はみられなかったが、四月、八月、一〇月にモスクワへ行く出稼ぎ者がみられ、彼らの戻りは三月末か四月初め、六月末、一一月となった[38]。トヴェーリ県ゼムストヴォ

参事会議長によれば、同県農民で稼ぎに出るのは毎年一二万人であり、そのうち五万人がペテルブルグへ鉄道で行き（三～四月に一万二〇〇〇人）、モスクワへは四万五〇〇〇人（同期一万五〇〇〇人）がそうした。[39]

一八八五年、タガンログ、特にロストフの鉄道駅は南部から故郷へ戻る労働者たちであふれかえった。南部が不作のため、彼らは仕事にありつけなかったのだ。[40] 農業出稼ぎ者には遠路、徒歩で行く者も多かったのだが、彼らを満載した鉄道はまさに「生きた貨物」列車となった。[41] 一八九六年にカルイシェフが一五年前にクルスク＝ハリコフ＝アゾフ鉄道を利用した出稼ぎ一〇〇〇人を調査した結果を紹介している。それによると、その八四％は出稼ぎに二～六ケ月をつかい、稼ぎ平均は三八・二ルーブリ、支出は二一・八ルーブリで純益一六ルーブリ四〇カペイカ（月平均四ルーブリ）であったから、人々はわずかの収入をえようと移動を繰り返したのである。

三　副業農家

ここで副業にたずさわる家族レベルの話を少ししたい。すでに何度か述べたように、副業や出稼ぎをする農家は標準的であって、逆により貧困な層にはそうしたことをする余裕さえなかったと考えたい。少なくとも工業諸県では農民土地規模と農村から出る度合いとの間に直接的関連性はなく、むしろ分与地の多い「不在農家 отсутствующие дворы」がより多く見られる、とはルインジュンスキーの言であった。[42]「不在農家」とは一家全員が離村し、農村とは租税支払いなどでわずかにつながっているものをさす。

●早婚と大家族制？

さて、早婚と大家族制が工業的な出稼ぎと結合しており、このことがロシアの社会経済発展に重大な帰結をもたらした、とするのがジョンソンの結論の一つである。[43] 男子農民は出稼ぎにそなえてなるべく早く結婚しようとしたこと、[44] おそらくこのことは否定しえない事実であろうが、彼らが大家族制を維持したとすることは議論の余地があろう。

ジョンソンはそれを証左するとする幾つかの数値をあげたり、非農業的出稼ぎが早婚・大家族制のパターン持続に貢献したから、それは農村部の保守主義を強化する役割を持ったとまで主張する。[45] また近年、女性労働者論を公刊したグリクスマンの場合も大家族制は革命までロシアの家族組織の最も優勢な形態であったと言い放ったままである。[46]

ここで問題なのは改革期ロシアの家族制を相変わらず(!?)大家族制のみでつかまえて済ましていてよいかである。すでに触れたように、わが国では松井憲明氏の論考がよく示すように、[47] 農奴解放後二〇年間で農戸二～三戸に一戸が分割され、一八八〇年代にむけ男子働き手が複数いる農戸で、とくに兄弟間で家族分割がおき、男子働き手が一人しかいない非常に多くの「個人経営型」の農家が生み出されていたのである。大家族制の衰退過程については、同時代人も現代ソヴィエト史家も異句同音に述べている。一八九九年のセミョーノフは当時の代表的地誌において、今は家族生活のあり方は移行期にあり、新しい生活原理と古いそれが闘っているとした上で、家族分割は昔は極めてまれであったが、今や最も月並みな現象 самые заурядные явления だとし、ついでに「今日結婚し、明日分かれる сегодня женился, а завтра отделился」といった流行文句まで紹介している。[48] 一方、アンフィーモフたちは次のように言う——改革期に始まる大家父長制家族の衰退過程はまず非黒土地帯にみられ、そこでは出稼ぎと非農業的稼業が若者に益々独立した地位を与えた。大家父長制の衰退は全体として村団の若返りをもたらし、そこには女もよく顔を出すようになった。[49]

これらのことから改革期の少なくともモスクワ地方について早婚はともかく、大家族制をことさら強調するのは疑問である。家族分割の結果生まれた「個人経営型」の農家がどのような副業経営を行っていたか、その具体例は私の紹介文[50]をみてほしい。

● 女の位置

改革期、農村の女たちの地位にも変化が生じたと思える。夫が出稼ぎなどで家を空ける機会が増えた分、残る妻の

役割は大きくなり家政を執る中心となったのは相変ずであったが、家族分割の進行にともない主婦一人一人の発言力は上昇しただけでなく、家族分割自体が彼女たちの切願でなされるケースが多くなった。[51]

女自身が外部で働く機会が増えたこともあった。コロムナ郡の絹生産に慣れていた娘たちは同郡に工場が少ないので遠方まで喜んで働きに出たし、ボゴロツク郡ザポノルスカヤ郷ステニンスカヤ村のコモフ兄弟絹工場にはリャザン県やヴラジーミル県から娘たちがやってきていた。[52]

通例、主婦は農村にとどまる傾向が強く、寡婦は出稼ぎする割合が高かった。**表19**はヤロスラヴリ県、二〇世紀初頭の男一八才以上、女一六才以上の家族状態別出稼ぎ者割合を示している（左側が男、右側が女）。この表を示したヴォロビエフは今日農村ではプロレタリアートの「寡婦グループ」を発達させる土壌があるとコメントしている。[53] 従って出稼ぎ者の年令構成は男より女が高くなる傾向があり、村団側としても分与地維持能力が乏しい寡婦たちの出村・離村をむしろすすんで承認したから、全体として女子労働者は男子よりも農村との関係を切ることがありえたのである。

さて、都市などへの男子出稼ぎ者はふつう農村の娘との結婚を選んだことは注目されてよいであろう。全ての **питерщики** は貧しい者も豊かな者もみなが村娘を妻にしたのである。[54] 両親も息子がそうすることを望み、一月に結婚して、三月に夫はペテルブルグへ出稼ぎに出て新妻はそのまま村に残り、子供がない場合のみ、まれに夫をたずねたりしたのであった。[55] こうした選択は、すでに触れたように村娘たちが **питерщики** を好んだといった理由とは別に、都市（出稼ぎの夫）＝農村（その妻）関係を人間関係的に保つことで出稼ぎ農家の複合的家計の維持を可能にするためにされたのであった。

さらにモスクワ市に移り住んだ若い農婦は農村に戻って結婚し、そこで子供を育てることも行われた。[56]

（表19）家族状態と出稼ぎ率

独　身	31.0%	36.4%
既　婚	66.8	38.7
離　別	2.2	24.9
	100.0	100.0

［典拠］ Кл. Воробьев. Указ. соч., стр. 11.

農村部から多数の男子が出稼ぎに出た結果、男女の比率に大きな不均衡が生じた。一八九七年センサスによれば、農業郡ほどそのアンバランスは強く、男子一〇〇につき、女子はモスクワ県ルザ郡で一六〇、同モジャイスク郡で一五五にも達した。[57] 都市では逆の現象があらわれた。

(1) И. С. Сидров. Указ. статья, 1886, №1, стр. 150. ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 2, стр. 211 も参照。
(2) Б. В. Тихонов. Указ. статья, стр. 104. Я. Е. Водарский. Указ. соч., стр. 48-49 も参照。
(3) ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 2, стр. 297. Е. М. Дементьев. Фабрика, что она дает населению и что она у него берет. изд. 2-е, М., 1897, стр. 45.
(4) Л. М. Иванов. Преемственность фабрично-заводского труда и формирование пролетариата в России. В кн.: Рабочий класс и рабочее движение в России в 1861-1917гг. М., 1966, стр. 58-140, 特にстр. 100 и сл.
(5) М. К. Рожкова. Фабричная промышленность и промыслы крестьян в 60-70-х годах XIX в. (по материалам Богородского уезда Московской губернии). В кн.: Проблемы социально-экономической истории России. М., 1971, стр. 216-217.
(6) Б. В. Тихонов. Указ. статья, стр. 118.
(7) R. E. Johnson, Ibid., p. 64.
(8) Я. Е. Водарский. Указ. соч., стр. 201.
(9) ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 2, стр. 300.
(10) ССС, отдел хозяйственной статистики, т. 7, вып. 3, стр. 62.
(11) Там же, стр. 310.
(12) Там же, стр. 61.
(13) ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 2, стр. 259, 294, 295, 315.
(14) Е. М. Дементьев. Указ. соч., стр. 14, 25-26, 35-36. やゝに ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 2, стр. 280.
(15) 有馬前掲論文、二五頁も参照。
(16) この点で興味深いのは、一九五〇年代にリャザン州でなされたかつての出稼ぎ労働者に対する聞き取り調査である。彼らは農村経営を存続させつつ、特別な生産技能を持たなかったためしばしば出稼ぎ稼業を変えていた。一、二例をあげると、

一八八〇年生のA・П・バイドゥーリンは一六才でモスクワに出て荷馬車の馭者をやり、三年してカシーラに移ってレンガ工場で働き、村で結婚したあと再びモスクワへ出て、三年間レンガ工場、六年間野菜栽培をやり、その後ペテルブルグへ行って馭者、門番、モスクワ駅での赤帽をやった。同年生のИ・И・クニャーゼフは八才から牧童をしたり、従兄弟の所で日雇農夫をやったが、一七才でモスクワに出て第一次大戦までの間、荷馬車の馭者、土工などをやった。3. A Огрижко, В. Т. Шмакова. Крестьяне-отходники рязанской губернии в конце XIX и в начале XX века. В кн.: Историко-бытовые экспедиции 1951-1953. М., 1955, стр. 147.

(17) Б. Н. Васильев. Указ. статья, стр. 251-252.

(18) Там же, стр. 235.

(19) Б. В. Тихонов. Указ. статья, стр. 117.

(20) А. Исаев. Артели в России. Ярославль, 1887, стр. 21.

(21) R. E. Johnson, Ibid., p. 91.

(22) В. В. Артель в кустарном промысле. СПб., 1895, стр. 4-5.

(23) А. Исаев. Указ. соч., стр. 181.

(24) В. В. Артельные начинания русского общества. СПб., 1895, стр. 17.

(25) Б. Веселовский. История земства за сорок лет. т. 2, СПб., 1909, гл. 3, т. 4, СПб., 1911, стр. 549 и сл. Его же. Исторический очерк деятельности земских учреждений Тверской губернии (1864-1913 гг.). Тверь, 1914.

(26) 高田和夫「ロシア資本主義成立期の労働運動」『土地制度史学』七四号、一九七七年、六六頁。

(27) В. В. Артель..., стр. 42, 49-52. А. Исаев. Указ. соч., стр. 96-97.

(28) В. В. Артель..., стр. 186-187.

(29) Там же, стр. 159 и сл.

(30) ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 2, стр. 223, 465.

(31) П. А. Песков. Указ. соч., стр. 79-81, 95-121.

(32) Н. Г. Брянский. Московские производительно-трудовые артели. Петроград, 1915, стр. 5-14. かつての私はこの新旧区分に気づいていなかった。高田和夫「近代ロシア工場労働者の社会的相貌」『ロシア史研究』三〇号、一九七九年一〇月、特に九頁を参照。

(33) R. E. Johnson, Ibid., p. 77.

(34) 因にこのことについて最初に実感した日本人は一八七三年に入露した「岩倉使節団」の面々であろう。『米欧回覧実記』(四)、岩波文庫、二七頁。

(35) И. Ф. Рерберг(сост.). История эксплоатации Московско-Нижегородской железной дороги за первые xxv лет. М., 1887, стр. 187.

(36) Там же, стр. 6.

(37) 一八七四年の住民一〇〇〇人あたり鉄道旅客数は全国平均で四四二であった。 И. С. Влиох. Влияние железных дорог на экономическое состояние России. т. 1, СПб., 1878, стр. 102.

(38) Доклад о передвижении рабочих партий..., стр. 74.

(39) Там же, стр. 78.

(40) А. Макаренко. Указ. статья, стр. 733.

(41) Н. И. Тезяков. Указ. соч., стр. 8.

(42) П. Г. Рындзюнский. Крестьяне и город..., стр. 111.

(43) R. E. Johnson, Ibid., p. 276.

(44) R. E. Johnson, Family Relations and the Rural-Urban Nexus : Patterns in the Hinterland of Moscow, 1880-1900. in D. Ransel (ed.), The Family in Imperial Russia, Urbana, IL, 1978, p. 265, 269, 271.

(45) R. E. Johnson, Peasant and Proletarian..., p. 66.

(46) R. L. Glickman, Russian Factory Women, Workplace and Society, 1880-1914, University of California Press, 1984, p. 28, 32.

(47) 松井前掲論文、一二三—一二五頁。ただし、「個人経営型」は高田の用語。

(48) В. П. Семенов (под ред.). Россия, Полное географическое описание нашего отечества. т. 1, Московская промышленная область и верхнее поволжье. СПб., 1899, стр. 104-105.

(49) А. М. Анфимов, П. Н. Зырянов. Указ. статья, стр. 33.

(50) 高田「ロシア農村共同体の実態」。

(51) Д. И. Жбанков. О городских отхожих..., стр. 142.

(52) ССС, отдел санитарной статистики, т. 3, вып. 16, стр. 274, 279.
(53) Кл. Воробьев. Указ. соч., стр. 12.
(54) Д. И. Жбанков. О городских отхожих..., стр. 142.
(55) B. A. Engel, The Woman's Side : Male Outmigration and the Family Economy in Kostroma Province,《Slavic Review》, vol. 45, no2, 1986, p. 262.
(56) В. И. Ромашова. Указ. статья, стр. 155. J. Bradley, Ibid., p. 223, 347.
(57) Первая всеобщая перепись населения Российской империи, 1897 г., т. XXIV, Московская губерния, стр. xii.

七　モスクワ市の労働力移動

最初の一八九七年全国センサスのうちモスクワ市部分の編者ブルンネマンはその序言で次のように述べている――ペテルブルグには遥かに多くのインテリ向けの仕事があり、女もかなり容易に仕事を見つけられるのであるが、モスクワでは仕事はより忍耐強い、男の気質をもとめられるのである。モスクワではペテルブルグより男性住民の比率が高く、古い首都へ働きに来る男性はその故郷との結びつきを断ってはいず、故郷に家族は残っていてペテルブルグの場合ほど家族はその夫、兄弟、息子たちのところへ移るようなことはしない。……モスクワはペテルブルグ、オデッサ、ワルシャワのような大都会のように自県と容易に分けられるようなことはない。モスクワは今日まで県民と同質性を保ち、県と密接に結ばれている。(1)

この発言はモスクワ市の周辺農村部とのいわば連続性を強調していて、その近代的メトロポリスといった側面には触れていない。大きな農村と大都会といった矛盾するイメージをモスクワは持ち続けてきていると思うのだが、ここ

（表20）モスクワ地方とペテルブルグ地方の労働力分布（%）

	ペテルブルグ市	同市を除く北西諸県	モスクワ市	同市を除くモスクワ周辺県
都市労働者	87.2	12.8	68.8	31.2
全労働者	66.5	33.5	28.4	71.6

［典拠］ П. Г. Рындзюнский. Крестьяне и город..., стр. 160.

では前者のイメージに沿う話をしたい。

ロシアでは出稼ぎ者を特別な呼び方をすることがあって、例えばヴャトカ県調査に見られる用語として уштяки がある。[2] これなどは遠くへ追いやるとか使いにやるといった意味の услать から発しているようだが、別に、特にリャザン、トゥーラ、カルーガ諸県から工場へ入った者は最下層の労働をして軽蔑をもって степные とよばれたりした。[3] だが、なんといっても有名なのは農村から都会へ稼ぎに行く者をさした питерщик であった。これはすでに何度も触れた用語だが、読者に注意を喚起すれば、この言葉はピーテル、つまりペテルブルグに行く者だけを指さなかったことである。つまり、大工、石工、ペンキ屋、左官など手職を持ち、都市へ出稼ぎする者一般をいったのである。[4] そして彼らは都会的に洗練されてくること(!?)を村民（特に娘）から評価された話もすでにした。ここでこだわりたいのは、何故、ペテルブルグであって、モスクワではなかったのかということである。

モスクワは、すでに見てきたように、周辺地方に豊かな労働力を持っていた。この点で、それに恵まれなかったペテルブルグとは対照的であった。**表20**から明らかなように、モスクワ地方では労働力の七割がモスクワ周辺に分布し、モスクワには三割しかなく、ペテルブルグ地方では全く逆である。さらに都市労働者はペテルブルグ市に九割近く集中したが、モスクワ市は七割で、三割は周辺中小都市にあったのである。

周辺に労働力が豊かなため、モスクワ市の労働市場はペテルブルグ市よりも狭くなり、[5] その周辺地方との間でより濃厚な人文地理的関係が構築されることになった。

一八八二年と一八九七年の二つのセンサスからモスクワ市の職業別労働者分布をみよう（

（表21）モスクワ市職業別労働者分布

職　業	1882年センサス	1897年センサス 全体	男	女
召使・日雇	90.704	139.540	59.698	79.842
衣料関係	65.362	65.172	34.671	30.501
軍務・教会・役人自由業など	58.460	68.203	52.216	15.987
繊維加工	58.053	63.421	37.003	26.418
商業	52.553	56.103	51.585	4.518
運送	34.924	30.951	30.771	180
農業・鉱業	19.632	7.454	6.012	1.442
宿屋・飲食業	18.926	20.939	17.359	3.580
食品加工	17.233	16.438	14.802	1.636
金利・年金生活	15.062	26.168	9.312	16.856
木材加工	14.934	18.783	18.215	568
建設	11.234	22.166	22.042	124
機械・金属	10.001	29.783	29.175	608

［典拠］ Перепись Москвы 1882 года, вып. 2, М., 1885, стр. 131-134. Первая всеобщая перепись..., т. XXIV, город Москва, стр. xxxiv-v, 170-171.

表21）。残念ながら調査方法と整理の仕方も異なり、またその精度も問題となりうるものだから、これらから厳密な数値を引き出そうというのではない。作表上、かなり無理なグルーピングをしている個所もあるから、大体の傾向が知れるぐらいのものと見てほしい。

さて、何よりも注目してよいのは、この都市経済にあって、最大の労働力を必要としたのが「召使・日雇」であり、次いで「衣料関係」であって、工場制工業は二の次、三の次の位置しか与えられていなかったことであろう。

「召使・日雇」は説明を要さないであろうが、「衣料関係」はまず縫製業・仕立業をさすが、一八九〇年のモスクワ市工業施設調査では第一位が「衣料・履物等」で三八一六施設、二万三三九四人として履物生産、クリーニング・洗濯、さらには床屋までも含んでいる。[6] 縫製業の場合、基本的に手労働であってミシンの導入も労働者の集中をうながすまでいかず、小さな作業場毎の分業がなされたから、大経営と小経営の共存は続いたのであるが、この分野で生産の集中をさらにむつかしくした要因としてあったのが、流行の変化とともに労働の季節的性格であった。シーズンは三月〜六月と九月〜一二月初めの年二回で、その間、残業続きの労働となったが、シーズン外はほぼ五割の失業者が出たのである。[7] したがって、季節的な出稼ぎ労働者は縫製業にとりむしろ便利な存在でもあった。

工場制工業では、「繊維加工」のうち「工場織布」として登録された二万八四三八人（一八八二年センサス）が最大グループである。別の一八九〇年調査は織布（二六四施設、二万三四二人）、染色・仕上（一六六、八五八三）、織物・刺しゅう（一三九、二二八六）、ふさ飾り・錦（一三一、一七九一）、その他（五二、二七〇五）の計七五二施設、三万五六八九人を「繊維加工」としている。[8] ここで注意すべきは織布が依然としてかなりの程度、手作業に依拠する技術レベルにあったことである。一八八〇年代初頭もペスコフ調査ではモスクワ市男子繊維労働者九四二一人のうち、手織工が四六二五人とほぼ半数を占め、第二位の糸巻工八〇七人を大きく引き離している。[9] 一八七九年のモスクワ市織布工業調査では手織が織布生産全体の六割強を占めていた。[10]

工業施設も小規模なものが多かった。一八八七年で一施設平均労働者一二人という数字があり（これは同時代人でも「工場」とはよばない数である）、それは一八七九年以降変わっていないといわれる。その九六五〇施設調査では半数の四八九九が労働者一人～五人であり、最大級の一〇一人以上は一一四社にすぎない。もっともその百社ほどに一〇万人余りの労働者のうち三分の一が集中していた。[11] ここには小企業と大企業の典型的な並存・共存があったと見てよいだろうが、ブラドレーに言わせると、むしろ同時代人たちはモスクワを小規模生産の中心と見なし続けていたことになる。[12] もっともこれも新旧二重経済のいずれに目を引きつけられるかによる面もあって、マルクス主義者などは新たな工場制工業の展開を懸命に見い出そうとするであろう。[13]

全体からすれば、改革期モスクワはまずは行政的商業的であって第一級の工業都市とは言いがたいであろう。だが、これも相対的な話であって、周辺の中小の諸都市と比べればはるかに工業的であった。知られているように、モスクワ市の場合、工業施設は市の最も外部、つまり環状道路（サドーヴァヤ）の外側のいわゆる第三地帯及び市南部のモスクワ川右岸地区（ザモスクヴォレーチエ）によく展開した。性格上、衣料と履物生産部門のみが中心部（ツェントル）に多かった。

（表22）モスクワ市の人口

年	合　計	男	女
1864	36万4148	22万9424（63.0）	13万4724（37.0）
1871	59万0468	34万6824（58.7）	24万3644（41.3）
1882	75万3469	43万2447（57.4）	32万1022（42.6）
1897	97万8537	55万4478（56.7）	42万4059（43.3）

［典拠］ Первая всеобщая перепись..., город Москва, стр. ix.

モスクワが周辺の人々に稼ぎ場を多く提供したことはたしかであり、農村で困窮した人たちは逃避場としてこの町を絶えず思い浮かべたに相違ない。

モスクワ市の人口は**表22**のように増加して、世紀転換期に一〇〇万人に達したと推定される。われわれが今回、主たる対象としている時期にあたる、一八七一年から一八八二年の間は年率二％ほどの増加である。男女比は六〇年代にかなり縮まったもののその後、縮小傾向にはあるがほとんど横ばいで男が多い。このことは後に見るように農村部からの単身流入がコンスタントに続いていることを示している。

モスクワ市民の出身地別分布をみると、まず市内生まれと市外生まれの比率がほぼ一定していたことに気付く。つまり、市内生まれだけ見ると一八八二年二六・一％、一八九七年二六・一％、一九〇二年二七・七％であった。[14] モスクワ市生まれとモスクワ県生まれを合わせると一八八二年五〇・四％、[15] 一八九七年四九・七％でこれも安定していた。外国出身者は無視しうる数で、従って、モスクワ市民のほぼ半数が周辺諸県からやってきたことになる。すでに引用したペスコフ調査ではモスクワ県外者が五七・七％とわずかにふえるが、この命題は工業労働者のみについても成立するとみてよいであろう。

この際、モスクワ地方の諸県が県外からの流入者の八割を供給したが（ペスコフ調査ではカルーガ、スモレンスク、ヴラジーミル、トヴェーリ、トゥーラ、リャザンの周辺六県で県外者の九八％を占める）、満遍なくモスクワへ人が出たのでなかった。繰り返すが、特定の地区がまとまった数の人を送り出し、しかも彼らはモスクワ市内においてもまとまって生活する傾向が明瞭に認められたのである。例えば、モスクワ県下のモスクワ郡、ズヴェニゴロド郡、ドミトロフ郡の出身者はスーシェフスカヤ区に、ヴォロコラムスク郡、クリン郡、コロムナ郡の出身者はレフォルトフス

カヤ区に、ボゴロツク郡とブロンニツィ郡の出身者はロゴーシスカヤ区に、モジャイスク郡の出身者はピャトニツカヤ、ロゴーシスカヤ、ヤキマンスカヤの各区に多く、カルーガ県とスモレンスク県出身者はレフォルトフスカヤ区に、リャザン県とヴラジーミル県の出身者はロゴーシスカヤ区に、トヴェーリ県出身者はメシチャンスカヤ区にそれぞれ集まる傾向をみせたのである。[16] こうしたことはやはり同郷人問題の所在を基礎づける事柄であろう。

モスクワ市民の身分別構成に占めた農民身分の割合は**表23**のようであった。農民身分の者が少しずつ増加してきているから、編者のブルンネマンは「明らかにモスクワの住民はますます農民的になっている」[17]というのである。

一八八二年センサスによれば、自分で稼いでいる自活者はモスクワ市内生まれの者の三八・三%で、その扶養者は平均一・六一人であったが、外部からの流入者は八三・四%が自活者であり、その扶養者は平均〇・二人であったから、[18] 流入者の圧倒的部分が単身の出稼ぎ者であったことを改めて知るのである。つまり、モスクワ住民の実に半数以上が家族を農村に残して出てきた周辺地域からの農民なのであった。[19] モスクワは人間関係的にいっても大きな農村であった。この事実自体がモスクワの近代史に与えた諸影響は今後、特に注意深く検討されるべきであろう。

（表23）モスクワ住民の農民身分割合（%）

	1871年	1882年	1897年
男	64.7	65.9	69.7
女	43.6	49.1	55.7

［典拠］ Первая всеобщая перепись..., город Москва, стр. xxvii.

毎年、人々は故郷との間の往復運動をしたから、例えば繊維労働者は聖母祭（一〇月一日）からクリスマス（一二月二五日）の間が最多であり、聖ペテロ祭（六月二九日）から八月中ごろまでの夏期に最少となり、その後徐々にふえ出す[20]といった周辺農村工業地帯に見られたのと同じパターンが観察されたのである。

だが、女の場合、特に寡婦[21]は、既述の通り、農村を見捨てて生活の資をモスクワに求めてくる傾向が強かったから、このパターンからはずれる例外となりえた。しかしそうでない部分はモスクワを単なる稼ぎのための一時的な場所とみなしていて、そこで結婚しようとする者は少数で

あったから、彼女らは生粋のモスクワっ子とは鋭い差違を分けあったのである。

モスクワへやってきた者たちは農村部で特に技能を持ち、読み書きが出来る部分であった訳では決してなかった。概して言えば、近代化論者の一部には右のような部分が都市に集中し、都市化が促進されると同時に農村との間の格差が顕在化するように問題をとらえようとするむきがあるのだが、話はそれほど単純ではなかった。そうした「優秀な」人材が自ら集まってきたのならば、モスクワ市当局や資本家、有識者などが組織的な労働者養成をめぐり危機観を抱く必要もさほどなかったのである（ここには市内生まれの労働者養成も順調でなかった問題もある）[22]。ペスコフによれば、より単純な職種に他県出身者が就く傾向が認められる。綿織工は主にカルーガ県、モスクワ県のモジャイスク、ルザ、ヴェレヤ、ヴォロコラムスクの各郡からやってきていた[23]。

毎年、モスクワ市に流入した人数は一〇万人余りと推定される（一八八二年センサスでは前年に一〇万五三〇人が流入）が、そうした部分が市内にとどまり続けたのでは決してなく（年平均人口増加率からすれば一年に二万人程しか増加しない）、毎年、一〇万人近い数がモスクワ市から出ていたことになる。モスクワ市は人の出入りの激しい町であった。その出る部分はまず出稼ぎ者で戻る人々のほかに、四〇才以上の高令になって（労働能力を喪失したりして）モスクワを立ち去る人たちがあった[24]。彼らが生まれ故郷の農村へ戻ることを示す資料は見当たらないが、逆にそれ以外に行く先を考えにくいであろう。

もう一つ無視しえなかったのは市内で生まれた私生児や孤児が主にモスクワ養育院の養い児питомецとして県下にひろく出されたことである。モスクワ全県下では一八八三～九七年の私生児は二万二四八四人で全出産の二・四％に相当した（欧露五〇県平均で二・七％という数字がある）が、モスクワ市では二五万二五六人の出生に対して五万六六三一人、二二・六％と高率を示した。子供らの多くは農村部に送られて養育されたが、その数はモスクワ養育院関係だけで一八九八年で約一〇万人に達していた[25]。

以上の議論は主にセンサスを利用したのであるが、当然、センサスにかからないもう一つの人の流れがあった。この規模はほとんど表向きの数値（センサス数値）に等しいだろうとする推定もある。[26] 節を変えて、最後にその方も少しみてみたい。

(1) Первая всеобщая перепись населения Российской империи, 1897г., т. XXIV, город Москва. СПб., 1904, стр. xii, xxxiii.
(2) П. Г. Рындзюнский. Крестьяне и город..., стр. 82.
(3) ССС, отдел санитарной статистики, т. 4, ч. 2, стр. 287.
(4) Н. Н. Владимирский. Указ. соч., стр. 47. ゆらに В. П. Семенов. Указ. соч., стр. 100.
(5) Л. М. Иванов. О сословно-классовой структуре городов капиталистической России. В кн.: Проблемы социально-экономической истории России. М., 1971, стр. 323.
(6) Торгово-промышленные заведения города Москвы в 1885-1890 гг. М., 1892, стр. 4, 24.
(7) Е. А. Олюнин. Портновский промысел в Москве и в деревнях Московской и Рязанской губерний. М., 1914, стр. 4, 5, 7, 8, 36.
(8) Торгово-промышленные заведения..., стр. 5, 6, 23.
(9) П. А. Песков. Указ. соч., стр. 87-92.
(10) М. К. Рожкова. Указ. соч., таблица 30.
(11) Торгово-промышленные заведения..., стр. 42.
(12) J. Bradley, Ibid., p. 96.
(13) 例えば History Москвы, т. 4, М., 1954, гл. 3.
(14) Первая всеобщая перепись..., т. XXIV, город Москва, стр. xxviii. Л. М. Иванов. Указ. статья, стр. 324.
(15) Перепись Москвы 1882 года, вып. 2, М., 1885, стр. 66.
(16) Там же, стр. 77.
(17) Первая всеобщая перепись..., город Москва, стр. xxvii.
(18) Перепись Москвы 1882 года..., стр. 228.

(19)「モスクワで仕事をする特に農民身分の多くの者は農村にその家族をおいていて、時々それを訪れるだけである」(一八九七年センサス編者の言。(стр. xviii)。

(20) П. А. Песков. Указ. соч., стр. 1.

(21) 一八七一年モスクワ市住民調査では寡婦は女の一七・六九%を占め、ペスコフ調査では繊維工場女子労働者二二三八人の内訳は未婚二九・八%、既婚五五・三%、寡婦一四・九%。Статистические сведения о жителях г. Москвы по переписи 12 декабря 1871 года. М., 1874, стр. vi. П. А. Песков. Указ. соч., стр. 141-142.

(22) М. Духовской. Соображения по вопросу об устройстве Московским Городским Управлением посреднической конторы для указания работы в г. Москве. [М., 1895], стр. 8.

(23) П. А. Песков. Указ. соч., стр. 114, 118, 121.

(24) Первая всеобщая перепись..., город Москва, стр. xxvii-xxviii.

(25) ССС, отдел санитарной статистики, т. 6, вып. 6, М., 1902, стр. 12, 150. なお、モスクワ養育院については、高田和夫「近代ロシアの労働者教育」〔九大〕『社会科学論集』二八集、一九八八年二月、五の(一)を見てほしい。鈴木健夫氏が紹介したモスクワ県モジャイスク郡コルジェニ村の場合、一三戸で一六人も養い子を引き受けていた。鈴木前掲書、二九一頁。

(26) 例えば、J. Bradley, Ibid., p. 104.

八　ヒートロフカの人たち

一九〇〇年に『職業的乞食』に関する著作を公刊したA・レヴェンスチムはその冒頭で一八七七年の内務省の数字として、全国で乞食を生業としている者は三〇万人で、これは最少の推定値だとした。彼は乞食が増加する理由として政府による貧民救済政策の不備、流刑制度や首都からの所払い制の存在などを指摘している。(1) この著者はなかなかの改良家と思え、また著作自体は当該問題をよく整理した貴重な好著である。彼は乞食となる経済的原因として

次の諸点を列挙している。[2] つまり、家族分割による貧困化とクスターリ営業の不在、南部諸県への人口流入と借地料の上昇、いくつかの地方で稼ぎ場がないこと、農村から都市及び工場中心地へ移住しても、稼ぎがないこと、新天地への移住と労働力の夏期の移動に生じる問題。

彼はこれらの論点を単に指摘するだけにとどめているのだが、これらは私たちがすでに検討してきた事柄と大きく重なっている。さらに、教会の影響から乞食に対する寛容が至る所で見受けられ、そうした「ロシアの生活上の特質」が結果的に乞食をふやすことに力となっているとする指摘[3]は大切である。

さて、この本の最大の利点は乞食の全国的分布とタイプについて見通しを与えていることにある。乞食が少ないか全く認められない地方は南ステップ、ウクライナ左岸、南西部、沿バルト地方、北部、南東ステップの一部といったいわば周縁部であり、一方、「乞食の巣 нищенские гнезда」が存在し、一村全体が乞食稼業をやっているような地方は中央黒土、中央非黒土、中央ヴォルガ、西部の一部といった帝国中央部分に集中する傾向がみとめられる。もっとも、彼は特に乞食稼業が発達した県として、クルスク県以外にイルクーツクとトボリスク両県を、同様に都市ではアストラハン、カザン、キエフ、モスクワ、ニコラエフ、オリョール、オデッサ、ペテルブルグ、サラトフ、チェンストフォヴォ、ヘルソン、ツァリーツィンを列挙している[4]から、乞食が中央部に多く周縁部に少ないというのはあくまで原則としてだが、これから少しく検討してみたいと思っているモスクワ地方とくにモスクワ市の場合、貧民問題が全国的にみて深刻な場であったことはここで確認しておいてよい。

レヴェンスチムは乞食のタイプを農村部と都市部に分けている。前者については教会建設の資金集めを（名目に）するか、単に施しを求めるかする場合が普通である。この際、特徴的なことは特定の村落ないし郷が乞食稼業にいわば特化を見せたことであり、例えばニジェゴロド県アルザマスキー郡のピヤヴォーチノエ・オーゼル村の男子全員は教会建設費のおもらいをやり、ヴォログダ県ウスチスイソリスキー郡のヴォゴロド郷及びウスチネシ郷では全住民の

四分の一にあたる一万五〇〇〇～二万人が大挙して一一月初めにペルミ県へと乞食に出かけ、二月ないし三月に帰村する往復運動を規則正しく続けていた。さらにコストロマー県のマカリエフスキー郡スコロボガトフスカヤ郷からはヴラジーミル、ニジェゴロド、ヤロスラヴリの各県へと集団的な乞食が出たし、モスクワ県の場合はそうした乞食の拠点として二ヶ所が有名であった。つまり、ヴェレヤ郡ヴイシェゴロドスカヤ郷シュヴァーロヴォ村からは年三回、秋に黒土諸県へ、冬にポーランド、フィンランド、沿バルト諸県へ、春に両首都と特にその別荘地へ乞食に出かけており、もう一つボゴロツク郡のザホート（Заход）と呼ばれる、エリザローヴォ、ダヴイドヴォ、リャホーヴォ、バールスコエ、コスチーノの各村を併せた地方は著しく乞食稼業が発達していた。ヴラジーミル県では、ゴロホヴェツキー郡ヴェルフネ＝ランデホフスカヤ郷のいくつかの村々で縫製、大工、木挽きなどの出稼ぎ営業をやる農民以外の部分が「ちょっとした稼ぎ легкое ремесло」として乞食をやっており、さらにスドゴツキー郡のミリノフスカヤ、トゥチコフスカヤ、ボリシェグリゴリエフスカヤの三郷をあわせたいわゆるアドフシチン（Адовщин）地方は乞食の巣で、村民の多くが晩秋に乞食稼業に出て全国をさまよい、春の農作業までに帰村する移動を繰り返した。このような事例をレヴェンスチムはよく採集していて紹介に切りがないから、あとモスクワ地方で目にとまった事柄を少し挙げるだけにしよう。ニジェゴロド県セミョーノフスキー郡ホフロムスカヤ郷だけで乞食が三五〇〇人もいる。同県バラフニンスキー郡ゴロデツ村にいる乞食は流入してきた者たちで彼らは土地には関わらず、通年乞食をやっている。カルーガ県ではジズドリンスキー郡の四村（ザプルードノエ、グショーフカ、ザゴリーチ、オスリンカ）で、住民の大半が乞食をやっており、ここではその稼業はとくに якутальщество とよばれている。リャザン県の場合、リャザン郡、ミハイロフスキー郡そしてスコピンスキー郡のいくつかの村々では乞食稼業が世代を越えて継承され、人々はそれを「真っ当な稼ぎ правильный промысел」とみなしている。(5)

このような乞食稼業のもう一つの特徴は、すぐ前に示したリャザン県の事例からもうかがえるように、かなりの歴

史的背景を有していたことで、例えば一八四〇年代の時点でツァーリ政府はモスクワ県のヴェレヤ郡とモジャイスク郡のシュヴァーロフ伯の農奴のうち特に子づれの女がかなりの割合で乞食をやっているのを見咎めていたのだが、第一次大戦前夜にあってもヴェレヤ郡のかつてのシュヴァーロフ伯の世襲領地の女たちがモスクワであたかも出稼ぎ営業のように乞食をやっていたのである。彼らはシュヴァーリキ Шувалики とよばれていた。[6] 私がたまたま見たのが一八四〇年代と記述する文献であり、それ以前に当地の乞食稼業をさかのぼることは可能かもしれない。

さて、都市部の乞食については、レヴェンスチムはより多くのタイプ分けを行なっている。それによれば、①「聖地巡礼者」と「墓掘人足」。前者は大きな祝日に教会に人があふれる時に、後者は人々が墓地にくる祖先供養の日にそれぞれ施しを求めて動き回る部分であり、次いで②「せむし」は自己の不幸な形相に対する同情と憐みを求めて通りや家々を徘徊する人たちで、この呼び名はとくにペテルブルグで認められる。③いつも黒服を着用しているが偽の巡礼者である Ерусалимцы で、これはペテルブルグに少なく、モスクワに多く見られる。④「火事罹災者 погорельцы」は中央部ロシアの郡都に多く出没し、アルテリを組む場合もみられる。⑤「移住者 переселенцы」は南部のハリコフ、オデッサ、ロストフなどの大都会に大量にみられ、ペテルブルグはこの巨大な人々の流れからはずれているから全く見られない。⑥「不具者 калеки」は首都より地方都市に多く見られ、オロネツ県では冬期に彼らが一〇日間ほどアルテリを組んで回る。最後に⑦「作家たち сочинители」は読み書きが出来るが、怠け者で酒飲みでついには貧民窟に陥った連中である。[7]

実は右の分類はペテルブルグの乞食稼業についてのA・И・スヴィルスキーの研究を下敷きにしたものであるが、おそらくモスクワについても多かれ少なかれあてはまるものであろう。分類の仕方の当否を問うことはいまはしないで、同時代人たちの命名法に関心を向けよう。特に「移住者」に乞食の一タイプを示す用語法が存在したことに改めて注目しよう。それは移住者の実態を正確に表現しているだろう。[8]

以上を簡単な前置きにして、モスクワ市における貧民（窮貧者）問題を労働力移動の問題を気にかけながら見てみたい。

困窮し放浪する子供たちの存在はこの町では一七世紀末から問題とされ、当初は教会ないし修道院が彼らを収容して読み書き、手職を教えたが、ピョートル一世期になり、彼らは「工場」へ移され労働力の一環に位置づけられた。こうした対応は一九世紀前半にモスクワ市の戦争孤児部局が本格的に浮浪児対策に乗り出した時にも採用され、一八三八年法はそうした子供たちをひとまず孤児院、養育院、労働院といった施設に収容したのである。既に触れたように、「モスクワ養育院」は子供を大量に農村へ送り、そこで手職を習わせた。[9]

モスクワ市がより一般的な慈善事業に乗り出したのはずっと遅く一八八七年以降のことである。カメネツカヤの整理によれば、それ以前はこの分野に関しても市の行政上の独自性はほとんどなかったとされる。例外的に市の施設であったのはルカヴィシニコフ孤児院[10]と市営宿泊所のみであった。市当局は一八八〇年代にこの事業へ直接関わる意欲を持続した結果、一八八七年に慈恵院 приказ общественного призрения の諸施設が市に移轄され、特に一八九三年、市側の請願をうけた政府が「義捐金の募集、扶養料の分配及び被扶養者に対する恒常的な監督のための」貧者に関する地区別保護機関の開設を認可したことがこの事業の本格化をもたらしたとされる。[11] 一八九六年のカメネツカヤは市内に医療援助施設をのぞき慈恵施設を五九数えている。そのうち「労働能力ある乞食に仕事を供給する」労働院 Рабочий дом は一八九四年に七八五人を扱っている。

市営宿泊所 городской ночлежный дом は一八七九年に開設されて、安価な食堂を付設した一八九四年には一日平均一三〇〇人に利用され、この年実に四八万二二〇二人（男三八万七九三八人、女九万四二六四人）ののべ宿泊者を数えた（一八七九年は年間一五万人弱）のだが、それに何倍かする貧者を収容しきれないでいた。[12] 彼らは私営の木賃宿に入るか、路上で野宿を強いられたのである。

勿論、モスクワ市における慈善事業を担ったのは市当局のみではなかった。一八八〇年代、約一万五〇〇〇人が一〇七の中小の私設救貧院の援助を受けていた。[13] A・H・ストレカローヴァが代表者となって、一八六三年三月、「勤勉奨励協会 Общество поощрения трудолюбия」が開設された。この民間団体は貧しい女に家での仕事を与えることを当初の目的とし、翌年には縫製学校をつくり、さらに無料医療活動をなし、一八七二年にはモスクワ市で最初の大衆無料食堂 народная кухня をヒートロフカ〔後出〕の「ステパーノフの家」に開いた。この団体はロシア最古の私的慈善団体である帝国博愛協会 Императорское человеколюбивое общество や養育院 Воспитательный Дом と協力関係にあったことから、当該問題に市当局以外に民間や政府も関心を抱いていたことの一端は観察されよう。[14]

問題の性格上市内に集積された貧民対策は市が中心となるべきであったかもしれないが、この国における地方自治的発想の貧困さないし欠除といった大前提は基本的に問題を未解決のまま放置したのであった。例えば、全市的な職業紹介所 Рекомендательная контора は一九世紀末に至ってもなく、かろうじて一八九五年四月にプレチステンと第一ハモフニキの二つの保護機関が共同して就業仲介所 Посредническая контора для приискания мест и занятий を開設したにとどまっていた。[15]

ブラドレーは二〇世紀初頭モスクワ市における住宅困窮者を全市民の三分の一にあたる約三五万人と推定している。このうち一万五〇〇〇人がホームレス、一八万人が一つのアパートの内部をさらに分けた一隅に寝台を借用する者である。後者の「部屋」代は、それでも、一ヵ月に六ルーブリ平均であったという。[16] ブラドレーの周到な推計手続きは説得力をともない、改めて驚くほどの住宅事情であったことを我々は知るのである。

モスクワ市に暮らす人々のいわば自己防衛的な居住形態が右の一八万人が採用していたといわれるものであって、それは自給的、共同体的かつ制度的なもので複数の部屋からなるアパートを一部屋ずつ使うとか、一部屋をさらに分

けるとかする人間関係にはふつう何らかの親密さが前提となるであろう。この点でブラドレーはアルテリによる居住形態の普及に着目して、一八九七年センサスでモスクワ市男子全人口の二五％（女子の場合は一〇％）がアルテリ型の世帯であったことを見て、住民の約二割もが共同世帯に居住したことは、労働市場の必要により形成と解体を繰り返すアルテリのような労働者の結合体がいまだに重要な社会的機能を果していることを示し、アルテリは住宅不足に対する集団的反応であると結論している。[17]

モスクワ市における住宅事情の劣悪さを維持し続けるのに力があったのは恒常的に出入りをする大量な人口移動と対策者の力不足である。モスクワ警察長官Н・И・オガリョーフの提案をうけたモスクワ総監В・А・ドルゴルーコフは一八六四年、モスクワ市会に対し流入者向けの木賃宿整備を進言したが、後者はさしてそれに関心を示さなかった。この問題に市会が重い腰をあげたのは、一八七九年にチフスが貧民窟を中心に流行したためである。その「成果」が既にのべたところのこの年に最初の市営無料木賃宿（収容五一〇人）としてロゴーシスカヤ区につくられた「市営宿泊所」であった。[18] しかし、その後市当局はこの面で格段の改善策をとらず、一八九七年にモスクワ市の住宅問題に関する提言をまとめたロシア技術協会モスクワ支部衛生部会は市営の低料金の風呂付き宿泊所をとりあえず一万人分建設すること、そして「流入する農村人 пришлый сельский люд」を恒常的な都市住民と分けることを主張したのである。[19] 技術協会側が後者をいうのは公営宿泊所の欠を補っている民間木賃宿が呈する余りの惨状に対するとりあえずの対応策とでもいったものであった。

・モスクワ市でそうした民間木賃宿が集中したのがミャスニツカヤ区第三地区に位置した、いわゆる「ヒートロフ市場 Хитров-рынок」あるいは単に「ヒートロフカ Хитровка」であった。ロシア帝国の首都の中心部に所在したこの貧民窟についてトルストーイ（「何をなすべきか」）もゴーリキー（「どん底」）も強い関心を抱き、特異な作家В・ギリャロフスキーはよくヒートロフカ探訪記を書いた。[20]

ここには広場を囲んで五棟の木賃宿があった。そのそれぞれについてはギリャロフスキーの叙述に詳しいのだが、最大の宿「クラコフの家」だけで六三室に三〇〇〇人が入っていたといわれ、一八八五年の市当局の数値はヒートロフカ全体で八七六八人を計上している。[21] これらの数字は市や警察が必要最小限の一人あたり空間なるものから割り出した適正人数を大きく越えており、さらに事態を深刻にしたのは季節により一時的にここの人口数が増大したことである。つまり復活祭後の春と聖母昇天祭（八月一五日）後の秋の年二期、ここはモスクワに職を求めて流入する大量の労働人民のいわば通過点となったのである。その時期には一人当り½立方サージェン（一サージェンは約二・一メートル）しか空間がないほどの混み具合いをみせた。[22]

ヒートロフカは労働力市場としてモスクワ市経済にとり重要な役割を果していたのであり、労働力の売買について公的な制度化が乏しい中、流入者のみならず失業者にとっても就職情報が飛び交う大切な場であった。地方からくる人々はここを一時的な住まいとして職を探したのだが、それがうまく行かず、ここでの滞在が長引くにつれ、周囲の飲酒、淫蕩、賭事の世界に身をもちくずし、自らヒートロフカの恒常的住人 хитровецы となる者も出たのである。[23]

ヒートロフカの住人たちの様相について、私はC・クーリンが『ロシアの富』誌一八九八年二号で紹介したミャスニツカヤ市保護機関による住人調査（三七二一人対象。内訳、男二六五七人、女一〇六四人）をとくに興味深く読んだ。クーリンはここの住人を①流入農民で職を求めている者たちで、それは農民外套（сермяга）か半外套（поддёвка）を着用していて一目でそうだと分かる部分と、②労働能力の喪失者でいつも放浪し飲酒しており、浮浪人（золоторотец）とよんでもよい部分に二分している。[24] この区分には同意できよう。

さて、ヒートロフカの住人の年令構成は全市平均よりも高いことは既に指摘されており、[25] 従って年少者は少なかったのであるが、この住人調査は二〇才以下を八・四%とし、その大半は手工業の徒弟稼業から逃亡してきた者たちであるとしている。[26] 一方、バフルーシンは一五四人の一〇才以下年少者乞食に何故ヒートロフカに入ったのかをたずね

たアンケート調査を紹介しており、それによると「居場所を失なう」が五六人で「不明」同数とともに最大数であり、次いで「モスクワに着いたばかりで居場所が見つからない」が一四人、「両親から追い出された」八人、「家族の乱暴から逃げた」五人などと続く。「子供の時からヒートロフカにいる」と答えた者は二人でしかない。[27]「居場所を失なったことの具体的内容は不明だが、モスクワでの酷な徒弟修業からの逃避場としての性格は否定しえないように思える。職を定めることを自ら拒否した若者はここを根拠地として、特に夏期には市外周辺を放浪して歩き回ったため、その数は減少したが、復活祭やクリスマスなどの大きな祝日に伴う稼ぎを期待して、その前には市内に戻ってくることを繰り返していた。[28]

住人調査は出生県も示していて、モスクワ県三九％、リャザン県一四％、トゥーラ県一二・八％。カルーガ県八・七％、トヴェーリ県五・八％、ヤロスラヴリ県五・六％、スモレンスク県五・一％、ヴラジーミル県五・〇％、その他三・四％である。また家族状況は大雑把に言って、男が独身五割、妻帯四割、男やもめ一割、女が独身四割、亭主持ち三割、寡婦三割である。[29]

職業分布の方は多い順に男は雑役労働者（三八・三％）、職人（二三・一％）、商人・店員（一一・三％）、召使（八・一％）、工場労働者（фабричные）（四・七％）等であり、女は召使（四三・三％）、職人（二六・四％）、雑役労働者（九・八％）、工場労働者（同上）（九・三％）、売春婦・乞食等（七・八％）等である。[30]男の雑役労働者は土方、暖炉工、木挽きなどで、圧倒的に流入者たちであり、一方、女の召使はとくに料理女、小間使が主である。

さて、クーリンはヒートロフカにおいて、「同郷たること」земляческоが一定の機能を果していることを指摘している。つまり、モスクワで同郷人を見い出すため、ヒートロフカの空いた場所に同郷人が宿なしの同郷人をよぶ傾向がある。さらにアルテリを組むなどしてモスクワへやってくる土方、暖炉工、泥炭生産工などは同郷人別に住んでいる。春になるとヒートロフカの住人たちは近郊へ散り労働するが、同郷人についての情報収集のためや秋の賃金精算

のあと同郷人と一緒に帰村しようとヒートロフカに集まってくる。具体的にどの職種を選択するかは、従って、出身地同郷人間にまかされる面が強く、それはすでに見てきたように多分に歴史的になされた選択でもあったのである。(31)

(1) A. Левенстим. Профессиональные нищество, его причины и формы, бытовые очерки. СПб., 1900, стр. 6.
(2) Там же, стр. 11.
(3) Там же, стр. 18.
(4) Там же, стр. 23.
(5) Там же, стр. 67-68, 75-88. Д. Н. Жбанков. Отхожие промыслы в смоленской губернии..., стр. 78. はスモレンスク県の乞食稼業にふれて、ドロゴブシ市（一万八九二四人）の町人は地元に稼ぎがなく、農民の間で「小営業的乞食業」をやっているという。
(6) С. В. Бахрушин. Малолетные нищие и бродяги в Москве (исторический очерк). М., 1913, стр. 11, 27.
(7) А. Левенстим. Указ. соч., стр. 50-64. ここで大きな比重を占めた「巡礼」一般については、とりあえず、中村喜和「ロシア民衆の宗教意識」の三（『民衆文化』、岩波書店、一九九〇年、所収）を参照。
(8) この点で参照されてよいのは、移動展覧派C・B・イヴァーノフの一八八九年の作品「途上で。移住者の死」である。
(9) とりあえず高田「近代ロシアの労働者教育」、一二一頁以下を見てほしい。
(10) これもとりあえず、同右、一二八頁以下を見てほしい。
(11) Е. Н. Каменецкая. Благотворительная деятельность Московского городского общественного управления. М., 1896, стр. 5-9.
(12) Там же, стр. 19-20.
(13) J. Bradley, Ibid., p. 260.
(14) Ведомства императорского человеколюбивого общества состоящее под покровительством государыни императрицы общество поощрения трудолюбия в Москве. Летопись первого двадцатипятилетия(1863-1888гг.). М., 1888, стр. 2, 14, 23, 61, 75. 「勤勉奨励協会」について、С. В. Бахрушин(стр. 29)の記述に混乱がある。
(15) М. Духовской. Указ. соч., стр. 2, 5, 9-10.
(16) J. Bradley, Ibid., p. 302.

(17) Ibid., p. 208, 225.
(18) Доклад комиссии по оздоровлению хитрова рынка..., стр. 6.
(19) Императорское русское техническое общество, Московское отделение, санитарная группа. Оздоровление хитрова рынка. М., 1899, стр. 6, 12.
(20) 彼の作品の一部は最近、邦訳が出た。『帝制末期のモスクワ』(村手義治訳)、中央公論社、一九八五年(中公文庫、一九九〇年)。『世紀末のモスクワ』(中田甫訳)、群像社、一九八五年。これらはともに Москва и Москвичи の訳。
(21) А. Петровский. Хитров-рынок и его обитатели. 《Вестник Европы》, 1894, №6, стр. 581-582.
(22) С. Курин. Безработные на Хитровом рынке в Москве. 《Русское богатство》, 1898, №2, стр. 173.
(23) 労働市場としてのヒートロフカについては多くの証言がある。例えば、Оздоровление..., стр. 3, А. Макаренко. Указ. статья, стр. 728-729, С. Короленко. Указ. соч., стр. 266-267 など。Е. С. Степанова (Указ. статья, стр. 147) はリャザン県バフマチェーエフスカヤ郷ドゥドキノ村では春になると女や娘、少年そして少しの男が徒歩でモスクワへ行き、ヒートロフカ市場で請負人の手配により主にズエヴォで泥炭生産に従事し、食費主人持ちで月に四―五ルーブリを稼いだ事例をあげている。
(24) С. Курин. Указ. статья, стр. 167.
(25) J. Bradley, Ibid., p. 278.
(26) С. Курин. Указ. статья, стр. 168.
(27) С. В. Бахрушин. Указ. соч., стр. 36.
(28) Там же, стр. 35-36.
(29) С. Курин. Указ. статья, стр. 169.
(30) Там же, стр. 170.
(31) 特にこの点で例外的であったのは売春稼業であって、そこには同郷人的結束などはなく、直接この稼業に入る者も少なかったことはエンゲルが二人の医師による調査結果を紹介して示している。それによれば、売春婦になるのは都市で数年、主に召使をやった者が多かった。B. A. Engel, St. Petersburg Prostitutes in the Late Nineteenth Century: A Personal and Social Profile, 《Russian Review》, vol. 48, no. 1, 1989, p. 28, 38.

九　おわりに

おそらく一八七〇年代末から一八八〇年代にかけての時期にロシア中央部のモスクワ地方には副業を不可欠とするような農民経営が構造的に成立し、標準的ないし中農的な最もふつうの農家は農業以外の何らかの稼業に従事していた。地域的にみて、歴史的にクスターリあるいは小営業の伝統に欠けて専ら農業にたよらざるをえない、本論で農業郡とよんだ地方では近くに適当な手間稼ぎ場がないためにやおら遠方への出稼ぎを強いられたが、たまたま何かの手職を持つ連中がまとまればアルテリを組んでの旅を長年に渡り繰り返したし、そうでなく専ら単純肉体労働にはげんで農業日雇い、泥炭掘りをやる人たちもいた。一方、本論で工業郡とよんだクスターリ的伝統に富んだ地方では事情は逆転し、地元で副業にはげむ割合が過半を占め、遠方への出稼ぎはその必要を認められず、また農民自身もそれを望むところではなく、むしろ減少したのである。筆者は農業郡では出稼ぎ営業七、地元営業三、工業郡ではその逆の割合ぐらいだろうと推定している。

モスクワ県ボゴロツク郡のような中央工業地帯核心部では本格的な繊維工業が成立・展開をみせていたから、こうした地方では農民たちはますますもって地元での賃稼ぎに精を出すところとなった。この地方でみられた、工場制工業とそれを支える農民工業とから成る二重経済は近代ロシアの工場労働者のあり方を最も典型的に特徴づけたといってよく、半径数キロメートルを基礎単位とする労働市場が工業村をとりまき、そうした小宇宙がここにまさしく散在したのであった。そのそれぞれでは労働者である農民の振り子移動がみられ、工場労働は世代を越えて継承されたのである。このような農家と地元工場をワンセットにした関係はこの時期に等しく確実に家々をとらえたために、工場の基幹労働力となる部分は周辺農家から一定量をコンスタントに供給され続けることになった。

右にみたような労働関係が存在した中央工業地帯の中心に浮んでいたのがモスクワ市であった。モスクワは決して第一級の工業都市ではなかったが、低技術・低技能な仕事を大量に供給しうる場所であったことから、周辺から人々が稼ぎをもとめて絶えず流入した。この限りでモスクワは農村からの逃避場であり、それは最大限モスクワ地方全域から労働力を吸収した。市在住者の半数以上は農村からやってきた単身出稼ぎ者であり、彼らの一部はヒートロフカを形成し、それを維持した。モスクワへやってきた男は妻を農村に残すか、帰村して村娘と結婚し再びモスクワへ出たから、この町と農村とは人間関係上も強く結合されていた。当該期に激しく進行した家族分割の結果生み出された、男子の働き手が一人しかいない「個人経営型」の農家の場合はことのほか右の人間関係を指摘しえたであろう。大家族制の崩壊とともに寡婦の面倒をみる家族が失われたことも寡婦をわざわざ都市へ押しやり、長期に滞在させるのに力をかした。

一方でモスクワという町は恒常的に大量の人をはき出し続けた。出稼ぎ者、労働能力を弱化した高齢者そしてこの町で生みおとされた私生児たちが農村へ還流した。

細かなニュアンスをさして気にせず乱暴に言えば、筆者はこれまでこうしたことを述べてきた。

本論表題を大きく「労働者と農民」としたが、そうしたのは両者の境界を一旦はずしてみることが「存在する」労働者を観察する前提になるだろうとする見通しに立ってのことであった。

本論では労働市場とかモスクワ市、往復運動などといった「場」に関わる概念あるいは具体例を意識的に多く扱った。ここでは人々の生活をとりしきった日常的空間のひろがり全体を気にかけた（勿論、それがいまだ十分でないのはよく承知している）。改めて言うまでもないのだが、こうしたことはこの時期の「労働者」のあり方を土地との関係（所有するか、農作業に関わるか）に専ら限定して考えようとすることに対して異をとなえようとする意図からであった。

「労働者」とか「農民」とかとかく人は何らかのカテゴリーを第三者に対し用いようとするのだが、そうしたカテゴリー自体が多くの抽象を経た後の産物であり、歴史的具体的対象へのその適用は時としてむしろ有害でさえありうることは承知しておいてよいことのように思える。そうすることで、無色透明ないし無味乾燥した、改めて語らずもがなの叙述がなされうること、あるいは事態の一面のみを誇張し、均衡を欠いた叙述がなされうること、これらのことは実際例とともに心得ておいてよいことのように思える。

本論は結果的に「農民的な労働者」（こうした言い方はしたくないが、とりあえずしておく）の存在を重視し強調するものになっていると思う。この限りで私の議論は例えばジョンソンのそれに近い。だが、労働者の世界は多様なファクターから成り立ち、ロシアの場合もその例外ではなかった。ジョンソンはいわば「農民的な労働者」論で全体を押し切ろうとするが、少なくともう一つの、独自な文化、教育、イデオロギーを供給する「都市」がもたらす、「農民的な労働者」とは異なる労働者群の存在をもみようとする私は彼と立場を分けることになる。その議論には別の場所が用意されるべきである。(1)

（1）とりあえず、高田和夫「近代ロシアの労働者教育」、同じく「チャイコフスキー・サークルと労働者」、［九大］『社会科学論集』二一集、一九八一年二月をみてほしい。

【付記】本稿は一九八九年七月一五日、北海道大学スラブ研究センター研究報告会で行った報告「近代ロシアの労働力移動について」を大幅に補正したものである。